

靈界物語 第六四卷下 山河草木 卯の卷下

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第六四卷下』愛善世界社

2004(平成16)年08月27日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。

編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

目次

序文じよぶん

總説そうせつ

第一篇

復活轉活ふくくわつてんくわつ

第一章

復活祭ふくくわつさい（一八〇七）

第二章

逆襲ぎやくしふ（一八〇八）

第三章

草居谷底くさゐたにぞこ（一八〇九）

第四章

誤靈城ごれいじやう（一八一〇）

第五章 横戀慕（一八一—）

第二篇 鬼薊の花

第六章 金酒結婚（一八一—二）

第七章 虎角（一八一—三）

第八章 擬侠心（一八一—四）

第九章 狂怪戦（一八一—五）

第一〇章 拘淫（一八一—六）

第三篇 開花落花

第一章 狂擬怪（一八一—七）

第一二章 開狂式（一八一—八）

| | |
|------|----------------------------------|
| 第一三章 | 漆別 <small>うるしわけ</small> 〔一八一九〕 |
| 第一四章 | 花曇 <small>はなぐもり</small> 〔一八二〇〕 |
| 第一五章 | 騷淫 <small>さういん</small> ホテル〔一八二二〕 |

第四篇 清風せいふう一過いつくわ

| | |
|------|--|
| 第一六章 | 誤辛折 <small>ごしんせつ</small> 〔一八二二〕 |
| 第一七章 | 茶粕 <small>ちやく</small> 〔一八二三〕 |
| 第一八章 | 誠 <small>まこと</small> と偽 <small>いつはり</small> 〔一八二四〕 |
| 第一九章 | 笑拙種 <small>せうせつだね</small> 〔一八二五〕 |
| 第二〇章 | 猫鞍干 <small>ねくらほし</small> 〔一八二六〕 |
| 第二一章 | 不意 <small>ふい</small> の官命 <small>くわんめい</small> 〔一八二七〕 |
| 第二二章 | 歸國 <small>きこく</small> と鬼哭 <small>きこく</small> 〔一八二八〕 |

〔 〕

序文 じよぶん

大正乙丑八月十四日、松村、加藤、北村の筆の勇者と、田中艶子を伴ひ、秋山彦の舊蹟地なる和知川の下流由良の港に安着し、海水浴に浸り乍ら、寸暇を利用して、日下開山の續編を口述する事と致しました。

北丹分所長嵯峨根民藏氏、新舞鶴支部長村山政光氏の厚情に依り、銷夏の歡樂に浸り得たることを感謝に堪へませぬ。毎日日本海の波に親しみ、大本に最も由緒の深き男島女島の神域を拜し乍ら、心靜かに述べ了りました。

大正十四年八月二十一日

總説

本卷は山河草木日下開山の後編であります。ウラナイ教の神柱、お寅、守宮別、お花のローマンスや、ブラバーサの聖地に於ける活動の状況を述べたものがあります。ヘグレのヘグレのヘグレ武者の妄動振り、お花の意氣地、守宮別の奇妙な蠢動する光景などは如實に描き出されてあります。

大正十四年八月二十一日

第一篇 復活轉活

第一章 復活祭（一八〇七）

十二日は聖師ウズンバラ・チャンダーの降誕日に相當するので、ブラバーサは草庵を立つて其吉辰を祝すべく、橄欖山の聖地に參詣して、熱烈なる祈禱を捧げたり、今日は常よりも緊張した氣分で、且つ敬虔な態度で山を下り、アメリカンコロニーにも立寄り、聖師に會つて神徳談を交換し、日没前袂を別ち、歸途カトリックの僧院ホテルに立寄つた。恰も當日は聖キリストの復活祭で全基督教會は之を大聖日として一齊になる祈禱が捧げらるるのである。舊教も新教も何れの教派を問はず、最も榮えある福音として此の聖日を迎へるのである。そして舊教の方面から見ると當年は聖年に當つて居るが、その聖年中の復活祭として乙丑の四月十二日を最も祝福する事に成つてゐる。大體カトリック教會では三月第三回目

の水曜日から聖年は四旬節に入つてゐるのである。祈りと、斷食と、苦行との節が初まるのである。即ち祈り、苦行、斷食等の犠牲がこの四旬節に行はれる。そして四月に入ると五日から十二日の復活祭まで是を大週又は聖週として五日を聖枝の主日、又は棕櫚の主日と云ふのである。

□ 弟子たち往きてイエスの命じ給ひし如くに爲し、牝驢馬とその子とを引き來たり、己が衣服を其上に敷き、イエスをこれにのせたるに、群集夥しく己が衣服を道に敷き、ある人々は樹の枝を切りて道に敷きたり。先に立ち從へる群集呼ばはりて、ダヴィドの裔にホザンナ、主の名によりて來たるものは祝せられ給へ。いと高きところまでホザンナを言ひ居れり□

即ちイエスがエルサレムに入つた時、人々は道に着物や木の枝を敷いて歡迎した其日なのであるが、四五日を経てそれ等の人達は其のイエスを十字架にかけたのである。

九日は聖の木曜でイエスが死没の前夜、弟子を集めて最後の晚餐を催し聖體の秘蹟を定めた日である。この日司教座の在る聖堂では聖香油を造ることに成つて

ある。

十日は聖の金曜であつて、イエスが十字架に上り死刑に處せられた日である。米國あたりでは午後一時から三時まで、即ち其刑の執行時間を、皆店を閉ぢ商賣を休む習慣の所もあると云ふことである。

十一日は聖の土曜で復活の光明が仄かに刺した日である。さうして、十二日の復活大祝日となるのである。

「おそるること勿れ。汝等は十字架につけられ給ひしナザレのイエスをたづぬれどもかれは復活し給ひて、ここにはましまさず」

そして此の聖週が終つても、十三日を復活第二の主日となし、
「汝指をここに入れて、我手を見よ。手を延べて我が脇に入れよ。不信者とならずして信者となれよ。トマス答へて、「主よ、わが神よ」と言ひしかば、イエスこれに言ひけるは、トマス汝はわれを見しによりて信じたるか。見ずして信ぜし人々こそ福なれ」

そして十四日をその第三の主日とするのである。

「我は又この檻に屬せざる他の羊をもてり。かれ等をも引き來らざるべからず。さて彼等我聲をきき、かくて一つの檻、一つの牧者とならむ」

これらの教を各教會に於て一齊に説かれて居るのである。

ブラバースが立寄つた僧院ホテルの別室には數多のカトリック教徒が集まつて、此の聖日を祝すべく、復活祭第一の主日の祭典や祈禱を行つてゐた。

ブラバースはルートバハーの聖師の生誕日に當つて、此の僧院に嚴肅なる儀式が行はれてゐる事を何となく嬉しく、且つ神縁の絡まれたる不思議さに感歎しながら、式の終るを待ち、末座に敬虔な態度で祈禱を拜げ、感慨無量の面持であつた。

ホスビース・ノートルダム・フランスのこの加特力僧院ホテルを經營してゐる司教テルブソンは、先頭に立つて神の御前に三拜し、一同の信者と異口同音に左の讚美歌を唄ふた。

二

御祖みおやはあれまし 道みちを説とけり
 なやみに住すむ人ひと 求まぎて來きたれ
 智慧さとのみはしら 世よに降くだれり
 よはき人々ひとびとよ 來きたりまなべ。

三

伊都いづの大神おほかみは 世よに降くだれり
 よろづの人々ひとびと 來きたりたのめ
 身み魂たまをきよむる 神かみの清しみづ水
 汚けがされし人ひとは 來きたりすすげ。

美都みづの大神おほかみ 世よに出いでます
 なやめる人々ひとびと 來きたりたのめ

生命いのちの御親みおやは 世よに降くだれり
つみにしみし人ひと 求まぎて生いきよ。

四

美都みづの御柱みはしらは 世よに生うまれぬ
うへした諸共もろとも 來きたり齋いっけ
天地あめつちのはしら 御世みよに降くだる
すべてのものみな 勇いさみうたへ。

一同美聲いちどうびせいを揃そろへて四邊しへんの空氣くうきを清きよめたる讚美歌さんびかの奉唱ほうしやうも無事ぶじ終了しゅうれうし、司教しけうのテ
ルブソンはさも莊重さうじゆうな聲こゑにて一場いちぢやうの演説えんぜつを試こころみた。

御一同様ごいちどうさま、今日こんにちは吾々われわれ信者しんじやに採とつて最もつとも慶けいすべき吉辰きつしんでムいます。メシヤの復ふく
活わつあそばされて、天國てんこくの福音ふくいんを世界せかいの同胞どうほうに垂たれさせ給たまひました主しゆの日ひでムいま
す。就ついては主しゆの御約束遊あそばした聖地せいちエルサレムへ御再臨ごさいりんの時期じきも追々おひおひと近ちかづいた

様に拜せられ、吾々は實に神様より選ばれたるピュリタンとして、此上の光榮は在るまいと思ひます。皆様、主は「我が来るは平和を出さむ爲では無い。刃を出さむ爲に來れり」と仰せられてゐるでは在りませぬか。吾々は主再臨の好時期に生れたものですから、餘程の覺悟を致さなくては成りません。現代人の多數は宗教の力に依つて、或は絶對的信仰の力に依つて、眞善美の行爲を現はし、家庭の圓滿を企畫し、自己の人格を向上し、社會國家を益せむものと焦慮してゐる様でゐますが然し私は思ふ、ソナ怪智くさい考へを以て信仰が得られませうか。刃を出す覺悟が無くては再臨のキリストに救はる事は出来ません。信仰の爲ならば、地位も、財産も、親兄弟も、知己も、朋友も一切捨てる覺悟が無くては駄目です。信仰を味はつて家庭を圓滿にしよととか、人格を向上させやうと云ふやうな功利心や自己愛の精神では堂して宇宙大に開放された、眞の生ける信仰を得る事が出来ませうか。自分は世の終りまで惡魔だ、地獄行きだ、一生涯世間の人間に歡ばれない。かうした悲痛な絶望的な決心が無くては、此の洪大無邊にして、有難い尊い大宇宙の眞理、眞の神様に觸れる事が出来ませうか。某聖者が地

獄一定と曰はれたのは此處にある。某聖者は世を終るまで悪人たる事を覺悟されてみた。主イエス・キリストも神様の御命令とあれば何事も敢て辭さないと曰ふ覺悟を持つて居られたのであります。一切の囚はれより、一切の欲望より、一切の執着より、眞に離れ去つた時、それは眞に胸中無一物、空の空であり無の無である。その時の心境こそは鏡の如く晴れ渡り、澄み切り、總ての事象は如實にその心境に移り来る。その時こそは眞に絶對の自由と平安と、幸福は立どころに與へられ、さうして過去の一切の經驗は一つの偉大なる力となつて、現在の一點に躍動するものであります。即ちこの瞬間の一點を踏みしめ踏みしめ凝乎と足許を見極めて精進するやうになれば、そこに所愛の創造があり、進化があるのです。私は平素この精神を以て信仰生活を終始して居るのです。私はこの僧院の司教として斯る信仰を持ち、聖キリストの再臨を待つて居るのですが、世間の一般からは外道惡魔の様に批評されてゐます。併し乍ら斯る暗黒の世の中にも私只一人三五教の宣傳使ブラバサ様の知己あることを光榮と存じて居ります。兔に角キリスト再臨の間近く迫つた今日、總ての因習を捨て神様の愛に向つて猛進せなくて

は成りませぬ。善だとか悪だとか天國地獄などに囚はれて居ない私は皆さまに向
つて何も申上げる原料も持説もムいませぬ。故に今日は主の復活聖日を祝福し皆
さまと共に神を讚美し奉ることに止めておきます。アーメン」
と合唱し降壇した。拍手の聲は急霰の如く僧院ホテルの内外に響き渡つた。

次にスバツフオード聖師は立つて一場の演説を試みた。

「皆様今日は實に有難い主イエス・キリストの復活あそばされた聖年聖日でムい
まして、吾々は斯の立派な僧院におきまして、兄弟姉妹と共に主の日を讚美し祝
福することの光榮を感謝せずには居られないのでムいます。吾々兄弟姉妹は、こ
の目出度たき聖日をして意義あるものたらしめねば成りませぬ。そして傳統的ブ
ルジョアの宗教や、傳説や口碑に因つて飾られたる既成宗教の殻を脱いで、時代
を指導するに足る宗教の運動に生きなくては成りませぬ。吾々の團體は創設以來
數十年の日子を経過いたしました。そして聖キリストの再臨を待望して参りまし
た。やがて待ち焦れたるメシヤの御再臨も近い事と考へさして頂いて居ります。
今度顯はれたまふ主エス・キリストは時代相應の理に依つて屹度英雄的色彩を濃

厚こうに持もつて御降おくだりになる事ことと信しんじます。

熟々つらつら現代げんだいの世相せさうを視みれば一方いっぽうには文學ぶんがくを恥はぢて武勇ぶゆうを好このむもの、一方いっぽうには文學ぶんがくに耽溺たんできして武備ぶび撤回てつくわいを主唱しゅしやうするもの、仁義じんぎの士しを賤いやしみ且かつ愚者ぐしや扱あつかひを爲なし、權けん謀術うじゆつ數すうに長ちやうじたるものを紳士しんしと崇あがめ、治獄ぢごくの吏りを貴たつとみ、惡法あくはふを施行しかうし、正言眞語せいげんしんごを唱となふるものを以もつて誹謗ひばう者と看み做なして獄ごくに投とうじ、奸邪かんじやを重用ぢゆうようして政事まつりごとの樞機すうきに列れつせしめ、過あやまちを防遏ぼうあつせむとするものは之これを妖言えうげん者と貶けなし、流言浮説りうげんふせつ者として壓迫あつぱくを加くはへ、先聖せんせいの法服はふふく世よに用もちひられず、忠良ちうりやう功言こうげん皆胸中みなきゆうちゆうに鬱うつし、譽諛よゆの聲こゑは日夜にちや耳みみに滿みち、虚榮きよえいと美食びしよく心を薰くんじ、實行じつかうなく、口説こうせつのみ盛さかんにして、社會しやくわいの滅亡めつぼう眼前がんぜんに迫せまるの心地こちちが致いたします。斯かかる時代じだいに際さいして一大英雄いちだいえいゆう即すなはち救世主きうせいしゆの降臨かうりんが無なかつたならば、最早もはや世よは暗黒あんこくより道みちはないでせう。神しん的てき英雄えいゆうなるものは國家こくか又は社しや會かいの實體じつたいとも曰いふべきものであつて、國家こくかも社會しやくわいも要えうするに英雄理想えいゆうりさうの具現ぐげんの形式しきであります。凡すべて英雄えいゆうの無なき國家社會こくかしやくわいは精靈せいれいの脱出だつしゆつした人間にんげんの屍體したいも同様どうやうであります。精神せいしんの脱出だつしゆつした人間にんげんの肉體にくたいが恣意ししいなる五欲ごよくの亂起らんきによつて自みづからの破滅はめつに終をはるが如ごとく之これを大統だいたうする神雄聖者しんゆうせいじやの缺如けつじよは、常つねに國運こくうんの衰弱すゑじやく、否死滅いなしめつも同様どうやうであ

らうと思ひます。今日の世の中は文化の低下せしにもあらず、生産の減少にもあらず、僧侶宣傳使の尠きにもあらず、兵備の整はざるにもあらず、然るに昨日の隆盛も今日の沈衰、徑庭かくの如く甚だしきものは何の理由ぞ。要するに國家社會本來の意義を體得した大統的偉材の缺乏せるが爲で亾いませう。故に私は民衆的力をば信ずることは出来ませぬ。獨り神雄的聖救世主の出現を待つのみで亾います。

主エス・キリストが山上に訓を垂れさせ玉ふや、群集は其の教に驚き、孔子の春秋を作つて發表するや、亂臣賊子をして悚懼せしめたでは亾いませぬか。そは主キリストや孔子は所謂學者等の如くならずして、權威あるものの如くであつたからでありませう。今や世界の民は自ら驚かむことを求めつつあります。今日の人民は既に自分等が不平の代辨者の饒舌に倦み果てて居ります。今日の人民が鶴首して待つて居るものは、金切聲を搾つて彼等自身の窮状を説明するものではなくて、神の如き威嚴を以て其の進路を指すものの出現であります。神に於てはその言ふ所は即ち行ふ所となるのであります。徒に民と共に叫び、民と共に躍る如

きは是れ雪上更に霜を加ふるの類であつて、吾々眞に天下の重きを以て任ずる信者諸士の深く恥る所なのであります。何卒吾が敬愛なる神の御子たちよ、民衆の煽動に乗ずること無く、隠忍自重して以て神雄偉人としての聖キリストの再臨を待たうぢやムいませぬか。アーメン[㊦]と結んで演壇を降る。急霰の如き拍手の聲に満堂揺がむ許りの光景であつた。

ブラバーサは壇上に悠々と立上り、暗祈黙禱の後、聴衆一般に向つて敬意を表し、コツプの水を一杯グイと呑干し乍ら、咳一咳して曰く、

「皆様、今日は實に目出度き主の復活日でムいまして、地球上の人民は、老若男女の嫌ひなく、此聖日を欣仰せない者はムいますまい。殊に吾々御互は神様の寵兒として、親しく神様にお任せさして頂いて居ります點からしても、特に讃仰せねばならないと存じます。思想界の惡潮流は世界に氾濫し、今や地上の神の國は破滅せむとするの勢ひでムいます。一時も早く此暗黒の帳を開いて、明晃々たる日出の御代を來すべく、吾々は努力せなくてはなりません。斯く論じ來る折、聴衆の中よりやをら身を起し、満面朱を濺ぎ乍ら、ツカツカ

と壇上だんじやうに上のぼつて來きた婆ばばアは、日出島ひのでしまからやつて來きたお寅とらであつた。お寅とらはブラバ
サに向むかひ、

「コレ、お前まへはブラバ―サぢやないか。今いま聞きいてをれば、一時いちじも早はやく日出ひのでの御代みよになる様やう、吾々われわれは努力どりよくせねばならぬと云いつたぢやないか。日出ひのでの御代みよにするのは、ひのでのくに天職てんしよくぢやぞえ。そして日出ひのでの島しまから現あらはれた此日出このひのでの神かみが本當ほんたうの世界せかいの救世主きうせいしゆだ。日出ひのでの神かみの因縁いんねんが聞ききたければ、此御本尊このごほんぞんに聞きいたが一番いちばん近道ちかみちだ。ひつこみてゐなさい。へん、偉相えらさうに、宣傳使面せんでんしづらをさげて、何なんのこつちやいなア。コレ皆みなさま、こんなバチ者ものに耳みみをかす必要ひつえうはありませぬ。誠まことの救世主きうせいしゆ日出ひのでの神かみは此お寅とらでムいますぞや。第一だいいち此ブラバ―サなぞは、面つらからしてなつてゐないぢやありませんか。梟鳥ふくろどりのやうな目玉めだまをして、土左衛門どざゑもんのやうに青あをぶくれた面つらして、此ザマつて、ムいますまい」

聽衆ちやうしゆの中なかより、

「お寅婆とらばばア、退却たいきやくだ退却たいきやくだ、引ひずりおろせ」と叫さけぶ者ものがある。又また一方いつぱうよりは、

「ブラバーサ聖師、確り頼みます」
と叫ぶ者もあつた。お寅はクワツと怒り、聴衆を睨めつけ乍ら、
「ヘン盲聾と云つても餘りぢやないか。これでは神様も御苦勞ぢやわい。警鐘亂
打の聲も雷霆叱咤の響きも、耳に這入らぬといふ御連中の多い世の中だから、三
千世界の立替立直しを双肩に擔うた此日の出の神も、本當に迷惑を致しますわい。
此ブラバーサといふ立派な宣傳使は、お前さま方遠國の事で何も知らぬだらうが、
今此お寅の救世主が素性をあかし、皆さまのお目をさましてあげませう。ウズン
バラチャンダーなどと申す偽變性女子の頭使に甘んじ、キリスト再臨の先驅だ
んと自惚して、ぬつけりこと此聖地に參り、あらう事か、あるまい事か、神聖に
して冒す可らざる、オリブ山の聖場に於て、夫れは夫れはいふに云はれぬ、とく
に説かれぬ、話にも杭にもかからぬ、面白い怪體な亂癡氣騒ぎを遊ばすといふ大
紳士でムいますから、ホ、ホ、ホ、。餘り可笑しうて臍が茶を沸しますぞや。ここ
迄いふたら、大抵のお歴々方は略肯かれませう、アメリカンコロニーの牛耳をと
つてゐるといふマリヤさまと、それはそれは、ヘン……もう後はいひますまい。

同席するも汚らはしい。ブラバーサさま、良心があるならとつとと退却なされませ。ようマアぬつけりことこんな所へ、横柄な面をして上られたものだな。早くシオン山の隠處へでもひつ込んでゐなさい。日出の國人の可い面よごしだよ」

ブラバーサはやをら身を起し群衆に對ひ、

「皆さま、私は折角の此聖日に當りまして、皆様と共に主の日を祝し奉り、尚將來の御相談を致したいと存じましたが、斯の如く邪魔が這入りましては、お話しする譯にもゆかず、又皆様も喧嘩をお聞きにお出でなさつたのぢやムいませぬから、私は一寸控えますから、どうかお寅さまの演説を聞いて上げて下さいませ。匹夫の言にも得る所ありといふ事もありませんし、まして三千世界を統一し、且改良するといふ大責任を自覺してゐる御方ださうでムいますから……」

「そら、何アーンと仰有る、匹夫の言とは誰の事だ。大方蛙は口から自分の事を云つてるのだらうな。匹夫といへば男のこと。此お寅は、淑女否神女だ。神女と匹夫と混同するやうな事で、どうして宣傳使が勤まりますか」

ブラバーサは耳にもかけず、サツサと降壇し、聽衆の中に交つて、ハンケチで

汗あせをふいてゐる。お寅とらは勝誇がちほこつた面持おももちにて、稍やや反そり身みになり乍ながら、コツプの水みづを二三杯にさんばいつづけさまにグウグウとひつかけ、餘あまりあわてて、水みづが氣管支きくわんしの中なかへ浸入しんにふし、コホンコホンと咳拂せきはらひ止やまず、目めから一杯いっぱい涙なみだをこぼし、卓テーブルにもたれて、しやがんで了しまつた。そこへ守宮別やもりわけはお寅とらの演説えんぜつを補おぎなはむと、ツブ六ろくに酔よひ乍ながら、ヒヨ口ヒヨロリと登壇とうだんし、

「皆みなさま、お寅とらさまは、中途ちゆうとに負傷ふしやうを致いたしましたので、拙者せつしやが代かはつて代理だいいりを勤つとめます。どうぞ不惡思召あしからずおほしめし下くださいませ。私わたしは自轉倒島おのころじまから案内役あんないやくとして、お寅とらさまに頼たのまれ參まゐつて來きた者ものでムいりますが、別べつにお寅とらさまの説せつを信しんじたので、お寅とらさまに神格しんかくに感動かんどうしたので、もありませぬ。付ついてはブラバ―サ君くんに對たいしても同様の考どうやうかんがへを持つてをります。とに角世かくよの中なかは偽救世主にせきうせいしゆ、偽にせキリスト、偽豫言者にせよげんしやの横行闊歩わうかうくわつぽする最中さいちゆうですから、どれがホン物ものか偽者にせものか、一寸判断ちよつとはんだんに苦くるまざるを得えませぬ。キリストといふ事ことは日ひの出での國くにの言葉ことばでいへば、……油あぶらをそそぐ者もの……とかいひますが、油あぶらを注そそぐ事ことに付ついて最もつとも堪能たんのうなのは此このお寅とらさまですよ。喧譁けんくわの火ひが燃もえ盛さかつてる所ところへ、薪たきぎを放ほり込み油あぶらを注そそぐやうな事ことを得意とくいで爲なします。それで火ひの勢いきほひが

益々強くなるので、それで火の出神と自稱してゐるのであります。ヤソといふ事はイエスともいひ、イエスは癒やすといふ事にもなり、要するに薬といふ事です。くすりは「ヤク」となる、「ヤク」は薬師如來です。ヤソコスです。それで薬の最秀れた物は酒です。これ位効験のある神は世界にゐいますまい。一口のみてもすぐに頬にホンノリと赤味が出て来る。二口三口と呑めばのむ程心が浮いて、世の中が面白くなつて参ります。つまり天國が忽ち出現するのです。それに何ぞや、禁酒禁煙だとかキリストの信者はいつてゐますが、これ位矛盾した事は世の中にゐいますまい」

などとへべレケに酔ふて酒宣傳をやつてゐる。其間にお寅は喉の調子が直つたとみえ頭を擡げ、守宮別の側にあるのを見て、百萬の味方を得た如き気分になり、
「皆さま此方は守宮別といひまして、日の出の島切つての聖人でゐいます。併し乍ら少し許り今日は聖日を祝する爲に、お神酒をあがつてゐられますから、チツト許り脱線の氣味があるかも知れませぬが、脱線する様な人間でないと正當な事は分りませぬ。御覽なさい、汽車でさへ餘り勢よく走ると、勢が餘つて脱線する

でせう。さうだから其積りで聞いて貰はんと、取違されると困りますから、一寸御注意を與へておきます」

聴衆は四方八方よりワイワイと騒ぎ立ち、「引きずりおとせ……放り出せ」と
唖鳴り出したり。演説を聞に來てゐた、回々教の信者トク、テク、ツ―口の三
人は矢庭に壇上に驅上り、トクはお寅をかたげ、テク、ツ―口は守宮別をかた
げて、ヨイシヨイシヨと囃し立て乍ら、僧院ホテルの裏口より何處ともなく驅
出して了ふた。之よりブラバ―サは再壇上に立ち、救世主の再臨に關する演説や、
世界共通語の必要なる所以を説き、次でマリヤの簡單なる演説あり、神前に拜禮
を了り、茶菓の響應あつて目出度く此聖日祭を閉づる事になつた。

（大正一四・八・一九 舊六・三〇 於丹後由良秋田別莊 松村眞澄録）

第二章 逆襲（一八〇八）

ブラバ―サは僧院ホテルの祝祭は無事に済んだが、同じ日出島から出て来たお寅や守宮別が、亂暴極まるアラブに搔攪はれ行衛不明となつたので、「人情上、捨ておく譯にも行かまい。あく迄彼を探し出し救けねばなるまい」とマリヤと相談の上、十二日の月光を浴び乍ら、夜の十二時頃からエルサレムの町をうるつき初めた。

市街の十字路、キラキラと瓦斯燈のきらめく側に皺苦茶の婆が立つて、三千世界の救世主、日出の神の生宮の所在は何處ぞ、亡びむとするエルサレムの民よ、早く目を覺ませ。天來の救世主の在處を求めよ」
と叫んでゐる。神都の雑音は愈ふくれ廣まつた。荒々しい獸のやうに行人の目先を掠めて、夜分とは云ひ乍ら左右に黄色い砂塵に包まれた電車や、プーと不愉快な警笛をならし、最後屁を放り乍ら自動車が入り亂れて走り交ふ。どうしたものがエルサレムの市中は俄に電燈が消えて、闇の凝が天から落ちて來た。ブラバ―サもマリヤも街路に佇立し、一心不亂に祈り初めた。
電車も自動車も馬車も一時に運轉を中止し、水を打つたる如く俄に靜寂となつ

た。パツと一時に電燈がついた。家々の店の大飾り窓に火がつくと、ここに佇んでみた二人は俄に見分けのつかなくつた。黒暗の凝にとけて、その面相が判然として来た。よくよく見れば一人の婆アさまは「あやめ」のお花であつた。お花は俯向いてシクシクと泣いてゐる。ブラバ―サはツカツカと側により、

「ヤア、貴女はお花さまぢやありませんか。お寅さまは、どこに行かれたか御存じではありませんか」

「ハイ、所在が分るやうな事なら、コンナ處に誰が阿呆らしい、立つて居りますか」

「大變な御立腹ですな。實は私もマリヤさまと相談して、同じ日出島の同胞でもあり、打ちやつておく譯にも行かぬからウロウロと尋ねて居るのですよ」

「それはどうも御親切ありがとうございます」

と腮をつき出す、その面憎さ。電燈の火に二つの目が異様にきらついて居る。

「誠に思はぬ御災難でムいまして、あのトンク、テク、ツ―口と云ふ奴、實に仕方のない、アラブですよ。妾がいつぞや橄欖山に行きました際、危なく手込めに

しようとするのを、このブラバーサさまに救けられたのですよ。實に險呑な人物ですから油斷はなりません。

「ハイ、御親切に有難う。その又悪い奴をお使ひ遊ばす、貴方等の御腕前、感じ入りました。ようマア企みたものですわい、ウフ、、、」

と又もや腮を二三寸つき出して見せる。

「お花さま、貴女は、吾々に何か疑をかけてゐらつしやるやうですが、吾々は迷惑に存じます。この通り電車や自動車の往來が多いので險呑でもあり、通行係がやつて来てゴタゴタ云はれるのもつまりませぬし、何處かの座敷でも借つてトツクリと御相談でもしませうか」

お花はブラバーサがアラブを豫め頼んでおいて、お寅をさらへさしたに違ひない、何れこの二人をとつちめて白状させた方が近道だと思つたか、俄に顔色を和らげ、

「ハイ、さう願へば結構でムいますな。何と云つても、きつてもきれぬ同胞ですから、海洋萬里を渡つて異境の空に神様のために働いてゐるものですから、かや

うな時は常は常として、親切を盡すのが神様に對して孝行と云ふもの、つきましては、私が常日頃心安くしてゐる茶屋がありますから、それへ参りませう。さア私について来て下さいませ」

と早くも南の方を指して二三丁許り細い路地を潜つてトルコ亭と云ふ茶屋の裏座敷へ案内した。ブラバ―サとマリヤは黙つてお花の後に對して行くと、ここはお寅が宣傳の巢窟と見えて大きな看板がかかつてゐる。

「三千世界の救世主、大彌勒の生宮、日出神の御靈城」
と筆太に掲げてある。さうして神殿には日の丸の掛軸が只一つブラ下てある。

「ヤアこれはこれは大彌勒様の御靈城でムいますか。私も永らくエルサレムに居りますが、こんな靈城が出来て居ると云ふ事は今日初めて覺りました」

「ホ、、、、、、貴方も比較的ウツカリしてゐられますね。ポーランド人、トルコ人、ユダヤ人等が日々澤山に大彌勒さまの教を聞きに参りますよ。貴方は一體信者が幾人許り出来ましたか、到底大彌勒さまには叶ひますまいがな」

「ナル程私如きは到底お側へも寄れませぬ。然し乍らあまり、さうエルサレムの

町では評判になつてゐないやうですが

「そらさうでせうとも、……燈臺下は眞暗がり。遠國から分つて来る……と神様が仰有つたでせう。遠く海を隔て、エジプト、フランス、トルコ、伊太利等から日々數珠つなぎに晝は參拜者がムいますよ。何と云つても大彌勒さまの御名は世界に響いて居りますからな」

「へー、そりや感心だ。水清うして魚すまずとか云つて、ヤツパリ濁つて居らねばいかぬのかいな。私も一つ方針をかへようかな。今迄の私の方針はあまり清らかで効果が却てうすいのだらう、なあマリヤさま」

「さうでムいますな。あまり清淨潔白な誠許りをお説きになるものだから、魚鱗が寄つて來ないのでせう、貴方も之から少し許り方針をお變へなさが宜しいでせう。アメリカンコロニーでも、あまり教が清いものだから、却て發展して居りませぬわ。四十年もかかつてまだ百人位ほか出來ないのですからな」

「ママアおかけなさいませ、立話は足がしびれます」
と籐の椅子をあてがい、丸い机を眞中において三人は鼎座となつた。お花は二人

に茶を汲み乍ら、

「今ブラバーさまの仰有る事を聞けば、濁つて居るから人が寄ると仰有つたが、日出神のお寅さまは、清浄潔白ですよ。水晶身魂ですから、何處から何處迄澄んで居りますよ。世の中が濁つてゐるから清めに來られたのですよ。貴方も、ソレ橄欖山上でマリヤさまと云々されるやうな事で、どうして神業が發展しますか。よう考へて御覽なさいよ、國許には奥さまや娘さまもあるぢやありませんか。その奥さまや娘さまは朝晩水をかぶつて無事に神業をつとめて過失のないやうにと祈つてゐるのに、處もあらうに橄欖山で天消地滅の亂癡氣騒ぎを遊ばすのだから、イヤモウ、その凄腕前には、いかな守宮別さまだつて舌をまいてゐられますわい。オホ、イヤ之は失禮、どうかお氣にさへて下さいませぬや」

「お花さま、人の事を云はうと思へば、吾頭の蜂から拂うてかからねばなりませんまい。お寅さまだつて國には大將軍と云ふ立派な立派な夫があり、お子達も澤山あるぢやありませんか。それに何ぞや守宮別さまとエルサレム三界迄手に手をとつてお越しになり、人の目がだるいやうな事迄チヨイチヨイなさいませぬや」

ませぬか。この事はエルサレムで誰一人知らぬものはムいませぬよ」

「ホ、ホ、ホ、ホ、神界の分らぬ人はそれだから困ると云ふのだ。お寅さまと守宮別さまは切るに切られぬ神界の御因縁があつて、ああしてゐられるのですよ。俗人の身として、どうして深遠微妙なる神界の御經綸が分りますか。アレとコレとは「てんで」根本の問題が違つてゐますよ。その理由は、到底一朝一夕にはお前さまの腹には入りません、せめて三週間なりと、辨當持でお通ひなさい。先づ此問題から解決せねば貴方等の得心が行きますまい。その代りこの因縁が分つたら、いかなる鬼大蛇でも、改心してアフォンとして開いた口がすばまりませぬぞよ、ビツクリして暈の來る大問題ですよ。それはそれは深い深い廣い、先の分らぬ三千世界のお經綸ですもの」

と得意氣に云ふ。

「それは又ユツクリ承はる事としまして、ブラバーサとしては焦眉の問題としてお寅さまの所在を探さねばなりません。お花さま、何か心當りがムいませうかな」

『ヘンよう仰有いますわい。それは私の方からお尋ねしたいと思つてみましたよ。同じ日出島の同胞ぢやありませんか、そんな腹の悪い白々しい、トボケ面せずに、アアした、コウしたとアツサリ仰有つたらどうですか、あまり罪が深うムいますよ』

『之は近頃迷惑千萬、貴女のお口からかやうなお言葉を聞かうとは夢想だに致しませぬでした』

『私もアヤメのお花と云つて難波の里に於ては海千山千河千と云はれた女辨護士ですよ。チャンと顔色を一目見たら、お前さまの腹の中が皆分るのだから、サア、キツパリと白状しなさい。お寅さまが演説の邪魔したら、かつさらへて、どつかへつれて行つてくれと金の百兩もアラブに與へて置いて生捕つたのでせう。そんな事ア、チャンとこのお花の天眼通に映じて居りますわいな』

マリヤは息をはずませ乍ら、

『お花さま、そら、あまりぢやムいませぬか。聖師さまは、そんな腹の悪い方ぢやありませんよ』

「おだまりなさい。好きな男の御鼻屑をなさつても私の前では通用しませぬよ。二人がコツソリと心を合し、大それた大陰謀を企らみ乍ら、知らぬ顔の半兵衛で私の處で狐の七化け、狸の八化式に親切ごかしに人の腹を探らうとヤツて來ても、尻尾が直に見えますから駄目ですよ。あのマア迷惑さうな顔わいのう」

「マリヤさま、もう歸りませう。到底このお花さまには、話が出来ませぬわい」

「コリヤコリヤ、マリヤ、ブランコ兩人、尻こそばゆくなつて逃げ出すつもりか知らぬが、さうはさせませぬぞや。チャンと警察署へ届けておいたから、待つて下さい。今に高等係がやつて來て、お前を拘引するだらう。さうすりや否でも應でも白状せねばなりますまい。そんな處で恥をかくよりも、ソツとアツサリ私の前で白状しなさい。さうすりや警察へは私の方から間違ひだつたと、願ひ下げをしてやるから、どうせ嫌疑のかかつたお前さまだから、逃れつこはありませぬよ。フツフ、、、。身から出た錆、己が刀で己が首、自縄自縛とはお前さま等の今日の場合だ。ようマアそんな心になれたものだと思へば可愛相になつて來たわいのう、オーンオーンオーン」

と泣き眞似し乍ら、ソツと目に唾をつける。その、狡猾さ。酢でも、蒟蒻でも挺にも棒にも大砲でも行かぬ代物である。ブラバーサは「此方の方から誣告を訴へる」と云ひ乍ら、憤然として立上り、細い路地を潜つてマリヤと共に大道をまつしぐらに己が草庵さして歸り行く。

(大正一四・八・一九 舊六・三〇 於由良海岸 北村隆光録)

第三章 草居谷底(一八〇九)

トンク、テク、ツ一口の三人は僧院ホテルの裏口から二人を擔いだ儘、一生懸命に道路、田畑の嫌ひなくかけ出し、キドロンの谷深く川邊を傳ふて登り行き、雨露を凌ぐ許りの自分の借家へと持ち運び、手荒く二人を土の上に投げつけた。守宮別はこの間に殆ど酔も醒め、丸い目をギョロづかせ、ウンと云つた限り、三人の顔を睨めつけて居る。お寅は勝氣の女とて大地に投げつけられた際、腰骨を

うち乍ら痛さを耐へて、

「こりや、三人のアラブ共、三千世界の救世主、底津岩根の大ミロク、日の出の神の太柱お寅さまの肉體を、お神輿さまとして、此處迄つれて來るのはいいが、なぜ下ろす時にも些と氣をつけないのか、お神輿が些と許り損傷だぞよ、行儀も作法も知らない馬鹿野郎だなア。サア私を此處まで連れて來た以上は、何か深い計畫があつてのことだらう。きつぱりと白状したがよい。何者に頼まれたかその譯を聞かう。これこれ守宮別さま確りせぬかいなア。何の爲めの強力だいな。それだから無茶苦茶に酒を呑みなさるなと云ふのぢや。お前さまはお前さまとした所で、龍宮の乙姫さまの生宮は何をして居るのだらう、ても切ても氣の利かない人足許りだなア。こりやアラブ、早く神の前に白状致さぬか、神罰が當つて脛腰が立たぬやうにしてもよいか」

トクは、

「ハ、ハ、ハ、ハ。氣違ひ婆、それや何アに吐してけつかる。誰にも頼まれはせぬ。貴様の懐中にもつて居るお金が目的ぢや。地獄の沙汰も金次第ぢやからキリキリ

ちやつと渡したらよからう。グヅグヅ致して居ると生命が無いぞよ。一方の野郎は酒に喰ひ酔つて脛腰は立たず。高が婆の一人位、捻り漬すのは宵の口ぢや。金を渡さにや渡さぬでよい。勝手に取つてやる。サア覺悟せい」

と猿臂をのばして、胸倉をグツと搦む。お寅はその刹那足を上げてトンクの鞆丸を力一ぱい蹴つた。トンクはウーンと云つた切り、地上に大の字となつて了つた。テク、ツ一口の二人は吃驚してトンクを呼び生けようとする。其隙を考へて守宮別はテクの足をグイと引張り俯向にドンと倒す。お寅はツ一口の首筋を鷲掴みにしながら擧骨を固めて六つ七つ撲り打ちに打ち据ゑる。ツ一口はフラフラと眼が暈うて又もやばたりと其處に倒れて仕舞つた。

「サア、守宮別さま、其處の藤蔓をもつて動かないやうに、何奴も此奴も今の中に縛つておきなさい。これからこれ等三人を厳しく詰問してブラバサの陰謀を白状さしてやらねばなりません。何と氣味の善い事、遠は日の出の神の生宮だけあつて偉いものだらう。これ守宮別さま、日の出の神の生宮には感心したらうな、アラブの千匹萬匹來るとも、このお寅が、フンと一つ鼻息するや否や、何奴

も此奴もバタバタと東京のバラツクに二百十日の大風が吹いたやうにメチャメチャに倒れて了ふのだよ。日の出神様も聖地へ来てから、だんだん出世を遊ばし偉い御神徳の出来たものだ。もう此上は三千世界の救世主と名乗つても誰一人非難するものはあるまい、へへへへ。てもさても愉快の事だわい。苦みの果には楽しみあり、萬難を排して勝利の都に達するとかや。お前さまも些と酒をやめて心の底から私の云ふ事を聞くのだよ。僧院ホテルでお前さまは何と云ふ馬鹿氣た演説をするのだえ。この私をブラバーサと同じやうに餘り信じないと云つたぢやないか。肝腎要の參謀長がそんな考へをもつて居てどうしてこんな大望が成就しますか。些と心得なされ。餘り云ふ事を聞かないと小北山のお寅さまぢやないが、鼻を捻ますぞや

「イヤもう改心致しました。朝顔形の猪口がメチャメチャになつては耐りませぬからな、ウフ、へ、へ、」

トンクはウンウンと唸き出した。お寅はトンクの鬚をグツと握り、
「これやトンク、恐れ入ったか。往生致したか。どうぞや、サア誰に頼まれた白

状致せ^{やういた}」

「ハイ、ハ、白状^{はくじやう}致します。どうぞ其手^{そのて}を放^{はな}して下^{くだ}さい髪^{かみ}が脱^ぬけます」

「ぬけたつて何^{なん}だ。お前^{まへ}の頭^{あたま}ぢやないか。肉^{にく}と一緒^{いっしょ}にコポンと取^とつてやる積^{つも}りだ。

苦しきや白状^{はくじやう}なさい。魚心^{うをこころ}あれば水心^{みづこころ}だ。白状^{はくじやう}さへすれば今迄^{いままで}の罪^{つみ}は神直^{かむなほひ}日大直^{おほなほ}

日^ひに見直^{みなほ}し聞き直^{きなほ}して許^{ゆる}してやる。そして白状^{はくじやう}した褒美^{ほうび}にお金^{かね}をやるから、トツ

トと白状^{はくじやう}したがよからうぞや。かう見^みえてもこのお寅^{とら}は、虎^{とら}でもなければ狼^{おほかみ}でも

ない、三千^{さんぜん}世界の氏子^{うぢこ}を助^{たす}ける生神^{いきがみ}様だからな。敵^{てき}たうて來^きたものには鬼^{おに}か大蛇^{をろち}

になるお虎^{とら}であるけれど、従^{したが}つて來^きたものには結構^{けつこう}な結構^{けつこう}な大歡喜^{だいくわんぎ}天^{てん}の女神^{めがみ}様ぢ

やぞえ」

「ハイ、白状^{はくじやう}致します。その代^{かは}りにテク、ツー口^{くち}の縛^{いましめ}を解^といてやつて下^{くだ}さい。私^{わし}

だけ助^{たす}かつた所^{ところ}で仕方^{しかた}がありませんから」

「これこれ守宮^{やもりわけ}別^{わか}さま、何^なんぢやいな、氣樂^{きらく}さうに煙草^{たばこ}ばかり吞^のみつづけて、ち

つとお手傳^{てつた}ひをなさらぬか。氣^きの利^きかねえ男^{おとこ}だなア」

「到底^{たうてい}神様^{かみさま}のお手傳^{てつた}ひは人間^{にんげん}として出^で來^きませぬわい。マア悠^{ゆつく}りと見物^{けんぶつ}でもさして

貰ひませうかい。あた阿呆らしい。酒も無いのにこんな事を見て居られませうか、お寅さまも仲々気が荒いですなア」

「それや荒いとも、アラブの荒男を三人迄、荒肝を取つて荒料理をせうと云ふのだもの。随分靈驗な神様だよ。これアラブのトンク、大略でよいから早く誰に頼まれたと云ふ事を白状せぬか。命取られるのが好いか。お金を貰ふのが好いか、どうぞや」

「實の所はお前さま所へ始終出入して居るヤクさまに頼まれました。ヤクさまが金を吾々三人に二十兩宛下さいました。そしてお寅さまが劍呑になつて來た時は搔攫へて僧院の裏から何處かへ逃げて呉れと仰有つたのです」

「ホ、ホ、ホ、甘い事、どこ迄も云ひ含めたものだなア。ブラバーサの奴、反間苦肉の策をつかひよつて、ヤクに頼まれたなぞと、熱心の信者とこのお寅と喧嘩させようと思つて居やがるのだな。どこどこ迄も油斷のならぬど倒しものだ。これやトンク本當の事を云へ。ヤクさまぢやあるまいがな」

「イ工滅相な有體の事を申します。御靈城の受付をしてゐるヤクさまが、お前さ

まが僧院で演説をしられた時、聴衆の中へ入つてムつて、あまり聴衆の人氣が悪く殺氣が立ち、お前さまを殺してやらうと迄ひそびそ相談して居たものが有つたので、ヤクさまが心配して、傍に居つた私等三人に大枚二十圓宛をそつと懷中に入れ、どうかお寅さまと守宮別さまを擔いで此場を逃げて呉れ。さうせぬとお二人の命が危いと囁きましたので、二十圓のお金まうけにお二人さまを擔ぎ出しました。さうするとお前さまの懷中に、ガチャガチャと餘り澤山の金が入つて居さうなので、此處迄來てから二重儲けをせうと思つて、一寸ごろついで見たのですよ。何うか耐へて下さい。しかし吾々三人が無かつたらお前さまの生命が無かつたかも知れませぬよ。これが正直正銘一文の掛値のない所の白状でムいます」

「フーン、さうかいな。ても扨てもブラバーサと云ふ奴は劍呑な奴だな。矢張り彼奴が此生宮を殺さうと思つて、聴衆の中に暴漢を匿まひ置きよつたのだなア。これトンクさま、お前さまはブラバーサをどう思ひますか」

「さうですな、どうか頭を放して下さい痛くて仕方がありませんわ。アイタ、タ、タ、タ、痛いがな」

「餘り話に身が入つてお前の頭をブラバーサだと思ひ、力一杯痛めたのは悪かつた、まア耐へてお呉れ。これも時の災難だからな。これこれ守宮別さま、話が分つた以上は、テク、ツ一口の縛を解いて上げて下さい。話を聴いて見ねば分らぬものだ、ほんに氣の毒だつたな。とは云ふものの三人が三人乍ら、俄にこのお寅を脅迫した罪は許されないから、痛い目に遇つたからといつて怒る事は出来まい、これで帳消だ。サアこれから改めてお前達三人と篤と相談をしよう」

「悪にかけたら抜目のない吾々三人、金になる事ならドンナ御相談にも乗ります。私だつてあのブラバーサには深い深い遺恨がムいます。マリヤの奴を三人寄つて手籠になし、念佛講でもやり、楽しもうと思つて居た所へ彼のブラバーサが、仕様も無い歌を歌つて来たものだから、折角仕組だ芝居も肝腎の所でおジャンになり、オチコ ウツトコ、ハテナの願望も遂げず、すごすごと吾家に歸つたものだから仲々倅のやつ承知をさせぬ、オチコ、コテノとなつて、マストを立てそれは夜半大騒動五人組が駆け出すやら、泥水が出るやら、へへへ、ン、いやもうラツチもない事でした、アハ、ハ、ハ、」

「ウフ、フ、フ、ソナ厚い唇で、眞黒な顔して居つて色の【こひ】の鮎のつて、些と食ひ過ぎて居るわい。併し乍らブラバーサとマリヤに對し、さう云ふ經緯があり遺恨が残つて居るとすれば何うだ、反對派の吾々の仲間に入り、幾何でも金はやるからエルサレムの町に出て、ブラバーサ攻撃の大演説をやる氣は無いか」
「ハイそれは合ふたり叶ふたり、大にやります。のうテク、ツ一口お前達も贊成だらう」

「ウン尤もだ、テクさまの戀の敵のブラバーサ、力一ぱい面皮を剥いてやり、此エルサレム町に居れないやうにしてやるのも痛快だ、腹癒せだ、溜飲が下るやうだ。のうし面白面白面白、面白狸の腹鼓だ。喃、ツ一口、何程辛うても、エルサレムの通路を縦横無盡に【テク】についてブラバーサの罪状をトンクと市民に分るやうに、布留那の辨を揮つて吹聴仕やうぢやないか」

「ヤア面白い、大ミロクの生宮、日の出の神のお寅さまを大將軍と仰ぎ、守宮別様を參謀總長とし、エルサレムの町を三方四方から突撃と出かけようかい」

「これこれトンクさま、決してヤクに頼まれたなどと云ふぢやなりません。ブ

ラバーサに頼まれて、あんな悪い事を致しましたが、日の出の神の御神力に怖れて罪亡ぼしに白状致しましたと大聲に云ふのだよ。分つたかな
「ハイ、事實を曲げて云ふのは間違ひやすうて些と許りやり悪くて困りますが、マア成可く貴女の爲になるやうブラバーサを攻撃致しませう」

お寅 「ブラバーサ憎む心はなけれども

世人のために葬らむとぞ思う。

聖場を色で汚したマリヤ姫を

千里の外に逐やりて見む」

守宮 「吾は唯薬師如来がましまさば

如何な悩みも苦しからまじ。

酒呑めばいつも心は春の山

笑わらひ乍ながらに花はなは咲さくなり。

お寅とらさまお花はなさまでは氣きが行いかぬ

蒲ぶ萄たう酒しゆビいル酒さけが好かう物ぶつ。

キリストも釋し迦やも孔こう子しも神かみさまも

酒さけに比くらべりやしやうもない奴やつ」

お寅とら「又またしても守やもり宮みや別わかさまの罰ばち當あたり

腸はらわたまでが腐くさつて居をるぞや」

守やもり宮みや「くさつても酒さけと鯛たひとは味あじがよい

腐くらぬ先さきに吞のめばなほよし。

ドブ貝がひの腐くさつたやうな香にほひより

酒さけの腐くさつた香にほひがよろしい』

お寅とら『蟲むしの喰くた松茸まつたけ股またにぶらさげて

腐くされ貝がひとは何なにを云いふぞや』

トンク『くさいやつ三人さんにん五人ごにん集あつまつて

臭くさい相談さうだん谷底たにそこでするも』

テク『お寅とらさま手管てくだの絲いとを繰くり返かへし

マリヤの腹はらを突つかむとぞする』

ツーロ「つらうても彼の爲めなら町に出て
嫌な演説せねばなるまい」

お寅は、

「さア早く此場を立つて歸りませう

お花が靈城に待つて居るだる」

と云ひ乍ら、吾營所を指して一行五人歸り行く。

（大正一四・八・一九 舊六・三〇 於由良秋田別荘 加藤明子録）

第四章 誤靈城（一八一〇）

お花は只一人、日の丸の掛軸の前に暗祈黙禱し乍ら、兩眼から雨の如き涙をたらし、聖地の宣傳も豫期した如くに行かず、未だに一人の信徒も出来ぬ矢先、お寅、守宮別の在所が分らなくなつたので、太い吐息を洩らしてゐると、そこへ受付のヤクが慌だしく歸り來り、

「コレもし、お花さま、お花さま」

と何回も矢繼早に呼ばはれ共、お花はキヨロリとヤクの顔を見乍ら、素知らぬ顔ををしてゐる。

「もしお花さま、これ丈私が呼んでゐるのに、なぜ返事をして下さらぬのですか、聾になられたのですか、餘り苛いぢやありませんか」

「ソナ人は居ないよ」とプリンと横を向く。

「ハ、ハア、コリヤヤクが悪かつた。龍宮の乙姫さまの生宮様、あやめの花子殿、一寸こつちやを向いて下さい」

「お前はヤクかい。何の用だなア」

とすましてゐる。

「何の用もかんの用もありませうかいな。乙姫さまは日の出神の生宮さまの所在が知れないのに、何してゐるのですか」

「何もして居ないよ。おつつけ歸つてゐるといふ御神示があつたから、餘り慌てるには及びませぬワイ。チトお前さまも落つきなさい。ここの受付になつてから、殆ど一年にも成りますが、月給取る許りで、一人の信者も出来たでなし、私だつて困るぢやないか、些と活動して下さいな。生宮様が悪者に攫はれて行かれるのを見て居り乍ら、助けにも行かぬといふやうな、ヤクザ人足のヤクさまには、もう龍宮の乙姫も相手にはなりませぬワイな」

「私は此處の受付になつてから、餘り暇なので、これでは堪らないと思ひ、エルサレムの町中歩いて紳士紳商を日々訪問し、ウライナイ教の宣傳をやり、生宮様の御威徳を盛んに吹聴して居ります。何れも一旦は感心して、一邊お話が聞きたい、其上で信者になり度いななどと、異口同音に私の顔に免じて賛成しては下さいますか、何しろ生宮様の脱線がひどいので、何時も駄目になつて了ふのですよ。神様

なら神様らしう、何時もチャンと靈城に立籠もつて、聲なくして人を呼ぶといふ態度をお取りになつて居れば可いのに、フンゾ喰ひの、ドブ酒飲みの守宮別を連れて、アトラスの様な面をして、徳利をブラ下げた様な尻をして、市中をブラつかれるものだから、あのスタイルでは、どうも尊敬の心が起らない。そして言ふ事が徹底してゐないから、要するに日の出島の氣違だらうといふ噂が立つて、誰も聞くものがありませぬ哩。毎日日日、かう受付にチヨコナンとコマ犬のやうに坐つて居つても用は無し、ダンジャコを竝べた様な筆先を寫さして貰うて居つても、餘り有難くはありませぬがな。お前さまも、ようマア、あんな生宮さまと一緒にこんな所迄やつて来て、能う嫌にならぬ事ですな」

「コレ、ヤクさま、お前は何といふ勿體ない事をいふのだい、どうも靈に因縁のない者は仕方のない者だなア。あんな立派な救世主が、お前さまも矢張り世間竝に悪く見えるのかいな」

「ハイ、何程鼻眞目にみても、普通の人間とより見えませぬわ。第一仰有る事が筋が立つてゐませぬもの。教義が支離滅裂で掴まへ所が無くつて、既成宗教の方

が、どれ丈立派だか知れませぬよ。私も此間からいろいろと就職口を考へて居り
ましたが、半氣違の生宮さま所に居つた者だからといつて、だアレも使つてくれ
ないのです。それで止むを得ず、不快で不快でたまらないのを、辛抱して居るの
です。併し乍ら、躓く石も縁のはしとやら、縁あればこそ生宮様のお側で御用が
出来たものだと思ひ、昨夜も昨夜とて、お寅さまの危難を救ふべく、會計の金を
六十圓放り出してお寅さまを助ける工夫をしたのですよ。其六十圓の金が無かつ
て御ろうじ、生宮さまは其場で袋叩きに會ひ、半死半生になつて居られるかも知
れませぬよ。夜前トツクにお歸りの筈なのに、まだ歸つてゐられぬのは、チツト
不思議ですなア

□ヘン、能う言へます哩、現に生宮さまがアラブに取つ掴まへられた時、お前さ
まはジツとして見て居つたぢやないか。そんな嘘を云つても、私がチヤンと見て
居りますぞや

□乙姫さま……だつて、ジツとして見てムつたぢやありませんか。神様でさへ手
出しのできぬ亂暴者に、どうしてヤクが手出しが出来ませうぞ。其時の事情をマ

ア聞いて下さい。さうすれば私の忠勤振がチツトは分るでせう」

「ヘン、おいて貰ひませうかい、現在目の前に主人の危難を見乍ら、手も足も能う出さぬクセに、忠勤振なぞと鼠が笑ひますぞや。此上文句があるなら言つて御覽」

「あります共、眞面目に聞いて下さい。今夜はキリストの聖日でもあり、僧院ホ

テルで大演説會があり、生宮さまも大々の獅子吼をなさるといふ事を聞いて居つ

たので、萬一を慮り、警戒の任に當つて居りますと、生宮様が衆人環視の前で、

ブラバーサさまを罵り、言語道斷な事を仰有るので、日頃ブラバーサさまを信賴

してゐる信者連が腹を立て、あの氣違婆をやッつけてやらうかと、私が居るとは

知らずに、コソコソ相談をやつてみますので、此奴アたまらぬ、何とかして生宮

さまを助け出さねばなるまいと、傍を見ればアラブが三人居つたので、ソツと金

をわたし、一時どつかへ生宮を隠してくれと云つた所、アラブは早速諾いて、あ

の通りお二人の危急を救つたのです。夕べの騒ぎで市中は喧しい噂が立ち、警察

の活動となつて居る相ですから、一時生宮さまもイキリぬきにどつかへ遊覽に行

く

く

く

く

つてゐられるのでせう。これでも私の忠勤振が分りませぬかなア」

「ても儲も、何んといふ下手な事をするのぢやいな。何程ブラバーサの信者が手荒い事をせうと思つても、生宮様の御神徳には齒節は立ちませぬぞや。それに猶更、立派な警察もあり、人目もあるのだから、そんな心配は御無用だ、お前さまは永らく生宮様の側に居つて、あれ丈の御神徳が分らないのかな、ホんに盲聾といふ者は仕方のない者だなア」

「もし、お花さま、イヤ、ドツコイ、龍宮の乙姫さま、餘り盲々といふて下さいますな、御神徳の程度を知つて居ればこそ、私が案じて、ああいふ手段を取つたのですよ、乙姫さまは日の出さまの御神力を買かぶつて居りますな」

「かもうて下さるな、お前さま等のやうな子供に分つてたまるかな。大それた、大枚六十圓の金をアラブにやるなぞと、誰に許可を得て支出したのだえ。生宮さまも乙姫も許した覚えはありませぬぞや。其金こちらへ返して下さい、返すことが出来にや此月分と來月分とで勘定する。お前さまは受付だ、支拂ひ役は命じて無い筈だ。委托金費消罪で訴へませうか」

「二つ目には法律をかへるとか、警察もいらぬよにするとか仰有るクセに、猫がクシヤミしたやうな事でも警察へ訴へるのですか、何とマア偉い神様ですな。お前さまは最前も雪隠の中から聞いて居れば、ブラバーサやマリヤさまに向つて、世界中から數珠つなぎに信者が參つて來ると、エライ駄法螺を吹いてムつたが、ここ一年程の間に猫の子一足訪問した事は無いぢやありませんか。誠一つで開くウラナイの道だからと云ひ乍ら、ようマア、あんな嘘が言へました。靈城なぞと聞いて呆れます哩」

「ホ、ホ、ホ、マア何と分らぬ代物だこと、これ程諸國の靈が、數珠つなぎになつて、生宮さまの神徳を慕つて參拜するのに分らぬのかいな。それだから、教會とも宣傳所ともいはないで、御靈城と書いてあるのだよ」

「ソナナラ、私の受付は必要がないぢやありませんか。一體何の受付をするのですか」

「身魂相應の理に仍つて、惡者が出て來たり、詐欺漢が出て來たりせぬ様に、番犬の御用がさしてあつたのだよ、靈なんか到底お前等にや分らないから、テンデ

そんなこた當あてにしてゐないのだ。頭あたまから信用しんようのないこた分わかつて居ゐるのだからな」

「ソナナラ何な故ぜ宣傳せんてんに行ゆけ行ゆけと私わたしに仰おつしや有あるのですか」

「現幽げんいういつち一致みをしへの御教みをしへだから、現界げんかいの人間にんげんも宣傳せんてんする必要ひつえうがあるのだ。けれ共どもお前まへの

魂たましひがテンで物ものになつてゐないものだから物ものにならないのだよ。無用むようの長物ちやうぶつ娑婆しやばふ

さぎ、穀潰こくつぶしの糞造器ふんざうきとはお前まへの事ことだ。こんな糞造器ふんざうきでも神様かみさまは至仁しじん至愛しあいだから、

助たすけてやらうと思おもつて、三十圓さんじふえんも月給げつきふを出だして飼かつてやつて居ゐるのだよ。世間せけんに

目めの開あいた奴やつがあつたら……何なんと神様かみさまといふものは偉えらい者ものだ。エルサレム中ぢゆうで相あひ

手てにしてのない蚰蜒げぢげぢの様な男をとこでも、生神いきがみさまならこされ、三十圓さんじふえんも月給げつきふをやつて

おいて置おけるのだ。神かみさまといふ者ものは皆さても皆さても感心かんしんな者ものだ。……と此様このやうに思おもつて

青あをい鳥とりが引ひかかつて來くる様やうに、つまり、おとりにおいて有あるのだ……オツトドツ

コイこりや云いふのぢやなかつた。コレ、ヤクさま、こりや嘘うそだよ。お前まへの副守ふくしゆが

一寸ちよつと私の體内たいないを借かつて云いふのだから、屹度きつと氣きにさへて下くださるなや、オホ、、、

「これで貴女方あなたがたの腹はらの底そこはすつかり分わかりました。私わたしも可よい馬鹿ばかでした。月給げつきふも何なに

もいりませぬ。氣好きようお暇ひまを下ください。其代そのかはり覺おぼえてゐなさい。ヒヤツとする様やうな

目にあわして上げますから。お前さま方のカラクリを、これから、エルサレムの町中演説して歩きますから、足許の明るい内トツトと歸りなさい。イヒ、、、、。ヤアこれで一つ俺も活氣が出来て来た。惡魔退治の張本人となり正々堂々の陣を張り、日出神の生宮と力比べだ。此奴ア面白い、ウツフ、、、、

お花は顔を曇らせ乍ら、

「コレ、ヤクさま、皆嘘だよ。お前は正直だから、直に腹を立てて仕方がない。

日出神の生宮と此乙姫の生宮が、天にも地にもない大切な寶として、お前を重寶がつてるのだ。そんな水臭い事をいふものぢやありませんがな」

と皺の寄つた顔の目を細うして、ヤクの背中をポンと叩く。年は老つて居つても、浪速の水で洗ひさらした肌、まだ何處やらに花の香が残つてゐる。其手でお釋迦の顔撫でた式に、お花の色目につり込まれ、ヤクはつり上つた眉毛を一寸許り下へおろし、目尻迄下げて、時計の八時二十分の様子を顔をし乍ら、

「へ、、、、、ソナ優しいお心とは知らず、つい副守があんな事を囁きました。どうぞ生宮さまがお歸りになつても、今の様な事は言はない様にして下さいや」

「何ぢやいな、ヤクさま、眉毛や目尻が眠り草の様に、サツパリ下つて了ひ、七時二十五分の顔ソツクリぢやないかい」

「乙姫さまのお顔にも一時は低氣壓が襲來し、眉毛が十一時五分になつて居ましたよ」

「ソナ時計の話や何うでもよい、人の顔と時計とゴツチャ交ぜにしたらちや困るからなア」

「斯く話して居る所へ、ドヤドヤ人の入り来る足音、ヤクは素早く表へ駆け出し、ヤ、これはお寅様、能くマアお歸り下さいました。乙姫さまが大變なお待ちかねでムいます。サアサアとつと奥へ御通りなさいませ」

「お前はヤクザ者のヤクぢやないかい。妾がアンナ目に會つて居るのに傍觀してるとは餘りぢやないか。何程名はヤクでも、役に立たぬ代物だなア」

「ハイお花さま……オツトドツコイ乙姫さまの生宮さまに、慘々そんな事をいつて油を絞られて居つた所ですから、どうぞ二重成敗は勘辨して下さい」

「といひ乍ら狭い路地を傳うて入つて來た。お花は嬉しさうに手をつかへて、

「ヤ、これはこれは、能う歸つて下さいました。日出様、大變待ちかねて居りました。今ヤクと心配して居つた所でムいますよ」

「ヘン、有難う、感じ入りました。貴女方の御親切には……ブラバーサの計略にかかり、谷底へつれ込まれ、命を取られ様と致しましたが、幸に日出神の御神力によりまして、無事に歸つて参りました。乙姫さま、さぞ面くらつたでせう。ヤクと二人寄つて、日の出神の居らなくなつたのを幸ひ、此靈城の主人となり、一大飛躍を試みむとしてムつた所を、目的と牛の尻がひとは、向ふから外れるとか申しましてね……誠にお氣の毒さま。ヘン巧言令色、偽善の御挨拶は止めて貰ひませうかい」

お花は泣聲を出して、

「コレ、モウシ、お寅さま、餘りぢやムいませぬか、私の心が分りませぬか。餘り殺生ぢやムいませぬか。十年此方眞心を盡して、世間の非難攻撃を受け乍ら、身命を賭して、貴女に付いて來た私ぢやムいませぬか。御冗談仰有るにも程があらりますわ」

「冗談ぢやありませんせぬよ。誠生粹の日出神の言葉ですから、慎んでお聞きなさい。私の心が分らぬか……と仰有つたが、分つて居らこそ、お前さまに御禮を申して居るぢやありませんせぬか。第一の證據は……いつも貴女言ふて居つたでせう。假令地獄のドン底へでも、命を的にお伴致しますと、口癖の様に、うるさい程、百萬遍をくる様に、云つておき乍ら、人の危難を見て、助けようとせせず、ヤクと一緒、ぬつけりことして靈城にをさまり返り、第二の計畫をやつて居つたのでせう、それに違ありますまい。お前さまの様な水臭いお方は、主でもなければ、家來でもない。又師匠でも無ければ弟子でもありませんせぬ。乙姫さまなぞと、チヤンチヤラ可笑しい、もう之から云ふて下さるな」

「私は素よりあやめのお花といつて、何も知らぬ者でムいしましたが、貴女が龍宮の乙姫の生宮だと仰有つて下さるので、それを誠と信じ、今日迄乙姫を通して來ましたが、云ふてくれるなと仰有るのなら、モウ之から言ひませぬ。さうすると、お前さまの日出神さまも可いかげんなものぢやムいませぬか。誰が阿呆らしい、乙姫の生宮と思へばこそ、住なれた自轉倒島を立つて、コンナ他國で、不自由な

生活を辛抱してゐるのですよ』

ヤクは鼻息あらく、

『もしもし乙姫さま、否お花さまにしておきませう。コンナ糞婆と縁を切りなさいませ。私がお前さまの參謀長となつて、お寅さまの向方を張り、立派に一旗擧げて御覽にいれませう、私がお花さまの赤心は能う知つてゐます。側から聞いてゐても餘り無體な事いふ婆だから、愛想が盡きた。お花さま、可い縁の切時だから、覺悟なさいませ』

お花は、

『サア、それでもナア』

と首を傾むけてゐる。

『コリヤ、ヤク、何を横槍入れるのだ。お師匠様が弟子に向かつて意見をしてるのに、ヤクザ人足がゴテゴテいふと云ふ事があるものか、ひつ込んで居なさい、お前の出る幕ぢやない。お前とお花さまと寄つて、妾をあんな目に會はしたのだろがな。チャンと此處に三人の證據人が連れて來てあるのだから……』

「ア、ア、分らずや許りの所に居つても仕方が無いワ。お花さま、左様なら、又お目にかかりませう、お寅婆アさま左様なら、守宮別と精々意茶つきなさい。私は私の考へを以て、何處迄もお前さまの目的の妨害をして上げますから、イヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ」

と腮をしゃくり、そこにあつた筈を一本かたげたまま、尻ひんまくり、何處ともなく驅出して了つた。此奴逃がしてなるものかと、お寅は金切聲を張上げ、でつかいお尻をプリンプリンと振廻し乍ら、埃に汚れた雑踏の街を人目も恥ぢず追つかけて行く。お寅はヤツと追付き、首筋を掴まむとするや、ヤクは筈で大道の砂埃をまぜ返し、お寅の顔をポンと撲り乍ら又もや驅け出す、お寅は兩眼に土埃を浴び、皺枯聲を張上げ、

「オーイオーイ誰でも可いから、其ヤクを掴まへて呉れ」

と叫んでゐる。道行く人は黒山の如くお寅の周圍を取まき、見世物でも見る様に口々に罵り居たりける。

(大正一四・八・一九 舊六・三〇 於丹後由良秋田別荘 松村眞澄録)

第五章 横戀慕（一八一）

ヤクの後をおつかけて夜叉の如くにお寅は靈城をとり出し終つた。トンク、テク、ツークの三人はお寅の後をおひ、搜索がてらに三人三方へ手分けをして市中の大路小路を駆け廻ることとなつた。後にはお花、守宮別の兩人が丸い卓を圍んで籐椅子に尻をかけ乍ら、ヤ、縛し無言の儘、顔を見合して居た。

守宮別は大缺伸をし乍ら、

「お花さま」

と云ふ。

「何ぞ御用ですか」

「アーン、お花さま」

「何ですか」

「アーン、お花さまツたら……」

「何ですいな、アタ辛氣臭い。御用があるなら云つて下さいな」

「アーアン、大概分りさうなものだな、ホント二　ホント二」

「生宮さまが居られないので淋しいのですか、嘸御退屈でせう」

「アーアン、これお花さま、分りませぬかい」

「分りませぬな」

「へー、私がアーアンと云へば大抵きまつてるでせう」

「いつも守宮別さまが、アーアンと云つて空むいて缺伸をされたが最後、クレリ

と氣が變つて今迄やつて居た仕事も打ちやり、漂然として何處かへ行つて了ひ、

いつもお寅さまの氣をもますが、お花では一向氣をもみませぬで仕方がありませ

ぬね」

「アーア、サ……ケ……」

「ホ、酒が欲しいと仰有るのか、お安い御用。然し乍ら、お寅さまの留守

中にお酒でも、飲まさうものなら、どれ文怒られるか知れませぬ。それでなくて

も、アンナに私に毒ついて行かれたのですからマア暫く辛抱しなさい。やがて歸

られるでせうから」

「イヤ、もうお寅さまの自我心の強いこと、無茶理窟をこねる事、疑惑心の深い事には愛想が盡きました。もうお寅さまは今日限り見限るつもりです」

「へ、ン、うまい事仰有いますわい。寝ては夢、起きては現、一秒間も忘れた事がない癖に、よう、ソナ白々しい事が、仰有られますわい。守宮別さまも餘程の苦勞人だな。の道にかけては千軍萬馬の劫を経た、このお花も三舎を避けて降服致しますわ」

「いや、全く、いやになりました。あのアーンの缺伸を境界線として、お寅さまの事はフツツリと思ひ切りました。それよりも純真な、正直な都育ちの婦人が欲しいものですわ。チト位年はとつてゐても第一、膚が違ひますからな」

「これ守宮別さま、そんな冗談を云はれますと、お寅さまに又鼻を捻られますよ」
「もうお寅さまだつて縁をきつた以上は赤の他人だ。鼻でも捻やうものなら、ダメツて居ませぬ。私も男ですもの、直様エルサレム署へ訴へてやりますからね」

「本當に守宮別さま、いやになつたのですか、嘘でせう」
「何、眞劍ですよ。乙姫さまの前ですもの、どうして嘘が云へませうか」

「貴方の仰有る事が本當なら私の腹も打明けますが、此お花も今日と云ふ今日は、お寅さまにスツカリ愛想が盡きたのですよ。これから國許に歸らうかと思案してゐますの。が然し、長途の旅、一人歸る譯にも行かず、外國人との話も出來ず困つてゐますの。貴方のやうな英語の出來る方があれば、一緒に同伴さして貰へば結構ですが、世の中は思ふやうにはならぬものでしてな」

「お花さま、歸らうと云つたつて、旅費が要りますが一體いくら許り持つてゐますか」

「ハイ、娘が家を抵當に入れて金を拵へたと云つて、一萬兩許り送つて來ましたので、當地の郵便局に預けて置きましたから旅費には困りませまい」

守宮別は、お花が一萬兩持つてゐるのを聞いて、猫のやうに喉をならし、目を細うし……

「ヤ、此奴は豪氣だ。二千兩もあれば旅費には澤山だ。何とかしてその他の金を酒の飲み代にすれば一年や二年は大丈夫だ。先づお花の歡心を得るのが上分別だ、お寅に丁度毒づかれて居る處だから、ここでお寅との師弟關係を絶たせ、自分が

世話になつたり世話したりする方が、よつぽどぼろい」

とニタリと笑ひ乍ら、

「お花さま、一萬兩の金があれば今かへるのは惜いぢやありませんか、どうです、その金で一旗上げようぢやありませんか。何程お寅さまを大將に仰いで、シヤチになつた處であの脱線振と云ひ、かう人氣が悪うなつちや、駄目でせう。龍宮の乙姫さまは今迄欲なお方で寶を貯へてゐられたさうだが、時節参りて良の金神さまが三千世界の太柱とおなり遊ばすについて、第一に寶を投げ出し、改心の標本をお見せになつたお方でせう。お道のため一萬兩のお金をオツ放り出す考へはありませぬかな。何程お寅さまに肩入れした處で、鹽を淵に投入れるやうなものですよ。何程お金を費しても無駄に使つては何にもなりませんから」

「さうだと云つて確な保證を握つておかねば、此大切なお金を貴方のお間に合わせる譯には行きませぬ。お寅さまとは又特別な御關係がおありなさるのだもの」

「いや、もう愛想がつかしました。あのアーアの缺伸を境界線としてプツツリ思ひ切つたのですよ。お寅さまがお花さまだつたらなアと、このやうに思つた事は幾

度あつたか知れませぬわい」

「ホ、ホ、あの守宮別さまのお上手なこと、流石の女殺、うまい事仰有いますわい、うつかり、のらうものなら、それこそ谷底へおとされて、身の破滅に會ふかも知れませぬよ。」

「きれたきれたは世間の噂」

水に浮草根は切れぬ」

「きれた終へば他人ぢやけれど」

人が悪う云や腹が立つ」

とか云ふ歌の通り、何程うまい事仰有つても、そんな、あまい口には乗ること、

出来ませぬわい、ホ、ホ、ホ、」

「何、お花さま、本眞劍ですよ。私は、かうして十年許りもお寅さまに辛抱してついて来ましたが、到底やりきれませぬから、もう思ひ切りました。これが違ひ

ましたら一つよりない首を十でも二十でも上げますわ」

「ホ、ホ、ホ、お前さまの首を貰ったつて、首祭する譯にも行かず、菅入の根付には大きすぎるし、枕には堅すぎるし、何にもなりませぬわい。それよりお前さまの誠の魂を頂き度いものですな」

「いかにも、魂あげませう。サア、どこからなりと、ゑぐつて、とつて下さい」と胸をつき出す、

「嘘ぢやムいませぬか」

「嘘と思はれるなら此短刀で私の胸を切り裂いて生肝をとつて下さい。それが第一證據ですわい。男子の一言は金鐵より堅いですよ」

「いや分りました、心底見届けました。いかにも御立派な御精神、ソナナラ……あの……それ……どこ迄も私とを締結して下さるでせうね」

「頭の先から爪の先までお花さまに獻げました、焚いて食ふなと焼いて喰ふなと御勝手に御使用下さいませ。この守宮別は唯々諾々として乙姫さまには維命これ従ふ迄です。絶対服従を誓ひます。その代り酒丈は飲まして下さるでせうな」

「そらさうですとも、お互さまですわ、私だつて、貴方に要求すべき事があるのですもの」

「とかく浮世は色と酒……何程雪隠の水つきだ、糞浮きだと世間の人が云はうとも、惚れた私の目から見れば十七八のお花さまですわ。私は肉體に惚れたのぢやありません。お花さまの精霊が第一天國の天人として、華やかな姿であらつしやるのを、靈眼を通して見て心から惚れたのですもの。ア、お花さまの事を思ふて心臓の鼓動が烈しくなり、息がつまる様になつて來た。何と戀と云ふものは曲物だな。何で、こんな變な氣になるのだらう」

「戀は神聖だと云ふぢやありませんか。世の中は凡て理智許りでは行きませぬ、情がなければ此世の中は殺風景なものですよ」

「貴方、随分戀愛問題には徹底してゐますね、私感服しましたよ」

「そら、さうですとも。數十年間、戀の巷に育ち、數多の男女を操つて來た経験がありますから、戀愛問題にかけては本家本元ですわ。親が子を慕ひ、子が親に會ひたいとあこがれるのが戀です。又一切のものを可愛がるのが愛です。戀愛と

云ふものは一人對一人の關係で、云はば極めて狹隘な集中的なものですわ。どうか守宮別さま、戀と愛とをかねて私に集中して下さい。さうすれば私も貴方に對し愛と戀とを集中します。ここに於て初めて戀愛の神聖が保たれるのですからな。かりにもお寅さまの事を思つたら、戀愛の集中點が狂ひ戀愛が千里先に遁走しますよ」

成程、徹底したものだ、お花さまのお話を聞けば聞く程、益々集中的となつて來ますよ。假令岩石が流れて空氣球が沈んでも貴女の事は忘れませぬわ」

「くだいやうですが、お寅さまの事は忘れるでせうな」

「勿論です。今後は顔會はしても物も云ひませぬから安心して下さい」

「間違ひありません。もし違つたら貴方の喉首を喰ひ切りますが御承知ですか」

「戀愛を味はふと思へば生命がけだな。イヤ心得ました、承知しました」

「ここ迄話がまとまつた以上は、善は急げですから一寸心祝に媒介人はないけど、龍宮の乙姫さまと大廣木正宗さまを仲介人にし、守宮別さまお花さまの肉體の結婚式を擧げようぢやありませんか」

「宜しい、早速準備して下さい」

お花は目を細くし乍ら、

「ハイ」

と一言嚮をかけ、酒の爛にとりかかった。日の出の掛軸の前でキチンと坐り祝言の杯をやつてゐると、そこへ足音荒々しくお寅が歸り來たり、

「マアーマアーマア、お二人さま、お楽しみ、お羨山吹さま。これ、お花さま、その態は何ぢやいな。人の留守中に人の男をとらまへて酒を飲むとはあまりぢやないか。ここには禁酒禁煙の制札がかけてあるのを何と心得てゐますか。内から規則破りをしてもいいのですか」

お花は平然として落つき拂ひ、

「お寅さま、お構ひ御無用です。私は龍宮の乙姫でもなければ貴女のお弟子でもありません。貴女の方からキツパリとお暇を下さつたのだから、もはや貴女とは路傍相會ふ人と同じく赤の他人です。それ故お前さまの意見を聞く必要もなければ遠慮する必要も無いませぬ。ラブ・イズ・ベストを實行して、只今守宮別さま

と二世三世は愚、億萬歳の後までも夫婦約束の祝言の杯をした所でムいますよ。

チツト許りお氣がもめるか知れませぬが御免下さいませ、ホ、、、、、」

お寅は満面朱をそそぎ半狂亂の如くなつて、

「これ守宮別さま、お前は、私との約束を反古になさるのかい、サア約束通り命を貰ひませう」

「ハツハ、、、、お寅さま以上に愛する女が出来たものだから、愛の深い方へ鞍替したのですよ。それが戀愛の精神ですからな。どうか今迄の悪縁と諦めて下さい。酒を一杯のんでもゴテゴテ云はれるやうな不親切な女房では、やりきれませぬからな」

「こりやお花のド倒しもの、人の男を寝とりよつて思ひ知つたがよからうぞ」

と云ふより早く、そこにあつた角火鉢を頭上高く振り上げ、お花と守宮別との真中を目がけて投げつけた。灰は濛々と立上り咫尺暗澹となつた。お寅はあまりの腹立しさに氣も狂亂しドツと尻餅をついたまま、息がつまり口をアングリ、鮒が泥に酔ふたやうに上唇、下唇をパクパクかち合せてゐる、その隙に乘じ守宮別は

お花はなと共にとも永居ながゐは恐おそれと、細ほそい路ろ地ぢを潜くぐつて橄欖山かんらんざんの方ほう面めんさして逃にげて行ゆく。
（大正一四・八・一九 舊六・三〇 於由良 北村隆光録）

第二篇 鬼薊おにあざみの花はな

第六章 金酒結婚きんしゅけつこん（一八一—二）

守宮別やもりわけはお花はなと共にとも、お寅とらの靈城れいじやうを逃にげ出だし七八町しちはつちやう來きた横町よこまちのカフエーに入いり、
此處ここ迄まで落おち延のびれば先まづ安あん心しんと、コツプ酒さけをきこし召めすべく、嫌いやがるお花はなの手てを
引ひいて無む理りに奥座敷おくざしきへ通とほり、
オイ、女房にようぼう、イヤお花はな、肝腎かんじんの祝言しうげんの杯さかづきの最中さいちゆうに、お寅とらの極道ごくだうが歸かへつてうせた

ものだから、恰度百花爛漫と咲き匂ふ花の林に、嵐が吹いたやうなものだった。殺風景極まる。折角お前の注いで呉れた酒を膝の上に漉して仕舞ひ、気分が悪くて仕様が無いから、改めて此處で祝言の心持で一杯やらうぢやないか」

「如何にも、妾だつて貴方の情のお汁のお神酒があまり慌てたものだから皆口の外に溢れて仕舞ひ、三分の一も入つてをりませぬわ。ここ迄来れば大丈夫です。悠くりとやりませうか。一生一代のお祝ですからなア。併しお寅さまが後追つかけてでも来たら、一寸困りますがなア」

「ナアニ、尻餅ついて氣絶して居るのだもの、滅多に来る氣遣ひは無い。もし来たつて何んだ。夫婦が杯をして居るのにゴテゴテ云ふ權利もあるまい。そんな事に心配して居ては悪魔の世の中だ、一日もぢつとして居られ無い。神様のお道もお道だが、人間は衣食住の道も大切だから、吾々も夫れ相當にやらねばならぬからなア」

斯く話して居る所へカフェーの給仕が眞白のエプロンを掛け、コーヒーを運んで来て、

「モシお客さま、何を致しませうかなア」

「ウン、先づ第一にお酒を一本つけて呉れ。さうして鰻の蒲焼に鯛の刺身、淡泊した吸物に猪口を一つ手輕う頼むよ」

「藝者はお呼びになりませぬか、何なら旦那さまに適當な別品がムいますよ」

「ウン、さうだなア」

「モシお母さま、粹を利かして上げて下さいな。何と云つても、まだお若いのですからな。藝者が無いとお酒が甘く進みませぬからなア」

「ヤ、また必要が有つたらお願いしませう。兔も角お酒を願ひませう」

と稍プリンとして居る。女は足早に表へ立ち去つた。お花の顔には暗雲が漂ふた。これ守宮別さま、一本だけ呑んで此處を立ち去りませうか、本當に馬鹿にして居るぢやないか。奥さまとも云はず、お母さまなぞと、馬鹿らしくて居られませぬワ」

「マア好いぢやないか、お母さまと見られたなら尚ほ結構だよ。人は老人に見える程價值があるのだからなア」

「それだと云つて餘り人を馬鹿にして居ますわ」

かく話す所へ以前の女は酒肴の用意を調べ運び來り、

「お客様甚うお待たせ致しました。御用がムいましたら何卒手を拍つて下さい」

守宮別はこの女の何處とも無しに色白く、目許涼しく、初い初いしい所がある

のに氣を取られ、口角から、粘つたものを二三寸許り落しかけた。此道へかけて

は勇者のお花、何條見逃すべき、女の立ち去るを待つて守宮別の胸倉をグツと取

り、三つ四つ揺すり、

「これや、妄を馬鹿にするのかい、見つともない目尻を下げたり涎を繰つたり、

アンナ賣女がそれ程氣に入るのか、腐つた靈魂だなア、サア此短刀で腹を切つて

貰ひませう」

「まあまあ待つてくれ、さう取り違をしてくれると困るよ。涎を繰つたのは喉の

蟲が催足して待つて居つた酒を呑みたい爲めだ。目を細うしたのも矢張り酒が呑

みたいからだ。何の立派な立派な、神徳の満ち充ちた、何ぬけ目のないお花さま

の顔を見て居て、何うして外に心が散るものか。お前は些とヒステリックの氣が

あるから困るよ。さう一々疑つて貰つては困る。お寅だつて其處迄の疑惑は廻さなかつたよ」

「さうでせう、矢張りお寅さまがお氣に入るでせう。私は餘程よい間拔だからお前さまに欺されてこんな所迄釣り出されたのですよ。オ、怖や怖や、こんな男にうつかり呆けて居らう者なら、折角國許から送つて來た金を皆飲み倒され、賣女の買収費に取られて了ふのだつた。あゝいい所で氣が付いた。これも全く、龍宮の乙姫様が此男は油斷がならぬぞよ、何程口で甘い事申ても乗るでないぞよ、後悔間に合はぬぞよ、とお知らせ下さつたのだらう。あゝ乙姫様有難ういただきます。私は本當に馬鹿でムいました。オンオンオン」

「こりやお花、さうぶりぶりと怒つて呉れては困るぢやないか。疑もよい加減に晴らしたら好いぢやないか。酒の上で云ふた事を目のつぼに取つて、さう攻撃せられちや、如何に勇猛な海軍中佐でも遣り切れぬぢやないか。酒の上で云ふた事はマアあつさり見直し聞き直すのぢやないか」

「まだ、一口も呑みもせぬ癖に酒の上とは能う云へたものです哩」

「顔見た許りで氣がいくならば……酒呑みや樽見て酔ふだらう」といふ文句をお前が何時も唄つて居るだらう。併しあの文句は實際とは正反對だ。私はお前の顔を見ると氣が變になつて了ふのだ。それと同じに爛徳利を見ると恍惚として微酔氣分になつて了ふのだから、如何かさう御承知願ひたい。さう矢釜しく云はれと酒の味が不味くなつて仕方がない」

「それやサウでせうとも、カフエーの白首を見た目で皺苦茶の妾の顔を御覽になつたつて、お酒の美味しい筈がムいませぬわ。サアサア貴方悠くりとお酒を召上つて代價を拂つてお歸りなさい。妾はもう斯んな銜される所で一時も居るのが苦痛ですわ。貴方はまるで、妾の首を裁ち割るやうな、えぐい目に會はして下さいます。あゝこんな事なら約束をせなかつたら宜かつたになア」

守宮別は自暴自棄糞になり一萬兩の金を放る積りで、態と太う出て見た。

「お花さま、夫婦約束を取り消したいと仰有るのですか、何程私が可愛と思つても、お前さまの方から約束するぢやなかつたにと云ふやうな愛想盡かしが出る以

上は取り消し度いと云ふお考へでせう。守宮別もお花さまに海洋萬里の空で見棄てられ愛想盡かされるのも結句光榮です。サアどうぞ縁を切つて下さい。些とも御遠慮は要りませぬからなア」

「これ氣の早い守宮別さま、誰が縁を切ると云ひましたか、今となつて縁を切るやうな浅い考へで約束は致しませぬよ。そんな事云つて貴方は此お花が嫌になつたものだから逃げ出さうとするのでせう」

「馬鹿云ふな、お前の方から此處を逃げ出すと云つたぢやないか。賣女とお樂しみなさいなぞと散々悪口をつき、此夫に對し愛想盡しを云つたらう。俺も軍人だ、女々しい事は云はない。嫌なものを無理に添ふてくれとは要求せぬ。此縁が繋がると繋がらぬとはお前の心一つぢやないか」

「やあ、それで貴方の誠意が分りました。何處迄も妾と添ふて下さるでせうなあ、本當に憎い程可愛いわ」

と守宮別の肩にぶら下る。

「これや無茶をすな、お酒がこぼれるぢやないか、餘り見つとも好くないぞ。そ

れそれカフエーの女中の足音が聞えて来た」

「ヘン、来たつて何です、天下晴れての夫婦ぢやありませんか。カフエーの女中にこのお目出たいお安うない所を見せつけてやるのが痛快ですわ。ほんとにお母さまなどと人を馬鹿にして居るぢやないか。ねえ守宮別さま、妾と貴方とは假令天が地となり地が天となり、三千世界が跡形もなく壊滅しても、心と心のピツタリ合ふた戀の花實は永久に絶えませぬわネ工」

「ウン、それやさうだ、お寅が嘸今頃にや死物狂になつて俺の後を探して居るだらうが、實に痛快ぢやないか」

「お寅の事は一生云はぬといつただぢやありませんか。矢張り未練があると見えて、ちよいちよい言葉の先に現はれますなあ。エ、悔やしい」

と力一ぱい頬邊を抓ねる。

「これや無茶をするな、放せ放せ放さぬか」

「この頬邊がち切れる所迄放しませぬよ」

と益々引つ張る。守宮別は目から鼻から口から液を垂らして、「アイタ、タ、タ、タ、」

と小聲こごえで叫さけんで居ゐる。其處そこへ女中ぢよちゆうの足音あしおとがしたのでお花はなはパツと放はなした。

「あ怖おそろしいお前まへは女をんなだなあ、今迄いままでコンナ女をんなとは知しらなかつたよ。本當ほんたうに猛烈まうれつなものだなア」

「さうですとも、人殺ひとごろしのお花はなと異名あだなを取とつた強者したたかものですよ。若わかい時ときは妾わたしのレツテルで刃物はもの持もたずと幾人いくにんを殺ころしたか分わかりませぬもの」

と意茶いちやづいて居ゐる。そこへ女中ぢよちゆうが、

「お客様きやくさま、お代かりは如何どうですか」

と云いひつつ入いり來きたる。守宮別やもりわけは慌あわててハンカチーフで顔かほの涙なみだや鼻液はなじるを拭ふきながら、

「ア、何なんでも宜よいからどつさり持もつて來こい、兵站部へいたんぶは此處ここに女房にようぼうが控ひかへて居ゐるからな……」

「どうか熱爛あつかんで澤山どつさりあつさり淡泊あつさりしたものは何かなにか持もつて來きて下ください。お金かねは構かまひませぬから、その代かり藝者げいしやなどは駄目だめですよ、女房にようぼうの妾わたしがついて居ゐますから」

女中ぢよちゆうはビツクリして、

「あゝこれはこれは奥さまでムいましたか。先刻はお母さまなぞと見そこないしまして失禮しました。それでは藝者などの必要はムいますまい。ホ、ホ、ホ」と笑ひ乍ら出て行く。

「これお花、氣の利かない事夥しいではないか。お前と私とは年が母子程違ふのだから、女中がさう云へば夫れでよいぢやないか。俺の目になんぼ十七八に見えても世間から見れば六十の尻を作つたお婆アさまだからなア」

「母子だナンテ、そんな偽りを云ふものぢやありません。又夫婦だと云ふて置けば、藝者なぞ煩さい世話をせうと申しませぬからなア」

「如何にも御尤も、どうしてもお花は俺とは一枚役者が上だわい、エへ、へ、へ」
表には労働者が、コツプ酒をあふりながら四邊かまはず喋つて居る。

「オイ、トンク、ぼろい事をやつたぢやないか。あのお寅婆アさまを助けに行つて大枚二十圓づつ。これで十日や廿日は氣樂に酒が呑めると云ふものぢや。時にあのお寅について居る、蝶蠅とか蜥蜴とか云ふ男、あれはテツキリお寅のレコかも知れないよ。お寅の奴、何時も自分の弟子だ弟子だと吐してけつかるが、あれ

は屹度くつついてけつかるのだらう。その證據を押えて一つ強請つてやつたら又二十圓や三十圓は儲かるだらうからなア

「これテク、ソナ勿體ない事を云ふな。先方は神様ぢやないか、おまけに吾等三人はお寅さまの神力に一耐りもなく打つ倒され、命の無い所を助けて貰ひ、其上重大の使命迄仰せつかつて居るのぢやないか。金が欲しかったらお寅さまに云へば幾何でも呉れるよ。あの時も金が欲しけれや幾何でもやると云つただぢやないか」

「それやさうぢや、まあ悠くりとポツポツに絞り取る事にせうかい。時にツ一口は何處に行きよつたのだらうかなア」

「彼奴は何だか、ヤクの跡を追ふておつかけて行つただぢやないか。ヤクを捉まへて、お寅さまの前に引きずり出し、褒美の金に有り付かうと思つて、抜目なく驅け出しよつたのだよ」

「併し、裏の座敷に一寸俺が最前小便しに行つた時、チラツと目についた客は、どうも守宮別とお花さまのやうだつたが、箸まめの守宮別さまの事だから、お寅

さまの目を忍んで、お花さまと内證で、
をやつて居るのぢやなからうかな
何、お花さまと守宮別が裏に居ると云ふのか、あゝそいつは面白い。サア復二
十圓だ

と云ひ乍ら、トンク、テクの兩人は裏座敷を指して忍び行く。

(大正一四・八・一九 舊六・三〇 於由良秋田別荘 加藤明子録)

第七章 虎角(一八一三)

守宮別お花の二人は奥の一間で、酒汲みかはし乍ら、意茶付き喧嘩をやつて居る所へ、トンク、テク兩人は盗人猫が不在の家を覗くやうなスタイルで、ヌーツと顔をつき出した。お花は早くも二人の姿を見てとり、
「ヤ、お前は、お寅さまと一所に靈城へやつて來たトンク、テクの兩人ぢやないかい、何ぞ御用があるのかな」

トシクは右の手で額を二つ三つ叩き乍ら、

「イヤ、どうも、誠に済みませぬ。些と許り酒代が頂戴致したので、……」

「お前はお寅さまの御家来ぢやないか、妾に些とも關係はありませぬよ、酒代が欲しければ、お寅さまに貰つて來なさい、ノコノコと失禮な、人の座敷へ入つて來て、盗猫のやうに、黒ん坊のクセに何んぢやいな」

「お前さまに直接の關係はありますまいが、ここにゐる守宮別さまには深い深い關係があるのです。……これはこれは守宮別様、大變お樂みの所を、不粹な黒ん坊が二人もやつて來まして、嘸御迷惑でもムいませうが、チツと許り口藥が頂戴致したのでムいますよ」

「何、口藥が欲しいと云ふのかい、守宮別さまの暗い影でも搦んだといふのかいハツハ、ハツハ、白々しい事を仰有いますな。大變なローマンスを見届けてあげばこそ、かうして口藥を頂戴に參つたのです。ゴテゴテ云はずに、ザツと二十圓、二人でめて四十圓、アツサリと下さいな、安いものでせう」

お花は之を聞いて、守宮別がお寅以外に女でも拵へて居るのではあるまいか。

そこを此このトंकに見みつけられて、弱じやくてん點を握にぎられてるのだらう、何なんと氣きの多おほい男をとこだなア。……と稍やや嫉しつと妬と心こころが起おこり出だし、

「これ、守やもり宮り別わけさま、お前まへさまは又またしても又またしても箸はしまめな事ことをしてしてくるのだろ、サ、トंकさまとやら、あつさりと云いふて下ください、さうすりや、お金かねは二十圓にじふゑんはさておいて、五十圓ごじふゑんでも百圓ひやくゑんでも上あげます」

「コレお花はな、コンナ者ものに、さう金かねをやる必要ひつえうがどこにある。相あひて手にしなさるな」
「そらさうでせう、妾わたしがトंकさまを相あひて手にすると、チト、あなたの御ご都合つがふが悪わるいでせう。コレコレ、トंकさま、遠ゑん慮りよはいりませぬ、とつとと守やもり宮り別わけさまのロ－マンスをスツパリと、此この場ばでさらけ出だして下ください」

「ハイ有ありがた難たう、屹きつと度ひやくゑん百圓ひやくゑんくれませぬ」
「併しかし二人ふたりに百圓ひやくゑんだよ。取とり違ちがひして貰もらふと困こまるからな」

「ハイ宜よろしあす、此この守やもり宮り別わけさまは、お寅とらさまと何いつ時つも師し匠しやうと弟でし子のやうな顔かほをして、殊しゆしやう勝しょうな事ことをいふてゐられますが、其その實じつ内ない證しょうでくつついてゐるのですよ。私わたしや、いつやらの晚ばん、橄かん欖らん山ざんの上のぼり口ぐちで、怪け體たいな所ところを見みて置おきました。なア守やもり宮り別わけさま、

其その時ときあなた、人ひとに言いつちや可いけないよ……と云いつて私わたしに十圓じふゑん呉くれましたね」

「ウン確たしかにやつた覺おぼえがある、併しかしそれをどうしたといふのだ。ソナナこた、お花はなさまの前まへで言いつた所ところで三文さんもんの價か値ちも無ないぢやないか。お花はなさまだつて、今日けふ迄までの俺おれとお寅とらさまとの關くわんけい係けいは御承知ごしやうちだからなア」

「それでも、あなた、さういふ事ことを世間せけんへ發表はつぱうせうものなら、貴方あなたもチツトは困こまるでせう」

「阿呆あほうらしい、トンクさま、そんなことなら聞きかして貰もらはいつでも可いいのだよ。此この守宮別やもりわけさまが、外ほかの女をんなと怪あやしい關くわんけい係けいがあつたか無なかつたか、それが聞きかしてほしかつたのだよ。確たしかな證しょうこ據こはなくとも、どこの家うちで酒さけを吞のんで居をつたとか、意茶いちやついで居をつたとか、夫それが分わかれば可いいのだからな」

「へ、五十圓ごじふゑんなら申まを上げます。エルサレムの横町よこまちのカフエーの奥おくで、お花はなさまと守宮別やもりわけさまが一杯いっぱいやり乍ながら、夫婦約ふうふやくそく束そくをしたり、頬ほぺたを抓つめつたり、肩かたにブラ下さがつたり、それはそれは見るに見みられぬ醜しうたい體たいを演えんじてをられました、事ことを私許わたしばかりぢやなく、ここの女中じよぢゆうが證人しやうじんですよ。それも今月今日こんげつこんにち、サ五十圓ごじふゑん、二人ふたりでシメて百ひゃく

圓、如何です安いものでせうがな」

「フツフ、々々、此奴ア面白い。マ一杯やつたらどうだ」

とコップをつき出す、お花は眉を逆立て、聲を尖らし乍ら、

「ヘン、あほらしい、業々し相に、何のこつちやいな。五十兩もお前さま等にや

るやうな、金があつたら、ヨルダン川へでも放かしますわいな」

「宜しい、お前さまが其了見なら、直様お寅さまへ注進致しますよ」

「どうぞ注進して下さい。そして守宮別さまと此お花との交情のこまやかな所を、

お寅さまにつぶさに報告し、忠勤振を發揮なさいませ。最早此お花はお寅さまと

手を切り、守宮別さまとは天下晴れて、切つても切れぬ夫婦ですよ。どうか、お

寅さまに守宮別さま夫婦が宜しう傳へたと仰有つて下さい。そしてエルサレムの

市中へ、妾達夫婦の結婚式を擧げた事を、駄賃をよう出しませぬが、披露をして

下さい」

「エー、クソ面白くもない。ようし、これから、一つお寅にたきつけてやらう」

とテクと共に千鳥足し乍ら、カフエーを立出で、お寅の靈城へと注進の爲忍び行

く。

お寅は守宮別、お花の打つて變つた愛想づかしと無情な仕打に、憤慨の餘り逆上し、暫庭の土の上に倒れてゐたが、漸く氣が付き、邊りを見れば、箱火鉢は腹を破つて木端微塵となり、そこらは灰神樂で、一分許りの疊の目もみえぬ程黒くなつてゐる。ブツブツ小言を云ひ乍ら、穂先の薙刀になつた箒でヤツトの事、灰を掃清め、ドスンと團尻を下ろした所へ、ヒヨロヒヨロになつて、一杯氣嫌の鼻唄諸共、トンク、テクの兩人が入り來たり、トンクは開口一番に、
「これはこれは、生宮様、お一人で嘸お淋しいこつてムいませう。ヤクの後を追つかけて、生宮様がお驅出しになつたものですから、人馬の行通ふ雑踏の巷、貴女のお身の上が險呑だと思ひ、三人が手分を致しまして、そこら中を捜しました所、お行方が分らず、一層の事ヤクを取つ捉まへてお目にかきたいと思ひ、エルサレムの裏長屋迄捜して見ましたが、たうとう幸か不幸か、姿を見失ひました。それから横町のカフェーに立寄り、ブドー酒をテクと二人引つかけてゐますと、それはそれは天地轉倒と云はふか、地震ゴロゴロ雷ピカピカ、いやもう、ドテラ

イ、貴女のお身の上にと取つて、大事件が突發して居りましたので、取る物も取敢ず、お弟子になつた御奉公の初手柄として御報告に参りました」

「それはどうも有難う、お前ならこそ報告に来て呉れたのだ、大方ブラバーサが暴力團でも使つて、此お寅を國へ追返さうとでも企んでゐるのぢやないか」

「イエ、滅相な、ソナ小さい事ですかいな。貴女のお身の上にとつて、天變地異これ位大きな災はムいますまい、なあテク、側から見居つても、ム力づくぢやないか」

「本當にテクも、腹が立つて、齒がギチギチ云ひよるわ、あのザマつたら、論にも杭にも掛らぬわい。お寅さまが本當にお氣の毒だ」

「コレ、序文許り竝べて居らずに、短刀直入的に實地問題にかかつて下さい。一體大事件とは何事だいな」

トクは、

「へー、これ程大事な事を申上げるのですから、貴女はお喜びでせうが、一方の爲には大變な不利益です。さうすれば、貴女に喜ばれて、一方の方からは非常な

怨恨を買ひ、暗の晩にでもなれば、うつかり外は歩けませぬわ。それだから、へへへ、一寸は容易に申上げたうても申上げられませぬ。なあテク、地獄の沙汰も だからなア」

「エー辛氣臭い、お金が欲しいのだらう。お金ならお金と何故あつさり言はぬの だいな」

「ハイ、仰に従ひ、あつさりと申上げます。どうか前金として、二十圓程頂戴致したうムいます」

「ヨシヨシ、サ、あらためて取つてお呉れ」

と其場に投出せば、二人はガキの様に引つつかみ、ヤ二八にポケットへ捻込んで了ひ、

「ヤ、有難う、流石はウラナイ教のお寅さま、底津岩根の大ミロクの生宮、日出神のお寅さま、ウラナイ教の大教主、誠に感じ入りました」

「コレコレ、ソナナ事聞かうと思つて、お金を出したのでない。大事件の祕密を早く聞かして下さい」

「ハイ、これからが正念場です。どうか吃驚せないやうに、胸をすゑて居つて下さいや。エー、實の所は横町のカフェー迄一杯呑みに行きました所、裏の離れに男女が喋々喃喃々と、甘つたるい口で囁いたり、頬べたを抓つたり、金切聲を出して、意茶ついてる者があるぢやありませんか」

「成程、そら大方ブラバーサとマリヤの風俗壞亂組だらうがな。そんな事がナニ妾に對して大事件だろ、併し乍らヨウ報告して下さつた。之から彼方等を力一杯攻撃して、再び世に立てない様、社會的に葬つてやる積だから、そら可い材料だと話も聞かぬ内から早呑込みしてゐる。トンクは言句に詰り、

「もし、お寅さま、さう早取して貰ふと、二の句がつげませぬがな。オイ、テク、お前之から性念場を些と許り申上げて呉れ。お前甘兩貰ふた冥加もあるからの」

「お寅さま、ソナ氣樂な事ですかいな、お前さまの寝ても醒めても忘れない、最愛のレコとあやめのお花さまとが、それはそれは目だるい事をやつていましたよ。私が貴女だつたら、あの儘にはして置きませぬがな。生首を引抜いて烏につかしてやらねば蟲が癒えませぬがな」

之を聞くより、お寅は電氣にでも打たれた如く打驚き、暫しは口を尖らし、目を剥いて言葉も出なかつたが、稍暫時して、

「テ、テクさま、ト、トンクさま、そら本當かいな。本當とあれば、ジツとしては居られない、お花の奴、本當にバカにしてる」
と早くも捻鉢巻をなし、赤襷をかけようとする。

「そら、マ、待つて下さい、さう慌てても、話が分かりませぬ、たうとう二人は夫婦約束を致しました。そして祝言の杯もやり直したといふことですよ」

「ナ、ナアニ、シユシユ祝言の杯、そして又ド、何處の家で、ソ、そんな事を、ヤ、やつてゐるのだい」

「横町のカフエーの奥座敷ですがな、併し乍らトンクが言つたとは、云つて貰へませんで、あとが恐ろしうございますからな」

「コリヤ、トンク、テク、お前も妾の家來に成つたのぢやないか、妾の爲には何でも聞くだろ、妾が踏込んで生首引抜くのも易い事だが、そんな亂暴な事すると、日出神の沽券にかかはる。妾はここで辛抱するから、お前代りにお花の生首引抜

いてヨルダン川へ投込みて下さい。さうすりや、何ぼでもお金は上げるからな」
「何程お金に成りましても、ソナコたア私に出来ませぬワ。暴力團取締令が出て居りますので、二人寄つても、直にスパイが後を追つかける時節ですもの。そんなコたア、御本人直接に決行されたが可いでせう。刑務所へ放り込まれて臭い飯くはされても約まりませぬからな、それとも一萬兩下さらばやつてみて宜しい」

「エーエー腑甲斐のない、何奴も此奴もガラクタ許りだな。守宮別さまは決してそんな無情な人ぢやない。酒に酔ふと、いろいろの事を仰有るが、正直な親切な、誠生粹な大廣木正宗さまの生宮だ、スレツカラシのお花の奴、たうとう地金を放り出し、男を喰はへて、又ツケリコと夫婦氣取で、そんな所へ行って酒をくらうて居やがるのだらう。エーまどろしい、暴力團取締が何だ。日の出神の生宮がお花位に敗北を取つてどうなるものか」
と眉毛は逆立ち目は血走り鉢巻したまま、襷をかけたまま、後先の考へも無く腹立紛れに飛出した。トンク、テクの兩人は、「コラ一大事」とお寅の後を見え隠

れに付いて行くと、十字街頭を微醉機嫌で守宮別がお花の手を引いてヒヨロリヒヨロリとやつて来るのに出會した。お寅はアツと言つたきり、其場に悶絶して了つた。守宮別、お花は掛り合になつては一大事と、素知らぬ顔し乍ら、橄欖山目がけて逃げてゆく。

(大正一四・八・一九 舊六・三〇 於由良秋田別荘 松村眞澄録)
(昭和一〇・三・一〇 於臺灣草山別院 王仁校正)

第八章 擬侠心〔一八一四〕

僕の人生はどこにある 朝から晩までタラタラと
汗水しばつて金儲け しようと思つて人竝に
苦しみ悶え汗膏 殆ど盡きた此體

膏あぶらのやうに絞しぼられて
身體しんたい頓とみに骨立こつりつし

悲鳴ひめいをあぐるその中うちに
君きみと僕ぼくとの人生じんせいは

深く潜ひそんでゐるのだらう
思おもへよ思おもへ友ともの君きみ

資本主義しほんしゆぎなる世よの中なかは
キヤピタリズムを唱となふれば

大罪惡だいざいあくの酵母かうぼだよ
殺人強盜強姦さつじんがうたうがうかんや

詐偽さぎに竊盜脅喝せつたうけふかつや
まだあるまだある澤山たくざんに

これもヤツパリ吾々われわれが
人生じんせいに處ところする餘儀よぎなき手段しゆだんであるだらう

このやうな事ことになつたのも
キヤピタリズムの賜たまものだ

不勞所得者ぶらうしよとくしゃの賜たまものだ
ガンヂガラミに縛しばつてる

その方法ほうはふは警察けいさつだ
裁判所さいばんしよだ刑務所けいむしよだ

も一つひどいのは絞首臺かうしゆだい
おまけに憲兵けんべいだ軍隊ぐんたいだ

まだまだ無數むすうに手段しゆだんある
蜘蛛くもの巢すよりも巧妙かうめうに

鋼鐵かうてつよりも頑強くわんきやうに
無數むすうの吸盤きふばんで吾々われわれの

生血いきちを吸すふたり膏あぶらをば
ねぶつて喰くらふ資本主義しほんしゆぎ

制度せいどの此世このよにある限りかぎ 君等きみらも吾等われらも助たすからぬ

抑人生そもじんせいのおき所どこが 悪わるかつた爲ために吾々われわれは

膚はだへは寒さむく腹はらは餓うゑ 終しまひにや縛しばられ殺ころされる

何なんとかせねばならうまい 惡逆あくぎやく無道ぶだうの此制度このせいど

打うてや、こらせやブル階級かいきふ 振ふるへよ、起たてやプロレタリヤ

立たつべき時ときは今いまなるぞ 政治せいぢ宗教しうけう法律はふりつや

倫理りんりや修身しうしん何なんになる 吾等われらは命いのちを的まとのかけ

子孫しそんのために惡制度あくせいど 破壊はくわいせなくちや人生じんせいの

大本分だいほんぶんが盡つくせない 打うてや懲こらせやブルジョアをを

と四五人しごにんの勞働者らうどうしやが赤い旗あかを立てて橄欖山麓かんらんさんろくを歩あゆんで來くる。待ち構かまへて居ゐた數名すうめいの警官けいくわんは有無うむを云いはせず一人ひとりも殘のこらずフン縛じばつて了しまつた。

警官けいくわん「コリヤ、その方ほうは今何いまなにを歌うたつてゐた。不穩ふおんと認みとめるから捕縛ほばくしたのだ。調しらべる事ことがあるからエルサレム署しよまで迄までキリキリ歩あゆめ」

その中の一人は盛に首を振り乍ら、

「オイ、ポリス、馬鹿にすな、俺達はもとより主義の爲めに生命を捨ててゐるものだから、拘引位は屁の茶とも思つてゐないが、然し乍ら、人民の聲を聞いて省たがよからうぞ。貴様は何だ、僅かな目くされ金を貰ひやつて人民の怨府になり、時代錯誤の張本人の部下となつて、その日を暮すとは實に憐れつばいものだのう。俺は、かう見えても世界で有名なトロツキーだ。どうだ、今此際俺の云ふ事を聞いて一同の縛を解くか、それとも時代に目醒めずして俺等を拘引するか。忽ち汝が頭上に災の來るは電光石火よりも速かだぞ。此聖地には俺の部下が殆ど七八分ある筈だ。それだから何程法律を喧しく云つても、宗教を叫んでも駄目だ。覺醒するなら今だが、どうだ、返答を聞かう。それまでは一寸だつて吾々は動かないぞ」

警官は互に顔を見合せ、トロツキーと聞いて、稍恐怖心に懸られてゐる。警官は各耳に口を寄せ善後策について協議をやつてゐる。そこへ守宮別、お花の兩人がホ口酔機嫌で現はれ來たり、

守宮「オ、これはこれは誰かと思へば警官、こなたでムるか。さてもさても澤山な得物がムつたものだな。エー、併し乍ら、御忠言で恐れ入りますが、一寸、私の言ふ事も聞いて下さい。永くお暇はとりません。何のために労働者をお縛りになつたのですか、労働者は抑も國家生産機關の基礎でムいますよ」

トロツキー「イヤ、お前さまが噂に高い日出島の守宮別さまだ、そして、そこにあるのは有名なお寅さまかい」

守宮「イヤ、お寅さまは、一寸様子があつて此頃靈城に神界のため立籠もつてゐられますよ。私はお寅さまのお弟子と、……エー……、神界の御用でお山に詣る途中ですが、貴方等が縛られとるのを見て、どうも、黙過する譯にも行かず、今警官とかけあつてゐる處ですよ。又何のために、こんな目にお會ひになつたのですか」

トロツキー「今日は全國の農民が労働を祝福すると共に、暴逆極まる資本主義の搾取と壓制に對し、一齊に抗議を投げつけるため、世界の無産階級のために友情を示し、又吾々團體の決意と團結の一層強固ならむ事を誓ふために、示威運動を

全國一齊に行ふ日です。農民組合員は一人も洩れ落ちなく、婦人も青年も、これに加はつて吾々の無産階級團體を作るための運動最中、わからずやのポリスに引かかつたのですよ。警官が何と云ふか知りませぬが一同に農民歌を歌はせますから、それを聞いて農民の苦境をお覺り下さい」

「農民歌始め」と號令するや縛られた六人を初め、その附近に立つて居た人々も口を揃へて歌ひ出した。警官は呆氣にとられて黙つて聞いてゐる。

「農に生れて農に生き

土を耕し土に死す

瘦たる土の香りにも

汗と涙に生きむとす

吾生活の悲愴さは

ブルジョア階級の夢にだに

感知し得ざる悲惨さよ

ア、吾生命に力あれ

吾運動に力あれ。

春幾度か廻れども

富みおごれるは農民の

われわれらうにやくなんによら
吾々老若男女等が

汗と膏の賜物ぞ
あせ あぶら たまもの

汗とあぶらを杯に
あせ あぶら さかづき

汲んでは花にたわむれつ
く はな

秋の月をば慰めに
あき つき なぐさ

酒汲み交すブル階級
さけ く かは かいきふ

寒く餓ゑたる同胞を
さむ う はらから

蔑み笑ひ鞭てり
さげす わら むちう

鬼か大蛇か狼か
おに をろち おほかみ

悪魔のはばる此世界
あくま このせかい

立替せずにおくべきか
たてかへ うんどう

吾等が生命に力あれ
われら いのち ちから

吾等が運動に力あれ。
われら うんどう ちから

たぎるが如き小山田の
たぎる ごと をやまだ

眞夏眞晝も孜孜として
まなつ まひる しし

瀧なす汗をしぼるのも
たき あせ

來らむ秋の八百穂の
きた あき やほかい

稲の實のりの肥料ぞと
いね み こやし

苦熱を凌ぎ草とれば
くねつ しの くさ

高樓絃歌にさんざめく
かうろうげんか

吾等は命を的として
われら いのち まと

此悪風を根絶し
このあくふう こんぜつ

吾等の未來を救ふべし
われら みらい すく

未來は吾等のものなるぞ
みらい われら

吾活動に力あれ
わがくわつどう ちから

吾生命に力あれ

曙白く星寒く

刃の如き秋の風

山野の草は枯れ盡し

地上一面霜をおき

鎌を握れる此手先

霜ふみしめし足の先

罅凍傷に血走れど

憩はむ暇さへなかりしが

その收穫は大部分

地主の倉に収まりて

淋しく泣ける寒狐

住む家さへも壁は落ち

見るも悲惨な光景ぞ

あゝ人生はかくの如

悲惨で一生を通すのか

否々決してさうでない

天の與へし田種物

働くものの所有ぞや

不勞所得者の権力が

どこに一點あるものか

吾等の運動に力あれ

未來は吾等のものなるぞ。

汗あせと涙なみだと血ちを捧ささげ
地上ちじやうに畫ゑがく藝術げいじゆつの
誇ほこりも空むなしく夢ゆめと消きえ
汗あせと涙なみだに汚よごれたる
吾等われらが辛しん苦くの結晶けつしやうは
奢侈逸樂しやしいつらくの犠牲にへとなり
飢うゑと寒さむさに子等こらは泣なく
あゝこの慘状さんじやうをいかにして
いつ迄まで看過かんくわ出來できやうか
吾等われらの命いのちに力ちからあれ
未來みらいは吾等われらのものなるぞ。

咄何者とつなにものの奸策かんさくぞ
正義せいぎの刃やいばに血ちは煙けぶり
自由じいうの劍つるぎをとりて立つ
雄々ををしき勇士ゆうしといたはしき
妻子つまこの上うへに迫害はくがいの
魔まの手ては下くだれり爪先つまさきを
敏謙とがまの如ごとく研とぎすまし
吾等われらが大切だいじの玉たまの緒をを
斬きらむと企たくむブル階級かいきふ
倒たふさにやならぬ吾々われわれは
この世よこの儘まま置おいたなら
彼等かれらの爲ために亡ほろぼされ
子孫しそん斷絶だんぜつするだらう
吾等われらの生命いのちに力ちからあれ

吾等の運動に力あれ

未来は吾等のものなるぞ。

壁落ち軒は傾けど

五尺の體を休養する

爲には自由の誇りあり

吾等貧しく疲れしも

抱く眞理に光あり

永き搾取と壓制に

反逆すべく起てるなり

未来は吾等のものなるぞ

打てよ懲せよブル階級。

君よ見ざるや農民を

全土を覆ひし團結を

君聞かざるや農民を

來れよ友よと呼ぶ聲を

あゝ今吾等起たずんば

混沌の世を如何にせむ

起てよ振へよ怒れよ狂へ

未来は吾等のものなるぞ

トロツキー 『先づ吾々の主義は此通りでムいます、永らくの間、農民は地主資本

家のために生血を絞られ、瘦衰へて参りました。その爲國家の大本たるべき農民は身體骨立し満足な働きも出来ないのです。これに反して不勞所得者たるブル階級は豚の如く、象の如く肥太つて居ります。これも皆貧民の生血を搾取した結果です。神の子と生まれたる吾々人間が、どうして此慘状を眞面目に見てゐる事が出来ませうか。如何に宗教が倫理を説くとも、天國を説くとも、法律が八釜しく取締つても、パンなくして人は世に生活する事は出来ませぬ。そのパンの大部分を搾取する鬼や大蛇の階級を蕩滅し、平等愛の世界に作り上げるのは、吾々志士たるものの天職ではありませぬか。無論宗教は精神的に人類を救ふでせうが、焦眉の急なる衣食住の問題を閑却しては、宗教の權威も有難味もムいませぬ。そんな手ぬるい手段では、今日の世を救ふ事は駄目だと思ひます」

守宮「成程尤も千萬だ、僕は賛成を致します。もし警官どの、どうか此憐れな労働者を解放して下さい。その代り拙者が代人となり括られませう」

お花「これ、守宮別さま、何と云ふ事を、お前さまは仰有るのだい。人の罪迄引受けると云ふ事が、何處にありますか。私をどうして下さるおつもりですか」

守宮「ナザレのイエス・キリストでさへも世界萬民のため十字架にかかられたぢやないか。俺がいつも酒を飲んで浮世を三分五厘で暮してゐるのも、社會人類のため命を投げ出してゐるからだ。ブラバーサやお寅さまの様に口ばかり云つて居つても誠が無けりや駄目だ。俺は之から無産階級者の代表となつて處刑を受けるともりだ」

お花「それも、さうでムいませうが、これ守宮別さま、お前さまが、そんな處へ行つた後は、妾はどうするのですか」

守宮「お前は、精出してお酒の差入をするのだ」

お花「酒なんか差入は出来すまい」

守宮「出来いでかい。今の役人は皆飢る腹をかかへてブリキを佩つて威張つてゐるから、ソツと金さへやれや何でも、云ふ事を聞くよ」

かかる所へ俄かに四邊騒々しく數百人の、暴漢が現はれて警官を十重二十重にとりまき袋叩きにして了つた。トロツキと名乗る男、及び縛されて居た連中は、この隙に各繩目をとき凱歌をあげ何處ともなく消えて了つた。守宮別お花は得意

になり、鼻歌を歌ひ乍ら橄欖山上目がけて登り行くのであつた。

(大正一四・八・一九 舊六・三〇 於丹後由良 北村隆光録)

第九章 狂怪戦(一八一五)

お花 有爲轉變は世の習ひ 天が地となり地は天と

變る浮世の有様は お花と貴方の事だらう

寢ても醒めても夢現 日の出の神の生宮に

頭の先から爪の端 身も魂も打ちこみて

惚れてムつたお前さま どうした風の吹廻しか

私とコンナ仲となり 二世を契つた夫婦連れ

此聖場の神様も 嗚や御嘉納なさるだらう

何程神ぢや佛ぢやと 高尚な事を云つたとして
人は肉體ある限り 湧いて出て来る性の欲
満たす事をば知らずして 可惜月日を送るのは
天の與へた快樂を 蹂躪すると云ふものだ
ラブ・イズ・ベストをふり廻し 自由自在に性の欲
遂げた處で神様の 干涉すべき理由はない
あゝ面白やたのもしや コンナ尊き歡樂を
お寅婆アさまにだまされて 龍宮海の乙姫の
身魂ぢや改心せにやならぬ もしも男に觸つたら
八萬劫の罪咎が 一度に現はれ日に三度
極寒極暑の苦しみを 受けると甘く騙かして
私を十年釣つて呉れた ほんに思へば思ふ程
妾は何と云ふ馬鹿だらう 戀に目醒めた此お花
もはや弓でも鐵砲でも びくとも動かぬ磐石心

固めた上はお前さま

浮氣心を拂拭し

どこどこ迄も偕老の

契を結んで下されや

命も寶もなげ捨てて

お前に任じた此身體

焼いて喰はふと煮て喰はふと

決して不足は云ひませぬ

さはさりながら旦那さま

貴方は本當に水くさい

二世を契つた女房の

ある身で居ながらうかうかと

義侠心をば放り出して

トロツキーさまの身替りに

警察署の門戸をば

潜つてやらうと仰有つた

義侠も仁侠もよいけれど

ソナナ無益な犠牲をば

拂つて居つては世の中に

生て行く事ア出来ませぬ

これ許りは旦那さま

私が可愛と思ふなら

思ひとまつて下されや

人氣の悪い世の中は

何時騒動が起るやら

分つたものではありませぬ

其度毎に犠牲者と

なつて行かれちや此お花

どうして立つ瀬がありません 軍人さまを夫にもち

喜び勇む間も非ず コンナ苦しい思ひをば

させられやうとは知らなんだ 大和魂か知らねども

今後は止めて下されや 可愛女房が手を合せ

涙流して頼みます あゝ惟神々々

ウラナイ教の大御神 千變萬化に移動する

夫の心を喰ひ止めて 私の身魂にピッタリと

釘鋸を打ったやうに 離れないやう願ひます

これが一生の願ひだ 縁と云ふもの妙なもの

海外萬里の此國で 何とも思ふて居なかつた

守宮別さまが戀しうなり 足許さへも見えぬ迄

戀の暗路に迷ひました 私は心が狂ふたのか

吾と吾身が怪しうなり 合點行かぬよになりました

ホんに女と云ふものは 男にかけたら脆いもの

男をとこの一いつ嘖びん一笑いつせうが
胸むねに五寸釘ごすんぐぎ打うつやうに

苦くるしい思おもひがして來きます
頭あたまに霜しもをちらちらと

戴いたく身みながら村肝むらぎもの
心こころは元もとの二に八はち空そら

胸むねはどきどき息いきつまり
恥はぢも外聞ぐわいぶんも何なんのその

コこンナ心こころになつたのも
罪つみなお前まへがある故ゆゑだ

廣ひろい天地てんちの其間そのあひに
たつた一人ひとりのお前まへさま

私わたしの命いのちぞ力ちからぞや
もしもお前まへが死しんだなら

さつぱり此世このよは地獄ぢごくぞや
地獄ぢごくの底そこの底そこ迄までも

好すきな貴方あなたと諸共もろともに
落おちて行ゆくなら厭いとやせぬ

これ程ほど思おもふて居ゐる私わしを
すげなう見捨みすてて下くださるな

見捨みすてられたる其時そのときは
地震雷火ぢしんがみなりひの雨あめも

まだまだおるか鬼おにとなり
大蛇をろちとなりて素首そつくびを

引ひきぬきますよ旦那だんなさま
先さきに氣きをつけおきまする

あゝ頼たのもしや頼たのもしや
處ところは世界せかいの中心地ちゅうしんち

貴き神のあれませる

橄欖山の聖城で

三十四年も若返り

嶮しき御山を手を曳いて

詣る心は天國の

花咲き匂ふ樂園を

百のエンゼルに導かれ

登つて行くやうな心地ぞや

あゝあゝ長生きすればこそ

年を取つてから戀愛の

本當の本當の味ひが

分つて來たのだ有難い

日の出の神や大ミロク

生宮さまの前だとて

コンナ楽しい潔い

思を今迄せなかつた

ホんに貴方は救世主

天津御國のエンゼルよ

あゝ惟神々々

御靈幸倍まませよ。

ホ、、、、、これ守宮別の旦那さま、私の思ひを汲み取つて下さつたら、餘り

憎ふはムいますまい。どうかイターナルに愛を注いで下さいな。道草を喰つたり

横を向ひたりしちや嫌ひですよ。私と云ふ立派な奥さまがあるのに元が軍人氣質

だから要らざる義侠心を出し、暴悪無頼のトロツキーなどの身替りにアタ阿呆らしい警察へ縛られ行くナンテ、そんな事は止めて下されや。何程世の中を救と云つたとしてキリストさまのやうに磔刑になつちやたまりませぬよ」

「お前と一緒に磔刑になつたらよいぢやないか、萬劫末代名が残るぞよ。お前とお寅さまと口癖のやうに、世界の萬民を助けたら萬劫末代結構な名が残るといつて居たぢやないか。昔キリストが十字架にかかつて萬民の罪を贖つたと云ふこのエルサレムで世界の犠牲者となり末代の名を残すのも人間としては痛快事だよ。

なアお花さま」

「嫌ですよ、お花さまなんて他人らしいソナ言葉おいて下さい、何程名が残ると云つたつて命が無くなつて了へば肉體的歡樂を味はふ事が出来ぬぢやありませんぬか」

「死んで未来で仲よく添ふたら好いぢやないか、さうすれやお前もお寅さまに取りかへされる心配も要らず、宇宙第一の安全地帯だよ。俺だつてトロツキーなどの身替りになるやうな馬鹿ぢやないが、一寸お前に實の處は……義侠心の強い男

だなア……とこのやうに思はし度いので芝居をやつて見たのだ。其上澤山の農民團體や労働團體が傍にごろついて居たものだから、日の出島の守宮別と云ふ男は義侠心に富んだ男だ、彼れこそ眞當の救世主だと世界中に名を廣めやうと思つた私の策略だよ。兎角人間は廣く名を知られないと仕事が出来ないからなア。あのウズンバラ・チャンダーだつて實際に交際あつて見ればコンマ以下の人間だ。俺から見れば小指の端にも足りないやうな小人物だ。そいつがふとした事から事件を捲き起し世界中に名が響いたものだから、世界の阿呆共がキリストの再来だ、ミロクの出現だ、メシヤだ、などと擔ぐやうになつたのだ。賣名策には労働者の中に入つて一寸味をやるのが一番奥の手だよ、ハ、ハ、ハ、」

「ホ、ハ、ハ、何とまあ抜け目の無いお方だ事。それ丈の知恵がある癖に今迄どうしてお寅さまのやうな、没分曉漢に食ひついて入らつしやつたのですか」

「お寅さまは變性男子の系統ぢやないか、脱線だらけの分らない事を喋り立てて居ても、何と云ふても系統だから、三五教の没分曉漢連がコソコソとひつつきに來よる。そいつを利用して、つまり要するに三五教の轉覆を企て、變性女子の

地位ちゐに取とつて代かはらうと云いふ大野心だいやしんを持もつて居ゐたからだ」

「何なんとまア人ひとは見みかけによらぬものだ事こと、夢ゆめか現うつつの守宮別やもりわけさまと播陽ばんやうさまでさへ云いつて居ゐられた位くらゐだから、酒さけさへ吞のましておけばいい男をとこだと思おもつて居ゐたに、聞きけば聞きく程ほど頼たのもしい何なんと云いふ立派りっぱな男をとこだらう。併しかしそれも無理むりもない、世せ界かいの事ことにかけたら酸すいも甘あまいも辛からいも悟さとりきつた蹴爪けづめの生はえた、コケコツコウか、尾をが二ふたつに分わかれた山猫やまねこのやうなアヤメのお花はなを蕩とろかすと云いふ腕うでがあるのだもの、ホ、ホ、ホ、油断ゆだんも隙すきもならない主人しゅじんだわ。一ひとつ守宮別やもりわけさま、否いな旦那だんなさま貴方あなたの得意とくいな鈴すず蟲むしのやうな聲こゑで詩吟しぎんでもやつて下くださいな。私わたしばつかりに歌うたはしてあまり平衡へいかうが取とれませぬわ」

「よしよしお望のぞみとあれば詩吟しぎんでも何なんでもやらう」

と銅羅聲どろしゑを張はり上げ大口おほぐちをあけ、

「月落つきおち烏啼からすないて霜天しもてんに満みつ

曉あかつきに見みる千兵せんべいの大たい河がを擁ようするを……

ゼスト……」

「これ旦那だんなさま、ソナ舊ふるめかしい詩吟しぎんならもう止やめて下ください。どうか私わたしの事ことを

謠うたつて貰もらひたいのですがなア
『よしよし、それぢや新派しんぱで一つひとやつて見みやう。齒はの浮うくやうな艶つやつぽい歌うただよ、
オホン。

天てんを背景はいけいとなし

地ちを舞臺ぶたいとなし

雲くもの袖そでをふるつて

大宇宙だいうちうに活躍くわつやくす

あゝ吾人われひとと生うまれて人ひとに非あらず

さりとして獸けものにも非あらず

又また神かみでもなれば佛ほとけにも非あらず

廣ひろい宇宙うちうに只ただ一點いってんの肉塊にくくわいとして

忽然こつぜんとして住すめるのみ

あゝ天てんの時とき今いまや到いたりて

世界の中心地點

日の出の島の又中心

浪花の遊里に初聲をあげたまひし

あやめの君と懇親を結ぶ

吾現世に生誕して初めての歡喜を知る

醫者と南瓜はヒネたのがよい

色は年増が良め刺す

あゝ何たる幸福ぞや

お寅の如きは物の數ならず

其面貌はアトラスの如く

其臀肉は搗臼の如し

アヤメの君とお寅婆を比較すれば

天空に輝く月光菩薩と

地中に潜む泥龜の如し

加ふるにお寅の懐中には

僅かに千金を剩すのみ

黄金萬能の現世に於て

萬金を懐中する

アヤメの君こそは

富においても最大優者なり

この夫人にしてこの金あり

この夫人にしてこの夫あり

俗に所謂鬼に金棒とは

這般の消息を物語るものか

あゝ愉快なりカンランの山

夫となり妻となつて此艶姿を天地の萬物に觀覽せしむ

宇宙の幸福を吾と汝と獨占して

生乍ら幸福の神となり

萬劫末代生通しの仙術を學び

天地と共に悠久に生むとす

あゝたのもしきかな たのもしきかな

カンランの神山の夕

月は皎々として五色の雲の階段を昇り

星は燦爛として金銀の光を放つ

天清く地又清し

吾清く汝又清し

半日の清遊實に心膽を洗ふの思ひあり

喝。

□

「あゝ吃驚しましたよ、狸のやうな口あけて、喝なんて何ですか。喰ひつかれるかと思ひましたよ」

「あまりお前が可愛いで頭から嘔ぶつてやらうと思つたのだ、アハ、ハ、ハ」

「オホ、、、あのまア旦那様のほどのよい事哩のう。その聲で蜥蜴喰ふか杜鵑式だから一寸も油断は出来ないわ」

「おいお花、もう黙つて行かう、どうやら、あの木蔭に人が居るやうだ、些と許り見つともないからなア。お前は二三間離れてついて来て呉れ。さうして人の居る所で旦那さまなぞと云つて貰つちや困るよ」

「ハイ、旦那さまつて今日限り申ませぬ。よう氣の變るお方ですな」と早や悋氣の角を生して居る。

守宮別は小聲で、

「あゝ女子と小人は養ひ難しとは能くいつたものだな。柔しく云つたら自惚る、強く云へば吠える、殺せば化けて出ると云ふ魔物だからなア、アア」

お花は小聲でハツキリわからねどアアの聲を聞き、こいつは又例の心境變化の境界線ではないかと心配のあまりサツト顔色變り蟆蛙の鳴き損ねたやうな面をさらし居る。

路傍の五六間先の木の下から瓦をぶちやけたやうな笑ひ聲が聞え來りける。

(大正一四・八・二〇 舊七・一 於由良 加藤明子録)

(昭和一〇・三・一〇 於臺灣別院蓬萊殿 王仁校正)

第一〇章 拘淫(こういん) (一八一六)

橄欖山(かんらんざん)の坂道(さかみち)の木蔭(こかげ)に四五人(しごにん)のドルーズ人(じん)や、アラブ(ユダヤじん)や、猶太人(ユダヤじん)が勞働服(らうどうふく)を着(き)た儘面白相(ままおもしろさう)に雑談(ざつだん)に耽(ふけ)りある。その中(なか)の一人(ひとり)なるバルガン(バルガン)は、

「オイ、ガクシー、汝(きさま)は此間(このあひだ)の戦争(せんそう)に行(い)つたといふ話(はなし)だが、金鷄勳章(きんしくんしやう)でも貰(もら)つたのか。花々(はなばな)しき功名手柄(こうみやうてがら)をして歸(かへ)るなぞと云(い)ひよつて、近所(きんじよ)合壁(がつべき)に送(おく)られ、大變(たいへん)な勢(いきほひ)であつたが、凱旋祝(がいせんいはひ)も根(ね)つから聞(き)いた事(こと)もなし、いつの間(ま)にか吾々(われわれ)勞働者(らうどうしや)仲間(なか)に舞戻(まひもど)つて來(き)よつたが、一體(いつたい)戦(たた)ひの状況(じやうきやう)は何(ど)うなつたのぢやい」

ガクシー「ドルーズ族(ぞく)のあの叛亂(はんらん)によつて佛軍(ふつぐん)から雇(やと)はれ、ジエーベル・ドルーズ(ドルーズ)の都(みやこ)、ジエール(ジエール)に進軍(しんぐん)した時(とき)、ドルーズ族(ぞく)の勢猖獗(いきほひやうけつ)にして、佛軍(ふつぐん)は手(て)もなく打(うち)

破られ、はじめな態で四方八方へ、一時は散亂して了つたのだ。其時俺は軍夫として、實の所は後の方に輸送をやつてゐたが、大砲の弾が、間近にドンドン落ちて來るので、何奴も此奴も腰を抜かし、肝腎の軍夫が、兵隊に擔架に乗せられて運ばれるといふ惨めな態だつたよ」

「あれ丈軍器の整うたフランスの精兵が、なぜ又暴民團體たるドルーズ族に脆くも打破られたのだ。チとバランスがとれぬぢやないか」

「そこが所謂戦争は水物といふのだ。兵數の多い方が勝つ共、武器の整頓した方が勝つとも、又は武器の調はない兵數の少ない方が勝つとも、それは時の運だから分らないワ。何しろドルーズ族は一兵卒に至る迄地理には精通して居る上、人の和を得てる上、あれ丈の人氣だつたから、其虚勢丈でも勝なねばならぬ道理だ。僅か二萬位の叛亂軍に五萬のフランス兵が、飛行機も大砲も輜重車も、何もかも打ちやつて、命カラガラ敗北して了ひ、ドルーズは敵の武器を應用して、あく迄も頑強に戦ひを續けるものだから、佛軍はたうとうジェーダの首都を占領されて了つたのだい。本當に強い者の弱い、弱い者の強い時節になつたものだ」

「さうすると、俺達も社會の弱者として、地平線下に汗にひたつて蠢動してゐるのだが、何時か又頭をあげる時があるだらうかな」

「あらいでかい、有爲轉變の世の中だ。いつ迄も世は持切にはさせぬと、どつかの神さまもいつてゐる相だから、未來は必ず吾々プロレタリアの天下だ。まあまあクヨクヨ思はずに、暫く辛抱するのだな、今日も今日とて、エルサレムの町を温順う歩いてゐると、俺の風體が醜いとか怪しいとか云ひやがつて、スパイの奴、何處迄も尾行してうせるのだ。そして吐す事にや……君はどつから來た、そして何處へ行く。何の用だ。年は幾つだ。姓名は何といふ……などと三文にもならぬ「おせつかい」を遊ばすのだから、道も安心して歩けやしないワ。丸で上に立つてゐる役人共は、子供につつかれた蜂の巢の番兵蜂の様な神經過敏になつてゐやがるのだからのう」

「本當に約らぬ世の中だの、何時迄も此儘にして置こうものなら、世界はメチャメチャになるだらうよ。どうしても此調子では十年たため内に大革命が起るだらうと思つてゐるのだ」

「そらさうだ、生活難や就職難の叫びがこれ丈喧しくなつて居るのだもの。ブル
階級や役人共も可いかげんに目を醒ましやがらぬと、たつた今、俺達と地位轉倒
して彼奴等は惨めな態になるだらうよ。俺や其世が来る迄は死んでも死なれない
のだ。先祖代々から彼奴等に虐げられて來たのだもの、祖先の恥を雪ぐのは、吾々
子孫たる者の義務だからなア。最前も此山麓でトロツキとかいふ男が、労働團
や農民團を集めて過激な演説をやつて居つたが、聽いてみれば一から十迄御尤も
至極だ。併し乍ら、あんな事を聞いて居らうものなら、蜘蛛の巣をはつた如き警
察の網にかかつて、厭應なしに、暗い所へブチ込まれちや大變だと思ひ、君子は
危きに近付かずといふ筆法で、ここ迄スタスタやつて來りや、君たち御連中の御
集會、屹度今頃にや、何か亂癡氣騒ぎが始まつてるかも知れないよ」
「誰でも可いから、確りした犠牲者が現はれると可いのだがなア。さうすりや俺
達ア、漁夫の利を占て安樂に暮せるのだけれど、何奴も此奴も小ざかしい人間許
りで、自分の身命を賭して矢面に立つといふ大馬鹿が出て來んで、サツパリ駄目
だ。かういふ時にや、どうしても大馬鹿でなけりや、世界の改造が出來ないから

のう』

『そらさうだ。ドルーズ族の酋長カンバスでさへも、始めは大變な勢で矢面に立ち、二萬の民衆に武器を携帶させ、フランス軍と勇敢に戦ひ、一時は大勝利を博しよつたが、いよいよ茲といふ所で、俄に怖氣立ち、安全地帯に身を逃れよつたものだから、全軍の士氣頓に阻喪し、折角取つた首都も再び佛軍の手に歸し、重立つた者は何れも縛につき、ドルーズ族へは莫大な賠償金を云ひ付けられ、ヤツトの事で、カンバスの哀願に仍つて、大赦令を布かれ、一件落着するはしたものの、ドルーズは酷い破目に陥つたものだ。徹底的にどこ迄も犠牲になるといふ奴さへあれば、あんな事は無いのだけれどな、何と云つても烏合の衆だから、バラモンには最後迄敵する事は出来やしないワ。之を思ふと吾々プロレタリアの前途も暗澹たるものだないか。腹いせまぎれに、夜中密かに役所の門に小便を屁りかけたり、糞を垂れた位では何にも效はないし、大頭の一疋や二疋爆彈でやつてみた所で、飯の上の蠅を追ふやうなものだ。先ぐり先ぐり次から次へと、だんだん悪い奴が現はれて、益々吾々に對して嚴しい法律を發布したり、三人寄つて話を

しても拘引するといふ、石で手をつめたやうな目に會はすのだから、矢張り、弱者の弱い、強い者の強い時節だ……と云つても仕方がない。強い者の弱い、弱者の強い時節は萬年に一度位しか、廻つて来るものぢやない。何だか日出島からブラバースとかいふ宣傳使がやつて来て、今に救世主が現はれるとか、神が表に現はれて善と惡とを立別けするとか、下が上になり、上が下になるとか、ほざいてゐるやうだが、これも一種の宗教擴めの廣告に過ぎないだらう。何程宗教が愛を説いても、パンを與へてくれなくちや、吾々は生存權を保持する事が出来ないのだからなア。……ヤ、何だか山下に當つて、騒がしい聲がし出したぞ。トロツキ一の奴、どうやら警官隊と格闘を始めたらしいワイ。ソロソロ降りて壯快な戦鬪振りを見物せうぢやないか。獅子の子か何ぞのやうに、かう木かげに潛伏して、世を呪ひ、悲鳴をあげて居つても、一文の所得もなし、愉快もないからのう」

「おけおけ、コンナ時に出るものぢやない。側杖をくつて打ち込まれちや大變だ、先づ嵐の後の静けさを見聞するのが、處世上伶俐なやり方だ。それよりも腹いせに何か面白い話をせうぢやないか」

「俺達に面白い話があつて堪らうかい、朝から晩までブル階級に酷きつかはれ、僅な賃金を恵まれて、孜孜として僅に露命をつないでる悲惨な境遇にあつては、到底面白い味も分らず、苦しい事許りだ。俺が五六年前の事だつたが、仕方がないので、人力車夫をやつてゐると、家主の奴、人並よりも高い店賃を取り乍ら、従僕か何かのようにガクシーガクシーと口ぎたなく呼つけにしゃがつて、雪隠の掃除までいひ付けくさる。劫腹でたまらないが、恐れれば家を出て行けと云ひやがるし、裏店の隅々迄貧民でつまつてゐる此際、此處を放り出されたが最後、忽ち親子が野宿をせなくちやならず、仕方がないので辛抱して居ると、しまひの果にや、おれの嬢の名を呼捨にさらすのだ。けつたいの悪いの胸糞が悪いのつて、胸が張裂ける様だつた。そこで俺は道路の端に餓えて、死にかけてる野良犬を一疋拾つて来て、そいつに家主の名を付け、大きな聲で、……コラ權州々々……と口汚なく喚き立て、其度毎に拳骨で頭を、大家の權州だと思ひ、撲りつけてやつた。其時や、チツと許り痛快だつたが、野良犬の奴、大變な大喰をしよるので女房子供の腮が干上り相になつた。此奴にや一つ俺も面くらはざるを得なかつたが、そ

れでも人間は意地だ。こんな所で屁古たれちや、男が立たないと、要らぬ所へ力
瘤をいれ、働いても働いても、皆犬にしてやられる。苦み果ててる矢先へ、大家
の權州奴、大きな犬を俄かに三疋も飼ひやがつて、其奴に俺の名と女房の名と倅
の名を付けやがつて、家内中が寄つて集つて呼びつけにしゃがるので、俺もこん
な所で屁古垂れちや仕方がない。もつと犬を集めて大家の家内中の名をつけて、
呼つけにしてやらうと思つたが、能く能く考へてみれば、大きな家に三夫婦もけ
つかつて、子や孫總計二十八匹も居やがるものだから、たうとう根負して旗をま
き、矛を収めて、一時ジェールの都迄逃出して了つたのだ。本當に仕方のないも
のだよ』

「ハ、ハ、ハ、ハ、そら失敗だつたね。さうだから、昔の賢人とか君子とかいふ阿呆
者が、長い者にまかれよ……とか、衆寡敵せず……とか、ほざきよつたのだ。何
程面白い話が無いといつても、失敗許りぢやあるまい。お前だつて、永い事人力
屋をして居れば、些と位ボロい事もあつただらう』
「いやもう失敗だらけだ。エー、コーツと、何時やらの夕まぐれだつた。ジェー

ルの都みやこの郊外かつかわいを歩いてると、大きなデーツプリと太ふとつた、布袋ほていのやうな男をとこがやつて來きよつて、俺おれは萬民ばんみんに福ふくを與あたへる福ふくの神かみだから、一時間いちじかん許ばかり乗のせて呉くれないか、……と云いひよつたので、お金かねは幾いくら下くださるか……といへば、お前まへに金かねをやつては……福ふくが退いぬ。俺おれさへ乗のせておけば、屹度きつとそなた汝うちの内うちは明日あすから繁昌はんじやうすると云いひよつたので、此奴こいつア願ねがうてもない事ことだ、一時間いちじかん許ばかり無料ただばたらき働きしても構かまはぬ、八卦はっけみて貰もらつても三十錢さんじつせん五十錢ごじつせんは取とられるのだ……と思おもひ、クソ重おもたい、太ふとい福ふくの神かみを乗のせて、町中まちぢゆうを右みぎへ左ひだりへウロつきまはつた所ところ、モウ之これで可いいと言いひよつたので梶棒かぢぼう下おろしよると、一寸ちよつと便所べんじよへ行いつて來くると吐ぬかしよつてなア。便所べんじよへ入はいると姿すがたが見みえなくなつて了しまつたので、それから俺おれも便べんが催もよほしたので便所べんじよに入はいり、澤山たくさんの雪隠せつちんの戸とを開あけて、一々いちいち點檢てんけんしてみたが、影かげも形かたちもない。此奴こいつアいよいよ福ふくの神かみだ、姿すがたが消きえたのだ。キツと明日あすから福ふくがあるに違ちがひないと、吾家わがやへ歸かへり、車くるまをしまはうとすると、そこへ財布さいふが残のこつてゐる。下さげてみると中々なかなか重おもい。ヤ此奴こいつアしめた。いかにも福ふくの神かみ様さまだわい。有難ありがたう頂戴ちやうだい致しますと五六遍ごろくべん頭あたまの上うへへ捧ささげ、神棚かみだなへまつり、鹽しほをふつて、其處邊そこらぢゆう中清ちよきよめ、開あけて見みた所ところ、大枚百兩たいまいひやくりやうの丸金まるきんが目めを剥むいてけつか

る。コリヤ、祝をせにやなるまいと、俵引友達や近所合壁を集めて、其中の金を三十圓許りはり込んだ積りで、百圓の金を料理屋に見せつけて置き、仕出しをさして、一生懸命に福の神さまを讚美し、呑めや唄への大散財をやつて居ると、昨夜の福の神奴、ポリスと共にやつて来よつて、棚の上にある財布に目をつけ、：これは昨夜俵の上に忘れて置いた金だとぬかし、有難うとも御苦勞とも吐さず、ポリスの奴おまけに、拾得物の隠匿罪でもあるやうな面して、睨めつけて歸つて了ひやがった。怪體が悪いの悪くないのつて、其時丈は女房にも申譯立たず、穴でもあれば入りたい様な氣がしたよ。それから料理屋の奴、三十圓の催促に毎日日々やつて来やがる。どれ丈働いたつて、三十圓はおるか三圓の金も出来ないで、女房に因果を含め、又もや貧民窟の端つぱへ宿替をしてやつたのだ。ホンの一晚又カ喜びをした丈だつたよ。運の悪い者といふ奴ア、する事なす事悪いものだ。あゝあ、本當に世の中が厭になつて了つたワイ」

「ウツフ、其時の嬢の顔が見たかつたのう」

「丸切り出来損ひの今戸焼のダルマみた様な顔をしてふくれた時にや、俺も聊か

面目玉をつぶしたよ。エーエ、怪體の悪い、序にも一つ話してやる。これも人力引いてみた時の話だ。日輪様が西の山の端に半身を隠された時分、一人のお客がやつて来て、……オイ俵屋、俺はジェールの都を見物に來た者だが、人の顔の見えぬ様になる迄、十錢與るから乗せて呉れぬか、……と吐すので、此奴あボロい、三町か五町歩きや、ズツポリと日が暮れるだろ。其間に十錢の金まうけはボロいと、二つ返事でお客を乗せ、ゴロゴロと引張出した所、二時間たつても三時間たつても下りようとぬかさず、とうと、夜明け頃迄俵を引かされた。それでもまだ、人の顔が見えるぢやないか、とお客は吐す。可怪しいと空を仰いで見ると、何の事だ、十四日の月夜だつた」

「ハ、可い馬鹿だな。どうで運の悪い奴のする事はそんなものだ。おまけに餘程の頓馬だからな、フ、フ、」

四五人の労働者も共に聲を揃へてゲラゲラと笑つてゐる。そこへ守宮別、お花の兩人は何だか意茶つき乍ら坂路を上つて來た。

バルガン「オイオイ、彼奴が日出島からやつて來たといふ、フンゾ喰ひの泥酔の

守宮別といふ奴だ。そしてあの婆は石灰ガマの黽のやうにコテコテと白粉をぬつて若う見せてゐやがるが、お寅といふ氣違婆に違ないよ。一つ腹いせに黽つてやらうぢやないか」

ガクシー「なぶつたつて仕方がないぢやないか。何とか因縁をつけて、懐の金でも、おつぱり出さすよにせなげや、忽ち明日の生計が立たないからの」

「それもさうだ、一つ相手になつてみよう」

と云ひ乍ら、守宮別の前にツカツカと進み寄り、

「エ、一寸物をお尋ね申ますが、日出島からお越になつてゐる、守宮別さまとい

ふ立派な宣傳使様は貴方ぢやムいませぬか」

守宮「ウン、俺は守宮別だ。何ぞ用かな」

バルガン「ハイ、別に用といふてはムいませぬが」

「何だい、用がなけりや、アタ邪魔臭い、尋ねるに及ばぬぢやないか」

「オイ、ガクシー、之から汝の番だ。何だか尋ねる様な事があるやうに云つてたぢやないか。ドンドンと、それ、物になる迄尋ねるのだぞ」

ガクシー「ヨシ来た。之からが俺の本舞臺だ。モシモシ守宮別さま、此御婦人はお寅さまでせうね。最前も聞いて居れば、神聖にして犯す可らざる此靈山へ、お寅さまと意茶つきもつて、お登りになつたが、左様な事をやつて貰ふと、聖地が汚れますよ。エルサレムの市民がこんな事を聞かうものなら、お前さま、どんな事になるか知れませぬぜ」

「ハツハ、ハ、ハ、妬くない妬くない、アレは、あやめのお花といつて、日出島切つての別嬪だ。お寅なんか古めかしいワ。今日更めて結婚式をあげ、此靈山へ御禮参り傍、新婚旅行と洒落てゐるのだ。神さまだつて、聖場だつて、夫婦が参るのを咎める理由はあるまい。自由の權だ。放つといてくれ」

「放つとけといつても、放つとけぬワイ」

「ソナラ何うするといふのだ」

「汝の生命を頂戴するのだ、覺悟せい」

「ハ、ハ、ハ、ハ、おあいにくさま。一つより無い大事な大事な生命は、新夫人の花子嬢にサーツパリ與へて了うたのだ。モウ此上やらうといつたつて、やる物がな

いワイ「

お花「ホ、、、、もしもし皆様、守宮別さまの命は皆このお花が頂戴したのですよ」

ガクシー「エー、のろけよるない。ここを何と心得てゐやがる」

「ここはパレスチナの中心地、エルサレムの市街を下に見る、キリスト再臨に名も高き、橄欖山の中腹ですよ」

「そらなーんぬかしてけつかる。誰がソナ事を聞いてゐるか。サ、汝の命と守宮別の命と、二つ乍ら一緒に貰はう、サ覺悟せい」

「お易い御用、何卒、生命をお取りやしたら、頼んでおきますが、守宮別さまと一緒に體を引括つて葬つて下さいや」

「エー、此奴アたまらぬ、まだ惚けてゐやがる。箸にも棒にもかからぬ代物だな」
「ホ、、、、、どうで、お前さま方の手に合ふやうな女ぢやムいませぬワイな。お前さまは其んな事いつてお金」が欲しいのだろ。お金」が欲しけらほしいと、なぜ男らしうスツパリ言はぬのだい」

「斯うしてここに六人も待つてゐるのだから、少々（せうせう）の目くされ金位貫つたつて仕方がないワ。とつとと百兩許（ひゃくりやう）しよこせ、さうすりや、無事（ぶじ）に此關所（このせきしよ）を通過（つうくわ）させてやるワ。淫亂（いんらん）婆奴（ばめ）が……」

「ホ、ホ、妾（わたし）は衆生（しゆじやう）濟度（さいど）の爲（ため）、此世（このよ）に現（あら）はれた眞宗（しんしゆ）の開山（かいざん）【いんらん】上人（しやうにん）ですよ。肉食（にくじき）妻帯（さいたい）、勝手（かつて）たるべしといふ宗門（しゆもん）を開（ひら）いたのだから、別（べつ）に守宮（やもり）別（わけ）さまと手をつないで聖地（せいぢ）を歩（ある）いたつて、靈山（れいざん）の法則（はふそく）に反（そむ）きも致（いた）しますまい。アタ甲斐性（かひしやう）のない。大きな荒男（あらをこ）が六人（ろくにん）も寄（よ）つて、百兩（ひゃくりやう）呉（く）れなんて、よくも言（い）へたものだな、せめて一萬兩（いちまんりやう）出（だ）してくれと何故言（なげ）いはぬのだい」

「一萬兩（いちまんりやう）でも十萬兩（じふまんりやう）でも、請求（せいきう）するこたア知（し）つてゐるが、其面（そのつら）で大きな事（こと）いつたつて、持（も）つて居相（ゐさう）な事（こと）がない。それだから、汝（そなた）の風體（ふうてい）相應（さうおう）に百兩（ひゃくりやう）と云（い）つたのだ」

「ヘン、ソナナ貧乏（びんぱふ）と思（おも）つて下（くだ）さるのかい。コレ御覽（ごらん）、此貯金帳（このちよきんぢやう）にチヤンと一萬兩（いちまんりやう）付（つ）いてゐるでせう。併（しか）し乍（な）ら何程（なにほど）請求（せいきう）したつて、やるやらぬは此方（こつち）の自由（じゆう）だ。そんなら仕方（しかた）がないから、百圓（ひゃくゑん）惠（めぐ）んで上（あ）げませう。今後（こんご）は必（かな）らず必（かな）らず無心（むしん）を云（い）つちやなりませんぬよ」

と云ひ乍ら、百圓束を放り出せば、

「ヤア、これはこれは有難う、三拜九拜、正に頂戴仕ります。どうか又宜しう御願申します」

「嫌だよ、もうこれつ切りだから、覺悟しなさい。サ、守宮別さま、早くお山の頂上迄参りませう」

斯かる所へ十四五人の武装した憲兵警官現はれ來り、バルガン、ガクシーを始め四人の労働者を有無をいはず、ふん縛り、坂路を引立てて行く。お花は之を見るより又守宮別が下らぬ義侠心を出してくれては面倒だと、守宮別の手を無理無體に引張り急坂を登り行く。

(大正一四・八・二〇 舊七・一 於由良秋田別莊 松村眞澄録)

第三篇 開花落花

第一章 狂擬怪（一八一七）

守宮別、お花の兩人は漸くにして檄欖山上に登り、涼しい樹蔭に佇み、風に面をさらし乍らくだけたやうな、嬉しさうな顔をして、暫く抱擁キツスをやつてみると、後の林からバタバタと妙な音がしたので二人はビツクリして猫が交尾むだあとのやうに兩方にパツと三間許り分れて了つた。

何だいな、人をビツクリさして、私は又、お寅さまぢやないかと思つたのに、鷹の奴、本當に私の肝玉をデングリかへしよつたわ

ハ、ハ、ハ、ハ、お寅は昔の高姫の身魂の再來だから、鷹が現はれてビツクリさせよつたのも、【マンザラ】因縁のない事もあるまい、フツフ、ハ、ハ、

ア、いやらしい、あの夕のつく奴に碌なものは一つもありやしないわ。狸に田

吾作にタワケに高姫、まだまだタントタント、【タ】印はあるけれど、氣に喰はないもの許りだわ、それに一番いかな奴は高歩貸、猪飼野の權さまだつて、到頭鬼になつて了つたぢやありませんか

「ウツフ、、、、、同じ【タ】でも高天原は、どうだい」

「その【タ】と此【タ】とはタの種類が違ひますわ」

「叩き潰して喰ふタはどうだい」

「好きな人に叩き潰され、喰はれるのは満足ですわ」

「タゴール博士やスタイル博士はどうだい」

「青目玉の赤髭の毛唐人さまなんて、ネツカラ蟲が好きますせぬわね。初めて自轉倒島からお寅さまと一緒に来た時、旦那さまと英語でペチャペチャ云つてみた毛唐さまも、矢張【タ】がついてみたやうですな」

「ウン、ありやお前、有名なお札博士のスタイルさまと云ふシオン大學の先生だ

よ

「大學の先生ナンテよい加減のものですな。貴方のやうな立派なお方や、私のや

うな美人を、よう認めなかつたぢやありませんか

「何と云つてもお寅の、あのスタイルでは一寸見た所、威厳が無いからのう。私だつて鉛を銀だと云ひ鷺を烏として紹介するのは大變に苦しかったですよ。うすいうすいメツキのかかつた救世主だもの、直に生地が見えるのだから、どうする事も出来なかつたよ。然しお前なら容易に生地は見えまい、何と云つても都育ちだからなア、お寅のやうに山のほ寺の荒屋住ひで年を取つた代物とは、テンで比べ物にならないからな、あの時お前が日出神と名乗つてみたなら、うまくいったかも知れないよ」

お花は嬉しさうに、

「そら、さうでせうね、何程研いても金は金、瓦は瓦ですもの。もし旦那さま、これから私が救世主と名乗つても成功するでせうかな」

「そりや無論の事だ。お前なら大丈夫だ。正札付の救世主だよ」

「これ、旦那さま、物も相談ぢやが、一つお寅さまの向ふを張り、ブラバーサの面皮をむく爲に、新ウライ教を立てようぢやありませんか。そして世界萬民の

救世主と仰がれて見ようぢやムいませぬか」

「そら、面白からう、然し救世主の役はお前か、私か、どちらにしたら宜いか」

「そら、云はいでも、きまつてゐますがな。天照大御神様でも女でせう。平和の

男神と云ふものはありませぬからな」

「いかにも、さう聞けや、さうだ」

「キリスト教だつて聖母マリヤがあしらつてあればこそ、その宗教が天下に擴ま

つてゐるのですよ。佛教だつて阿彌陀さま丈では駄目です。お釋迦さまを産んだ

麻耶夫人もあり、又三十三相具備した觀世音菩薩や辨才天があしらつてあるもの

だから、佛教は燎原の火のやうに世界に燃え擴がり、三千年も立つた今日迄命脈

を保つてゐるのですよ。三五教だつて坤の金神と云ふ女神さまをあしらつてある

ぢやありませぬか。どうしても宗教を開かうと思へや女をあしらはねば駄目です

わ

「さうすると、何だ、世の中はサツパリ女尊男卑にして了ふのだな」

「そら、さうですとも、三五教でさへも靈主體従と云つてゐるでせう。靈は女性を

意味し、體は男性を意味してるぢやありませんか

「いかにも、御尤も、分つてる。ソナナラ、之からお前をお花大明神と崇め奉らう」

「いやですよ、お花なぞと、私は難浪津に咲くや此花冬籠り、今を春べと咲くや木花と、歸化人の王仁博士が歌つておいた、難浪津に生れたチャキチャキのお花ですもの、どうか木花姫命と云つて下さいな、あの雲表に聳えてゐるシオン山を御覽なさい、あの山だつて日出島の富士山に、よく似てるでせう。世界の國人は、あの山を尊稱してシオンの娘と云つてるぢやありませんか」

「ナル程、どうしてもお前は俺よりは役者が一枚上だ。そんなら今日から改めてお前をシオンの娘、木花姫命、新ウライナイ教の大教主と尊稱を奉らうかな」

お花は嬉しさうにニコニコし乍らチツト許りスネ氣分になり、體をプイとゆすつて口に手をあて、

「ホ、ホ、何うなと御勝手になさいませ」

「お氣に入りましたかな、イヤ重疊々々。これで愈三千世界の救世主もきまり新

ウラナイ教の組織も出来たと云ふものだ。サア之から一萬圓の資本を以て大々的活躍を試みようかい」

「これ旦那さま、又しても一萬圓一萬圓と仰有いますが、此一萬圓だつて使つたら、減つて了ひますよ。此金はマサカの時の用意とし、貴方と二人の生活費位は新宗教の所得で補ふやうにせなくちや駄目ですよ」

「何と、お前は大變な經濟家だのう」

「そら、さうですとも、生馬の目をぬくやうな競争の烈しい大都會の眞中で、一文なしから立派な家屋敷を買求め、「あやめ」のお花と云つて満都の有情男子の肝を焦らしたと云ふ兵士ですもの。世の中は經濟を知らなくちや何事も成功しませぬよ。金さへあればバカも賢う見え、貴族院議員だ、衆議院議員だ、國家の選良だと、持て囃されませうがな。矛盾議員だつて、着炭議員だつて、楠の子の墓議員だつて、墓標議員だつて、ヤツパリお金の力ですわ。私だつて文なしの素寒貧だつたら、旦那さまの目には馬鹿に映るでせう。又一層、顔の皺が深く見えるでせう」

「成程感心だ、然し乍らこれから新宗教を樹立しようと思へばチツト許りは資本が要るよ。先づ第一に政府に運動して、宗教獨立の認可を受けねばならぬなり、相當の出資は覺悟せなくちやなるまい。お前だつて一足飛びに世界の救世主となるのだもの、少し位の犠牲は覺悟して貰はなくちやならないよ」

「それや、チツト許り運動費の要る位の事は私だつて知つてゐますわ」

「教が獨立したのも運動費の百萬圓は要つたさうだし、××教の獨立の際も五十萬圓の金を撒いたと云ふ事だ。陣笠議員に出ようとと思つても五萬や十萬の金は飛ぶのだからな。そして萬一、マンが悪くて落選でもして見よ。十萬圓の金を溝に放つたやうなものだ。そして、おまけに落選者の名を天下に吹聴されるのだ。その事を思へば一萬圓の運動費位費つた處で落選する事はないのだから安いものだよ」

「一萬圓も運動費を費つて教主になつた所でつまりませんわ。せめて三千圓位で成功出來ますまいかな」

「そら、さうだ。表から運動と出かけりや、到底二萬や三萬の端金では駄目だが、

そこは運動の方法によつて三千圓でも漕ぎつけない事はない。然し此藝當は俺ぢやなくちや打てない芝居だ」

「そら、さうでせうとも。貴方、手続きをどうしてするお考へですか」

「マア、さうだな。幸に日出島へやつて來られた時、懇意になつたお札博士のスタートルさまも、此大學に居られるし、タゴール博士も今迄二三回も文通をしておいたし、キット成功疑なしだよ。どうしても今の世の中はレツテルの流行る世の中だから博士とか大臣とか華族とかの名を列べて、顧問にせなくちや、嘘だからな」

「前車の覆へるのは後車の警め」と云ふ事がムいませう。何卒博士や大臣、華族を引張込むのなら、手段として止むを得ませぬが、人物のよしあしを調べてかかつて下さいや。三五教の變性女子のやうに、シャツチもない、ガラクタ文學士の鼻野高三さまや、鼻野中將なぞ、ドテライ爆裂弾を抱へ込みて數十萬圓の借金を負はされ、後足で砂かけられるやうな下手な事になつちやつまりませぬからな」

「ソナ事に抜目があるものかい。マア安心したがよからう」

かく話す所へシオン大學の教授を終り、白い帽子を頭に頂き乍ら、太いステッキをついて彼方へ向つてボツボツ歩み出す紳士があつた。守宮別は一目見るより、
「ヤア、お花、あれが有名なタゴール博士だよ。あの人に頼めば大丈夫だからな。
しかし、運動費が先立つから、お前一寸三千圓許り貸してくれないか」
「今、ここに現金は所持して居りませぬ。郵便局に行つて來にや、間にあひませぬわ」

「いかにもさうだつたね。それでは一つ俺が博士に會つて話して見るから、お前が來ると却て、いかないから、一寸ここに待つてゐてくれ。どうやら西坂から歸られるやうだからね」

「この機會を逸せず、早くおつついて掛合つてみて下さいな」

「よし、ソナナラ行つて來る。お花、暫くここに待つてゐてくれ。どこの男が通つても話しちやいけないよ」

と云ひ乍ら横向いてペロリと舌を出し、

「サア愈お花の懷から三千圓の現ナマを引出す手蔓が出来た」

とホクホクし乍ら、タゴールの後を追ふて西坂の下り口へと驅り行く。お花は吉
凶如何にと、片唾をのんで木蔭に佇み、のび上り乍ら様子を見てゐる。守宮別は
タゴールの後から坂を下つて行く。二人の白い帽子が空中を歩いてゐるやうに見
えた。

「もし貴方はタゴール博士ぢやありませんか？」

「タゴールは一寸立止まり、後振り向いて、」

「ハイ、拙者はタゴールです。貴方はどなたでムりますか。ネツカラお目にかか
つた事はムいませぬが？」

「ハイ、私は日出島から宗教視察に参りました守宮別と云ふ海軍軍人でムいます。
シオン大學も仲々立派に建築が出来ましたね。これも全く貴方等のお骨折の結果
でムいませう」

「ハイ、有難う、仲々學校事業と云ふものは思つたよりも費用の要るもので、容
易に完備する所へは行きませぬ。貴方も宗教視察においてになつたのなら、どう
です、シオン大學に入學なさつては」

「ハイ、有難うムいます、此頃一寸許り脳を痛めてみますので、エルサレム病院になりと入院致し、全快しました上お世話になりませう。どうかその時は宜しく
お願い申します」

「ハイ、承知致しました。十分の便宜を圖りますから御安心下さいませ」

「ソナナラ、どうか宜しくお願い致します。貴方の權威と勢望によつて私の目的を達成するやう御盡力下さいませ。お願い致します」

「ハイ、確に承はりました。左様なら」

と輕き挨拶を交し坂道を下り行く。

何事にも疑ひ深い、あやめのお花は實否を探らむものと差足、拔足、守宮別とタゴールの問答を聞かむものとやつて來たが「頼む、承知した」の一言を耳に入
れ、やつと安心しホクホクしてゐる。守宮別は、

「サア、之から、うまくお花をちよるまかさう」

と後振りかへり見れば坂道の木の茂みからお花がニユツと顔を出した。守宮別は

……サア失敗た……、とサツと顔色が變つたが、元來の横着物、そしらぬ顔で、

「ヤア、お花、お前ここへ来て居たのか、博士と私の話を残らず聞いたのだらう」
「ハイ、全部は聞きませなかつたが、流石は守宮別さま、偉いお腕前、お花も感
心致しました、どうやら博士が承知して呉れたやうですな」

守宮別は此言に虎穴を逃れたやうな心持で、ソツと胸を撫で下ろし、鼻の先で
フーンと息し乍ら、

「オイ、お花、俺の腕前は大了なものだらう。かうなりや三千圓の運動費は出さ
ねばなるまい。又お前の懐を虱ぐつて濟まないけどな」

「目的が成就する爲のお金なら、たとへ一萬兩要つたつて構ひませぬわ。サア之
からシオン大學の立派な建築を拜見して歸りませうよ」

「歸らうと云つたつて、靈城を飛び出した以上宿がないぢやないか。一體どこへ
歸るつもりなのだ」

「ホ、ホ、ホ、守宮別さまの初心な事。あんなトルコ亭の路地のやうな處にある
靈城なんか居つたつて、世間の聞きなれが悪くて仕方がありませんわ。堂々と
僧院ホテルの閒借りでもして活動にかからうぢやありませんか」

「成程、そいつは面白い。サア早く歸らう、どうやら機關の油が切れさうだ。酒のタンクが空虚を訴へ出した」

「ホテルに行つて、又シツポリ御酒でも頂きませう、ホ、ホ、」

と笑ひ乍ら橄欖山を下らむとするところへ、靈城の受付をやつてみたヤクがスタスタとやつて來るのに出會つた。ヤクは息をはずませ乍ら、

「ヤアお二人様、大變に探して居りました、サア歸りませう」

「これ、ヤクさま、お寅さまの様子を聞いただらうな」

「ハイ、エルサレムの町を貴方の行衛を尋ねて、ブラついて來ますと十字街頭に黒山の如き人の影、何事の珍事が突發せしかと、人込の中からソツと窺つて見ればお寅さまが目をまかして居る。警察醫が飛んで來て注射したり、いろいろと介抱をした結果、お寅さまがたうとう息を吹きかへしました。トンクとテクの奴、お寅さまを俥に乗せ、自分も後前を俥で警固し乍ら、靈城さして歸り行く姿を確に認めました。又二三日して身體がよくなつたら煩さい事でせうよ」

「これ、ヤクさま、お前は、あれ丈私に毒ついておいて、何しに來たのだい」

「何しに來たつて、貴方の家來にして貰はうと思つたからですよ。職業紹介所へ行つて就職口を世話して貰はうと思ひましたが、あまり澤山な希望者で、三百人の就職口に五千人の希望者があるので、到底お鉢が廻りませぬわ。どうか男一匹助けると思つて使つて下さいな。その代りに碗給で結構でムいますから」

「私は今日改めて守宮別さまと結婚をしたのだから、その積りで居つて下さいや。そしてお寅さまの動靜時々を洞察して報告して下さい。それさへ立派につとまるのならば、番犬を一匹飼ふたと思つて、使つて上げますわ、ホ、ホ、ホ、」

「もしお花さま、否奥さま、番犬とは殺生ぢやありませんか、なア旦那さまと守宮別の顔を見る。」

「フ、フ、フ、フ、マア大切に上げて上げるよ。私と二人に使はれて見なさい。お寅さまのやうなヒドイ使ひやうはせないからな」

「ハイ有難う、お役に立つ事なら、どんな事でも致しませう」

ここに三人は、急ぎ橄欖山を下り、僧院ホテルに宿をとるべく、山麓より自動車にかけて意氣揚々と進み行く。

（大正一四・八・二〇 舊七・一 於由良 北村隆光録）

第一二章 開狂式（一八一八）

守宮別、お花、ヤクの三人は、僧院ホテルの立派なる座敷を、三間ぶつ通しに借り切り、奥の間には、新ウラナイ教の御本尊、シオンの娘、木花咲耶姫を奉齋し、その生宮として、アヤマのお花は天晴教主となり濟ますこととした。發起者は夫婦主從で三人、先づ祭典も無事に濟み、直會の酒宴に移つた。守宮別は新宗教創立を祝する爲め、酒に酔つ拂つた怪しい口元から、祝歌を歌ふ。

天も清淨地も清淨 清淨無垢の御靈體

アヤマの君は今此處に 三千世界の救世主

世界に名高き神の山 シオンの娘木の花の

咲耶さくやの姫ひめと現あれまして

浮瀬うきせに沈しづむ民草たみぐさを

愛あいと善ぜんとの神德しんとくに

御靈みたまを包つつみ信眞しんしんの

光ひかりを世界せかいに輝かがやかし

天あまの岩戸いはとを開ひらかむと

現あらはれ玉たまひし尊たふとさよ

扨さても世界せかいの初はじまりは

神伊邪那岐かむいざなぎの大御神おほみかみ

神伊邪那美かむいざなみの大御神おほみかみ

夫婦ふうふの神かみが現あれまして

天あめの御柱みはしら國柱くにむすし

見立みたてて玉たまひて汝なは右みぎへ

廻めぐらせ給たまへ吾あは左ひだり

廻めぐり合あはむと宣のり給たまひ

婚とつぎの業わざを初はじめまし

諸多あまたの御子みこを生うみ生うみて

生うみの果はてには山川やまかはや

草木くさきの神かみ迄まで造つくりまし

遂つひには光明くわうみやう赫々かくかくと

輝かがやき渡わたる大日婁女おほひるめ

天照あまてる神かみを生うみ給たまひ

廣ひろき世界せかいに神國しんこくを

立たてさせ給たまひし古事ふるごとに

習ならひまつりて吾々われわれは

那岐那美なぎなみ二尊にそんにかたどつて

アヤメの君きみと杯さかづきを

いとり交かはしつ神かみの爲ため

よびと 世人の爲めに聖場を 此の聖地につき堅め

もも 百の人草草木迄 救はむ爲めのこの祭

あゝ惟神々々 アヤメの君があればこそ

ヤクの奴が居ればこそ 守宮別の太柱

添ふて居りやこそ今日のよな 誠に誠に結構な

新宗教の創立が 完全無缺に出来たのだ

もしもお寅が居つたなら 一から百迄蕪から

菜種の屑に至るまで ごとごとごととさし出口

日の出の神の生宮を 振り廻されて吾々は

一生頭が上らない これを思へば此間の

喧譁は却て吾々の 大幸福となつたやうだ

昔の古い諺に 人間萬事塞翁の

馬の糞とはよく云つた 【わいが】の烈しい女神さま

何程御神業と云つたとて 鼻持ならず好物の

酒さへ味が悪くなる
シオンの娘と現れませる

アヤメのお花の教主さま
【わいが】も【とべら】も有りはせぬ

頭に霜は見ゆれども
却て雅趣を添へるよだ

これも全く神さまの
水も漏さぬ御仕組

守宮別も二三十年
若返りたる心地する

あゝ有難い有難い
何より彼より第一に

命の水の酒呑みて
昔の綺麗なナイスをば

座右に侍らし優姿
梅花のやうな唇の

間からチヨイチヨイ現はれる
象牙のやうな齒の光

瑪瑙のやうな爪の色
梅花のやうな頬の艶

天地の幸福一身に
独占したやうな氣がしよる

エへへへへエへへへへ
コンナ所をお寅奴が

一寸覗いた事ならば
嘸や泣くだる怒るだる

二人の髻をひつ掴み
金切聲を張り上げて

近所合壁大騒動

爛徳利は宙に舞ひ

お膳や茶碗はがちやがちやと

木端微塵に潰滅し

嵐の跡の花の山

見る影も無き惨状を

現出するに違ひない

あゝ惟神々々

御靈の恩頼を願ぎまつる

「オホ、、、、、遺はこちの人、何とまア當意即妙の結構なお歌だ事。傍に聞いて居ても胸がすき、頭がせいせいとして來ますわ。なぜ又旦那さまはコンナ知恵を持つて居ながら、今迄隠して居たのですか。鼠とる猫は爪隠すとは能く云つたものだなア。アヤメのお花の一身に對しては、本當に旦那さまは好い掘り出しものだよ」

「これこれ肉宮さま、縁起の悪い、放出し者だなどと云つて貰ひますまいぞや。二つ目には氣に入らぬと云ふて放り出されては耐らないからな」

「ホ、、、、。妾は決して放り出させぬよ。旦那さまの方から放り出ないやう

に頼みますわ」

「よし、そのだんは安心して呉れ。棚池の生洲の蝮がついたやうなものだ。命のない所迄離れつこは無いからな」

「あれ程大切に居られたお寅さままでさへも、弊履を捨つるが如くに思ひ切つて素知らぬ顔をしてゐるのだもの。第二のお寅さまにしたらちや耐りませぬからね」

「そこ迄心配しては際限がない。俺がお前を愛する程度といふものは、丸切り砂糖の固りに蟻がついたやうなものだよ。も一つ違つたら、蛙を狙ふ蛇のやうなものだ、どこ迄も徹底的にくつついて行くのだからなア」

「ホ、ホ、砂糖に蟻がついたなぞと、餘り有難くもありませんわ」

「それでもお花、いや女房、生宮さま、有難いよ。甘いものは「ありがたがる」、【えぐい】ものや苦いものは「ありがたがらぬ」、と云ふ事があらうがな」

「旦那さまは、妾を餘程甘いと見縊びつてゐるのですな。砂糖に譬るとは餘りですわ」

「それやお花は甘いよ、花と云ふ奴みな甘い蜜を持って居るので、蜜蜂やド力蜂がブンブンと喰ひつくぢやないか。俺だつてお花の蜜を吸ひたくなるのは當然だよ。お花は砂糖でもあり、砂糖よりまだ甘い佐渡の土を持って居るから、尚ほ俺が好きなのだよ。エへ、へ、へ、」

「又しても又しても佐渡の土だナンテ、舊めかしい文句を云ふて下さいませ。ホ、へ、へ、へ、」

「これ肉宮さま。今日は創立の祝ひだから、肝腎の生宮さまから宣言歌を歌つて貰ひ度いものですな」

「なんだか銜れくさくて歌へませぬわ」

「へん、何を云ふのだい。矢張り結婚すると、娘のやうに恥かしさが分るのかいな。非が蛇でも、蟻が鯛でも、芋蟲が鯨でも、山の芋が鰻になつても、笹の葉が鱈になつても、今日許りは宣言歌をお謡ひなさらにや駄目ですよ。その歌をつけとめて置いて印刷屋へ廻し、ビラを作つて自動車に乗り、市中へバラ撒かねばならぬからな」

「ナントまア。救世主にならうと思へば氣の張る事だわい。ソナラ シオンの娘、木の花姫の生宮が宣言歌を謠ひませう。一言も漏れなくつけとめて下されや」
「エ、宜しい。承はりました。分つて居る。併し乍ら、ヤクさまの方が餘程筆が達者だからなア。ヤク、お前が一つ筆記役になつて呉れないか」

「ハイ謹みて御用承はりませう」
「ウンよしよし、アこれで謠ひ役に、聞き役、書き役と、三拍子揃ふた。目出度い目出度い、サア生宮様、

歌ひなされやお歌ひなされ

歌ふて御器量は下りやせぬ

あーコリヤコリヤ

と謠ふて立ち上り踊り始める。アヤメのお花は日の丸の扇を両手に持ち、長い裾を引きずつて、すらすらとお手のものの踊を始め出したり。

此處は世界の中心地點

暗の世界もパレスチナの

珍の都のエルサレム

三千世界の梅の花

一度に開く時は来て

前代未聞の救世主

シオンの娘木花の

咲耶の姫が再臨し

アヤメのお花の肉體を

自由自在に使用して

お寅婆さまやブラバーサ

譯の分らぬ宣傳使

瞬く間に打きつけ

至粹至純の聖道を

開くも尊き今日の宵

花も匂へよ蝶も舞へ

千歳の鶴も舞ひ込めよ

龜も這ひ込んで萬歳を

祝ぎまつれ神の家

やがて獨立宗教の

大看板を掲げつつ

三千世界の民衆に

歡喜の雨を濺ぎかけ

正真正銘の救世主

生神さまと謠はるる

其曉も近づいた

龍宮海の乙姫も

今日限り暇呉れて

三十二相又三相

具備し給へる木の花の

姫の尊の肉の宮

アヤメのお花が今茲に

シオンの娘と現はれて

三千世界の隅々も

漏さず落さず救ひ行く

實にも目出度き今日の日は

天澄み渡り地の上は

春の青草萌え出でて

開闢以來の救ひ主

大降臨を待つ如し

思へば思へば有難や

喜び祝へ百の人

慕ひまつれよ救世主

アヤメのお花の肉宮を。

ホ、ホ、ホ、ホ、どうかこれ位で耐らへて頂戴な。何だか恥かしくて後が續きませぬ

もの

『 妙々。天晴々々。天下の救世主だなア。ヤク、お前も感心しただらう。お寅さ

まに比べて、どちらが立派だと思ふか』

『 それやさうですな、本當にさうですよ』

「そりやさうですな、では分らぬぢやないか、どちらが優れて居るかと問ふて居るのだ」

「へエへエ、それやもう、テンで段が違ひますわい、比べものになりませぬがな」

「これこれヤクさま、どちらが優れて居ると云ふのだい」

「ハイ、何と云つても、かんと云つても何ですな。それや矢張り、優れて居る方が優れて居ますなア」

「怪體な事云ふ男だな。ハツキリ云ひなさらぬかいな」

「御本人の前ですもの、大抵にして御推量下さいな」

お花は自分が褒められて居るのだと思ひ、満面に笑を湛へ、目を細め、横目でヤクの顔を一寸見ながら、

「ホ、ホ、ホ、遠はヤクさまは目が高いわい。それでこそ守宮別さまの添へ柱、確

り頼みますぞや」

直會の式も漸く終了し、お花が郵便局から出して来た三千圓の現金を懐中しながら、新宗教獨立の運動をして來ると云ひ残し、守宮別は漂然としてホテルを立

ち出で、タゴールの館へは行かず、驛前の青樓さして登り行く。

（大正一四・八・二〇 舊七・一 於由良秋田別荘 加藤明子録）

第一三章 漆別（一八一—一九）

昨日の暴動騒ぎで、憲兵や警官が血眼になり、行交ふ人を一々誰何して、主義者の入込まない様と、警戒網を張つてゐる。守宮別は新調の洋服を着け乍ら、驛の棟が仄かに見える地点までやつて來ると、一人の警官がツカツカと寄り來り、一寸待つて下さい。身體検査を致しますから」

守宮別は警官よりも何よりも恐ろしいのは、疑深いお花の追跡である。餘り彼方此方をキヨロキヨロと見廻し乍ら歩いてゐたものだから、警官に怪しまれて、首尾よく取つ捉まれたるなりき。

「私は守宮別です。警官に調べられる理由はありませぬ。これでも日出島の高等

武官ぶくわんですよ。餘あまり亂暴らんぼうな事をなさると、帝國ていこく公使館こうしくわんへ訴うったへて、エルサレム署しょの暴ばうじ状やうを曝露ばくろし、國際こくさい問題もんだいを起おこしますよ、そこ放はなして下ください。急用きふようがありますから」
「さう慌あわてるには及およばないぢやありませんか。どうも其處邊そこらをキヨロキヨロ見廻みまはし、おちつきの無い貴方あなたの歩き方ある、舉動きどう不審ふしんと認めみとめますから、一應いちおう身體しんたいを取調とりしらべます」

「取調とりしらべるなら調しらべても宜よろしい。後腹あとばらの病やめないやうに氣きをつけなさいや、へん、人を馬鹿ばかにしてゐる」

といひ乍ながら、自分じぶんからボタンを外はつし、大道だいどうのまん中なかで、赤裸まつばだかとなり、オチコモポホラのヌボも丸出まるだしにして見みせる。

「イヤ、宜よろしい、エー御邪魔おじやまを致いたしました。どうぞ服ふくを着つけて下ください」

「服ふくを着きいと言いはなくとも、俺おれの服ふくだ、勝手かたてに着きるワイ。要いらぬ【おとがい】を叩たたくな」

と云いひ乍ながら、スラスラと洋服やうふくを着つけ、十日程前とをかほどまへにチラツと見みておいた、白首しらくびの居ある青樓指せいろうさきして、一目散いちもくさんに走はしり行ゆく。裸はだかになつた際さい、三千圓入さんぜんゑんいりの蟆口がまぐちを落おとし、氣き

がつかぬ様子なので、警官は何か秘密書類でもあるのではなかるか。日出島の高等武官だと云ひよつたから、軍事探偵かも知れない。軍備に關する秘密書類でもあらうものなら、巡查部長は忽ち警部になれるだらうといふ、いろいろな考へから、ソツと拾ひあげ、本署へ持歸り署長の前で中を検める事とした。守宮別は確にポケットの中に蟻口と共に三千圓入つてゐるものと安心し、鷹揚な態度で、青樓の段階子を上り、三階の見晴よき一間に入つて、頻りに手を叩いてゐる。階下の方に「ハイ」といふ甲走つた女の聲がしたと思へば、間もなく、トントントと段階子を轟かせ上つて來たのは、兼て見ておいた、色白の十七八の美人である。守宮別は俄に口のはたの泡を拭いたり目ヤニを取つたり、鼻をかみたりし乍ら、濟ました顔で控へてゐると、

「お客さま、コンチは、今日はありー……」

「ホ、ホ、何だ今日は有りーと云ふたつて分らぬぢやないか。俺や砂糖ではないぞ、佐渡の土の化身だぞ。モツとハツキリ言はぬかい」

「ハイ、あテイは、總理大臣に呼ばれましたも、知事さまに招ばれましたも、華

族さまによばれましても、今日はアリーで通るのですもの、今のお役人さまは、
官等で一級違ふと、それはそれは偉いものですがな。局長さまの所へ課長さまが
お出になると、直立不動の姿勢で、……ハ、ハ、ハ、ハ、と、かう畏まつてゐやは
ります。局長さまは局長さまで、不行儀な格好で、椅子にのさばり返つて、……
何々の事務は何うなつたか、巧くやつとけよ……と仰有ひます。さうすると、課
長さまは、……ハア、オチ二三式で、怖い様にして下つて行かはりますワ。其局
長さまが大臣の側へ行くと前の課長さまよりも、マ一つエライ謹慎振ですよ。總
理大臣と來ちや剛勢なものですよ。其總理大臣さまがチヨコチヨコ妾を呼んで呉
れやはりますが、イヤもう女にかけたら、ヤクタイなものですワ。おつもの毛を
握つたり、鼻をつまみ、頤髯を掴んでパクパクさして上げてても、顔の相好を崩し
て……コリヤ綾子、無茶をするない……かう仰有るのですもの、絶對無限の權威
を、藝者といふものは具備してゐますよ。それだから、お客さまに、アリー……
といったのは餘程光榮だと思つて下さい

此奴ア面白い、一寸話せるワイ。お前は今綾子といったが、本名は何といふの

だ
」

「ハイ、妾の本名も綾子、源氏名は有明家の綾子さまですよ」

「ナニ？綾子に菖蒲、怪體な事もあるものだな。女に迷ふと【あやめ】も分かぬ眞の暗になるといふ事だが、俺の心もチツと許り【あや】しうなつて来たぞ」

「お客さま、何程【あやめ】が分らなくなつても、綾子しい事さへ無けりや、晴天白日ですワ」

「イヤ、實ア觀世音菩薩綾子の君の艶麗な御容姿を拜觀して、心の土臺が【あやしくグラ付き出したのだよ。オイ、綾子、素面では話が出来ない。酒肴を金は構はないから、充分拵へて持つて来てくれ。そして此處に藝者が何人居るか知らぬが、假令百人居つても結構だ」

「お客さま、ソナ譯にや行きませぬよ。當地の規則として、一人のお客さまに一人より藝者は出す事が出来ませんもの」

「フーンさうか、そら仕方がない。今日は實ア三千圓の散財をせうと思つて来たのだが、ナアンのこつちやい。厭でも應でも流連せねばならぬのか、どれ丈使つ

たつて、一人の藝者に三百圓は使へまい。さうすりや、十日も有明樓の牢獄住居かな、アハ、ハ、ハ、

「牢獄住居なぞと、何仰有います。激戦場裡に立つてゐる紳士紳商、大臣其他の

男さまが、命の洗濯を遊ばす天国浄土ですよ。どうかお金さへあれば、十日など百日など千日など、流連して下さい。其代り妾が手枕して可愛がつて上げますワ」

「ヨーシ来た。此奴ア洒落てる、吾意を得たりといふべしだ。實ア綾子、俺はな十日程以前、此門先を通つた時、お前の姿をチラツと見初めてから、煩惱の犬が

狂ひ出し、寝ても醒てもゐられないので、國許へ電報を打ち、金を送つて貰つて、お前の顔を見に来たのだ。俺の心底もチツトは、汲取つて呉れなくては困るよ」

「あ、さう仰有いますと、十日程以前に、あの有名な氣違婆アさまのお寅さまとかいふ救世主のお伴をして歩いてゐられた、【あもり】とか、【とかげ】とかい

ふお方ぢやありませんか。随分親密相な態度で歩いてゐられましたね。あんな立派な奥さまがあるのに、妾のやうなお多福が相手になつて、もしやお寅さまに嗅

付けられては、妾の命がありませんか。どうか今日は歸つて下さいな。一生のお

願ねがひですもの」

「馬鹿ばかいふな、俺おれは三ヶ月さんかげつ以前いぜん、國許くにもとを出發しゅつぱつし、スイスのゼネバへ、エスペラン
ト會議くわいぎがあつたので、一寸ちよつと覗のぞきに行つた歸りかへがけだ」

「何時いつゼネバからお歸りかへになつたのですか」

「ウン昨日きのふ歸つて來た所ところだ」

「ようマア、お客きやくさま、ソナ嘘うそつ八はちが言はれたものですな、現げんに今妾いまあたに、十日とをかま
前へに妾あたの顔かほを見たみと仰有おつしやつたぢやありませんか」

「そら言ふた。確たしかに言ふた。其十日そのとをかま前はゼネバへ行く道みちすがらだもの」

「成程なるほど、ソナラさうにしておきませう。兔とも角かくお金かねさへ拂はらつて貰もらへば、商賣しやうばいで
すから、金丈かねだけの愛あいは注そそぎますよ」

「オイ早くはや酒さけを持つて來ぬかい、座ざが白しろけて仕方しかたがないぢやないか」
と云つてゐる時ときしも、トントントンと階段かいたんを上のぼる足音あしおとが聞きえ來たりぬ。

「お客きやくさま、お待兼まちかねのお酒さけが來た様やうですワ」

「ヤ、其奴そいつア豪氣がうきだ。早くはや早くはや、待兼山まちかねやまの杜鵑ほととぎすだ」

茲に兩人は喋々喃々と酒汲み交はし、下らぬ話に時を費したり。守宮別も綾子も無敵の上戸連で瞬く間に七八十本の爛徳利をこかして了ひぬ。綾子は酒に酔ふたが最後、仕だらのない女性で、自分の方から、お膳を据ゑるといふ、したたか者である。守宮別は益々笑壺に入り、

「ア、ア、一萬圓の金があれば、一月は悠くり遊べるのになア……」
と私かに歎息をもらし乍ら、會ふた時に笠ぬげ式で、味の悪い蛤を食つた口直しにと、無性矢鱈に上を下への大活劇をやり出した。到當二人は髮の毛から爪の先迄解け合ふて了ひ、切つても切れぬ戀仲となりにけり。

「オイ、綾子、お前は一體どこから來たのだい」

「ハイ妾はエルサレム生れですよ。お父さまが極道だものですから、たうとう妾をコンナ所へ賣つて了つたのです。妾の生れた時は相當な財産家だつたさうですが間もなくお母さまが亡くなられたので、お父さまが後妻を引入れ、朝から晩まで酒池肉林の大騒ぎ、何程金が有つても働かず食つて許り居れば、山さへ無くなる道理、たうとう貧乏のドン底に落ちて、首がまはらぬので、妾を十一の年か

ら、此有明樓へ十年千圓の約束で賣つて了つたのです。本當に困つた親ですワ」

「フーン、話を聞けば聞く程可哀相だ。ヨーシ、俺がキツと助けてやるから心配するな。お前のお父さまといふのは今何してゐるのだ」

「へー、氣違婆アさまと仇名を取つた、お寅さまとかいふ方の、玄關番に雇はれてるといふ事ですが、どうなつたか知りませぬ。此間も旦那さまによう似た男八ンとお寅さまと、妾のお父さまと、この門に立ち、妾を指さしてゐました。アソナニ、あのヤク、……」

といひかけて、俄に口をつめ、

「ソリヤ、ヤク介者だなア。お前の心痛も察する。併し人間は七轉八起といふから心配するには當らないよ」

「ハイ御親切に有難うムいます。旦那さま、何う考へても、お寅さまと一緒に歩いて居られた、守宮別さまのやうに思へて仕方がありません」

「そら世界にや、他人の空似といつて、よく似た者が二人づつあるといふ事だか

ら。それ程又私に能う似た男があつたかいな」

「色の淺黒い、口の尖つた所、目の丸い所、鼻の格好、毛の伸び具合、どつから何處迄瓜二つですワ、妙な事があるものですな」

「綾子、もうソナナこたア、何うでも可いから、一つあつさり唄はうぢやないか」

「どうか一つ旦那さまから唄つて下さいな。そして、旦那さまのお名を聞かして下さいな。旦那さま旦那さままでは、根つから氣が行きませぬからな」

「ウン、俺の名かい、俺の名は……ウン、さうだな、マア、ブラバーサにしておかうかい」

「旦那さまツたら、なまくらな。そら三五教の宣傳使の名ぢやありませんか。意茶つかさずに本當の名を仰有つて下さいな」

「さう短兵急に追及されては、早速に名が出て來ぬワ。マテマテ、急くな、慌てな、せいては事を仕損ずるからなア」

「せかねば事が間に合はず……とかいひましてね、ホ、ホ、ホ、」

「俺の名を聞いて驚くな。吾れこそは、日出の島にて名も高き、ウヅンバラ・チ

ヤンダーといふ者だよ」

「嘘許り、ウヅンバラ・チヤンダーは救世主ぢやありませんか」

「此奴ア失敗った。實は漆別といふのだよ」

「本當ですか、漆別か、うるさい別か知らぬけれど、何だか判然せぬお名前ぢや

ムいませぬか」

「まア何うでも可い。目出度これで歸敬式も濟むだのだから、お前と俺とは神の

許した夫婦だ。何うだ嬉しいか」

綾子はプリンと背を向けて、

「知りませぬ」

「ハ、ア、肝腎の事を忘れて居ったワイ。お愛想をするのを……」

といひ乍ら、ポケットに手を入れて見たが蟆口が無いので、吃驚し、

「ヤ、此奴ア大變だ、失敗ったア……」

「漆別さま、何かお忘れになつたのですかい」

「落したア……、力おとした……。困つたなア……」

「そらお困りですな。警察へお届けになつたら何うです。正直な拾ひ主があつて届けてるかも知れませぬよ」

「實ア、その四辻で警官に怪しまれ、身體検査をやられた時にや、今考へてみると、已に有つてゐなかつたやうだ。どつかで、チボにでもやられたのだろ。併し綾子、俺は斯う見えても、國許では百萬長者の息子だから、電報一つ打てば、一週間経たぬ間に電報爲替で送つてくるから、それまで夫婦になつたよしみで、お前の金で、ここの拂ひを済ましておいて呉れないか」

「ハイ、外ならぬ貴方の事ですから、拂つて置ませう。お金が來たら、屹度來て下さいや」

「ヨシヨシ、お前を忘れてなるものかい。今日俺が此樓主に對して赤恥をかく所を助けてくれたお前だもの、況して切つても切れぬ仲となつたのだもの、之を忘れてたまるものかい。あゝ仕方がない。之から一寸カンラン山を見物して來るか、お前ここに待つてゐてくれ」

「ソナ所へお出遊ばすにや及ばぬぢやないですか。妾の側に居るより、橄欖山

の方が戀しいのですか」

「ナニ、ソナ事があるものかい。お前の側を一刻も離れ度くないのだけれど、懷中無一物では、どうも安心して、世話になつてゐる譯にはゆかぬぢやないか」

「妾と貴方の仲ぢやもの、三日や五日は養ひますもの、マア安心して下さいな」
質に置いてでも、三日や五日は養ひますもの、マア安心して下さいな」

「ヨ一シ、それでは序にモウ二日厄介にならう。實はな、僧院ホテルの第一號室を借切つてあるのだから、そこへ行つて宿れば金が無くて、五日や十日は暮せるのだからな」

斯く兩人は心から打とけて戀仲となり、守宮別は綾子の云つた如く、二晩逗留して三日目の晝頃ブラリブラリと、何くはぬ顔して、僧院ホテルへ歸り來りける。

（大正一四・八・二〇 舊七・一 於由良秋田別莊 松村眞澄録）

お花はヤクと共に、次の間に端坐し乍ら、守宮別の歸館を、今やおそしと待ち構へ居たり。

「これ、ヤクさまエ、旦那さまは宗教獨立運動に行くと言つて、ここを出られたきり、今日で三日目になるのに、まだお姿が見えないのは、チト怪しいとは思ひませぬか。もしやお寅さまの所へでも、あの金を握つたのを幸ひ、ズボリ込みてゐるのぢやなからうかな」

「何おつしやいます。旦那さまに限つて、ソナバカなことなさいますか。あれ程お寅さまに愛想をつかして、ゲチゲチのやうに云つてゐられましたもの」

「それだつて、あの旦那さまはアーンと缺伸をなさつたら險呑だよ。それを境界線として、いつも心機一轉する癖があるのだもの。これから旦那さまが外出される時は、ヤクお前は見えかくれにでも、ついて行つて貰はねばならないよ」

「それまで夫婦間で疑つちや駄目ですよ。夫は妻を信じ妻は夫を信じなくちや本當の夫婦ぢやありませんよ。旦那さまに限つて、ソナバカな事はなさりやしませぬ。此ヤクがキット保証しておきますわ」

かく案じてある所へ、ボーイの案内につれてエルサレム署の警官が、

「守宮別さまは居られますか」

と尋ね来たりぬ。お花は警官の姿を見て、

「八八守宮別の運動によつて教會の獨立が許可になるのだらう。その報告のため上官廳の内命をおびて調査に来たのだな。こりや此際十分高尚に構へて居らねばなるまい」

と思案を定め、俄にオチヨボ口をし乍ら、

「妾こそはシオンの娘、木花咲耶姫命の精靈を宿した大救世主、【あやめ】のお花が肉宮でムるぞや。警官どの、サアサア調べて下され。シオンの娘に間違ひありませんぞや。これ、ヤク殿、守宮別が不在だによつて、そなた代つて、警官殿のお相手をなさつたが宜しからうぞや」

「これはこれは警官様、御苦勞でムいます。あの、何でムいますか。宗教獨立の許可になつたのでムいますかな。小身者のヤクも鶴首して吉報を待つて居ました」

「いや、左様な事で来たのぢやありません。實は、一昨日の夕方、停車場街道で

此方の主人守宮別殿に出會ひ、舉動不審と認めて、警戒の巡查が取調べた所、別に怪しき方でないと判明し、直に放免しました。その後で、大枚三千圓入りの蝋口が落ちてゐるので、本署へ届けて來ました。署長と立會ひの上調べて見ると、僧院ホテル第一號、二號、三號室、守宮別と書いた名刺が這入つてゐましたので、篤と調べた上お返しに參りました。どうか此帳面に印をおして下さい。受取書は、ここに書いて來ましたから」

神さまを装つてみたお花は、此事を聞いて俄に神様の形態をくづして了ひ、ツカツカと警官の傍により、

「これはこれは警官さま、よう、マアおいで下さいました。守宮別さまとした事が、大枚三千圓の金を落とし、言譯がないと思つて、どツかへ逐電なされたのだから。何と云つても氣の良い人だからな。イヤ確に受取ました。どうぞ署長さまに宜しくお傳へ下さい。これ、ヤク、ヤク、門口までお見送りせぬかいな」

警官は受取書に印を貰ひ、ヤクの見送りを拒絶し乍ら足早に歸り行く。

お花はヤクをつかまへて積んだり、くづしたり、守宮別の身の上を案じてゐる

と、そこへ守宮別はブラリブラリと歸つて來た。流石のお花も守宮別の姿を見て、
「どうも白粉臭ひ香がしてゐる、此奴は腹を探つて見ねばなるまい」と早くも覺
悟を極めた。

「女房、今歸つたぞや。アア、酒を一本つけて呉れないか」

「これはこれはよう歸つて下さつた、大變に暇が入りましたな。私心配してゐま
したよ。そして、タゴール博士の方は、どうになりましたか、早く吉報を聞かして
下さいませな」

「ウン、大變好都合だつたよ、あの三千圓の金は、随分働いたものだ。何と云つ
ても世界一の、シオン大學の教授を五人迄動かさし、愈獨立運動の許可が下る處迄
漕ぎつけて來たのだから、マアお花、喜びてくれ」

「これ守宮別さま、女たらしの後家倒しさま、一體お前は、どこへ行つてゐたの
だい」

「どこへ行つたつて？大臣や博士の官宅を歴訪して居つたのだ。三千圓位費つた
つて安いものだらう、目的さへ達成したらいいのだから」

「ヘン、嘘ばかり云つたつて、ソナ事に騙されるお花ぢやありませんか。貴方の頬邊に白粉がついてるぢやありませんか。その白粉はどうしてつけたのですかい。サアその因縁を聞かして下さいな。私も考へがムいますから」

「アア、【おしろ】いへ氣をつけたり、前へ氣を付けたりして舍身活躍をやつて、今塗り立ての大學の白壁にブツつかつたものだから、白くついたのだよ。お前も罰があたるぞや。コンナ夫を持ち乍ら何をゴテゴテ云ふのだい」

「白壁の香と、白粉の香と、嗅分けぬやうなお花ぢやムいませぬよ。ソナゴマかしは、お寅さまには利くかは知れませぬが、此お花には駄目ですよ。サア、キツパリ白状しなさい」

「これは御明察恐れ入りました。實は、博士や大臣をある料亭へ招待し、目的貫徹の爲、心にもない白首を招んでな、杯盤の間を幹旋させたのだよ。そしたら、そそつかしいキーチャンの奴、大臣と俺と間違へて俺の頬邊に吸ひつきよつたのだ。大方、その時、ついたのだらう」

「何、キーチャンが頬邊に吸いついたと？」

と早くもお花の顔には低氣壓が襲來したり。

「これ、守宮別さま、旦那さまと云ひたいが、今日限り改めますよ。その積りであつて下さいよ。色情の道にかけては、オーソリチーの私をバカにしようと思つても、その手は喰ひませぬぞや。大方どつかのスベタ女と、くつついて來たのでせう。これは一體何ですか」

と三千圓の蟆口を守宮別の前に投げ出して見せる。

「お花、これや俺の紙入ぢやないか」

「さうでせうとも、中をあけて御覽なさい。手のきれるやうな、百圓札が三十枚目をむいて居りますよ。ヨウマア大臣や博士を招待したなぞと、ソナナ嘘が言へたものですな。ツヒ、先刻、警察から届けて來てくれたのですよ、お前さま、街路警戒の警官につかまへられて身體検査までやられたぢやありませんか、これでも抗辨なさいますか、これ守宮別さま、お花の體にや息が通つてゐますよ。決して人形ぢやありませんか。お前さまの玩弄になつて堪まりますか。へん阿呆らしい、あまりの事で、ア FUN が宙に迷ひますわ」

「何、お花、確かに三千圓運動費に使つたのだ。俺がな子母仙と云つて仙人の使ふ法を知つてゐるのだよ。此三千圓に一寸魔法をかけて使つたのだから、もとの蟆口を戀しがつて、歸つて來たのだよ。床の下に不思議な蟲が親子棲んでゐたのだ。その親子の蟲をな、俺が捕獲して、三十枚の百圓札には子の血を塗り、蟆口には親血をぬつておいたのだ。それだから、子の血がついてゐる百圓札には、子の靈がかかつてゐるだらう。それだから親の血や魂のかかつた蟆口を慕うて歸つて來たのだ、つまり三千圓のお金を三千圓使つて、あとに三千圓残つてゐるのだから、コンナ結構な仙術はあるまい」

「どこの床の下に、ソナナ蟲が居たのですか」

「ソナナ事ア秘密だ。子母蟲が、……どうぞ貴方限り、秘密にして下さい……、と願ひよつたからの。この秘密を明かすと、これからの仙術が利かないから、發表を見合せておかう。又三千圓もうけねばならぬからのう」

お花は腮をつき出し乍ら、

「子供か、何ぞのやうに、ソナナ嘘は喰ひませぬよ。それが本當なら、蟆口はお

前さまの懐中にありさうなものなのに、それが警察にあるとは思議ぢやありませぬか」

「きまつた事よ。三千圓の運動費を使つた後、俺の懐にある母蟲の靈が呼んだので、仔蟲の靈のかかつた金が、歸つて來たのだ。それをお前、警官に眞裸になつて身體検査をされた時、ツヒ落して了ひ、警官に拾はれたのだ」

「そのお金は、いつ落したのでですか」

「さうだな、エー、昨日、一昨日と昨夜と大臣博士を招待して費つて了ひ、朝になる俺の懐中の蟆口へお金が歸つて來てゐたのだ。それを落したのだよ」

「嘘許り云ひなさるな、警官に調べられたのは、一昨日の夕方ぢやありませぬか。ここを立出て、ステーション街道の方へ行きなさつたでせう」

「アア、もうたまらぬ たまらぬ」

「これこれ守宮別さま、その、アアはまだ早いぢやありませんか。本當の事を云つて下さい。何と云つても、お金がここへ歸つて來て居るのだから、少々せうせうの缺けつ點位てんぐわいあつたつて、不足ふそくは申しませぬわ」

「ア、さう追撃されては落城せざるを得ないわ。實はブチ明けて云ふがな、お花、タゴールさまのお宅を訪ねようと思つてホテルを出たものの何と云つても、祕密運動だから、お邸の方へ足を向けては祕密が曝露すると思ひ、廻り道して、ステーションの方へ行つた所、警官に調べられ、そこで落したのだ。博士に運動したと云つたのは皆嘘だよ。お前に申譯ないからヨルダン川に身を投げようかと思つたが、水が冷たいし、樹に首を吊らうかと思つて枝振のよい木を探したがよい松の木が無く、一層、鐵道往生しようかとレールを枕に待つてゐると、一里も二里も先からレールがドンドンと響くので、刻一刻、死に近づくと思へば恐ろしくなり、エー、死ぬのなら何時でも死ねる、一邊戀しいお前の顔を見てから死んでやろうと、【このやうに】思つて歸つて來たのだ。これが誠の告白だ。どうか、さう、苛めずにおいて呉れよ、頼みだからな」

「ア、さうでしたか、それ聞いてチツト許り安心しました。も一つ合點の行かぬ事がある、それを聞かして貰ひませう」

「合點が行かぬ事とは何だい」

「お前さまの頬邊ほほべたについてみた白粉おしろいの因縁いんねんから聞かして下さいな」

「何と六つかしい事ことだな。ソナナラ詳つづさに言上ごんじやう仕まつらう。實じつは、鐵道てつだう往生わうじやうしようと思つて、レールの上うへをうるついでみた時とき、機關車きくわんしやにはね飛ばされて、傍かたはらの草くさ

原はらに氣絶きぜつして居をつた時とき、どこの女中ぢよちゆうか知らぬが通とほり合あはして、殆ほとんど冷ひえきつた俺おれの身み

體だを肉體にくたいで温ぬくめて、一旦いつたん甦よみがへらして下くださつたのだ。それが本當ほんたうの告白こくはくだよ。ア

眠ねむたい眠ねむたい。酒さけも碌ろくに飲のまして貰もらへず、お白洲しらすの訊問じんもんを受け居をつてもつ

まらぬわい」

「その命いのちを助たすけて下くださつた御婦人ごふじんは何なんと云いふ名なですか。お禮れいに行ゆかねがなります

まいからな」

「ウン、何でも、あや子ことか、おや子ことか云いふ名なだつたよ」

「お處ところは聞きいておいたでせうね」

「ウン、處ところか。處ところが、その處ところを聞きくのをスツクリ忘わすれて了しまつたのだ」

「今いま、旦那だんなさまに承うけたまはれば、あや子ことか仰おつしや有ありましたね。この廣ひろいエルサレムの

町まちに、あや子こと云いふ名なは、私わたしの娘むすめ一人ひとりほかありませぬがな。何なんとマア、神かみさまの

御因縁ごいんねんで旦那だんなさまの命いのちを助けたすさせて頂いただいたのでせう」

「これ、ヤクさま、お前は一人者ひとりものだと思おもつてゐたのに娘むすめがあるのかいな」

「へーへー、お多福娘たふくむすめが、一人ひとりムいます、今いまでは私わたしを親おやのやうに致いたしませぬので、勘當かんだう同様どうやうの中なかになつて居をりますわい」

「エーエもう、いい加減かげんに寝ねたらどうだい、ヤクの奴やつ、やかましいわい。

綾あやの高天たかまの聖場せいじやうで

天人てんにん天女てんぢよが舞まひを舞まふ。

お花はなのやうなよい美人びじん

あや子こも糞くそもあるものか。

あや子このあやはあやめのあやよ

あやと錦にしきの機織はたおり蟲むしが

やつて來きたのはエルサレム

何程なにほど世界せかいの美人びじんでも

あやの名のつくあやめさま

生宮さまには及ばない

ドツコイシヨ　ドツコイシヨ

あゝ今日は頭が痛いから皆揃ふて寝たり寝たり
と布團を被つて空躰をかき、お花の形勢如何と考へてゐる。お花は神前に額き、
神籤をとつたり、卦を立てたりし乍ら、その夜はマンジリともせず、コケコーの
鳴く迄起きて居た。ア、此結果はどう治まるだらうか。暴風怒濤の襲來か、地異
天變か、雷ユサユサ地震ゴロゴロの大椿事の突發か、刮目して次章を待たれむこ
とを。

(大正一四・八・二〇　舊七・一　於由良　北村隆光録)

第一五章　騷淫ホテル(一八二一)

守宮別はお花の形勢如何と、息を殺して考へて居たが、餘り低氣壓の襲來もないので、安心して翌日の十時過まで潰れるやうに寝て了つた。お花はどこやら一腑に落ちぬ所があるので、一目も睡らず角膜を血ばしらして、朝間早くから、ヤクをたたき起し、次の間に座をしめて、稍小聲になり、

「これ、ヤクさま、昨夕お前は綾子と云ふ娘があると云ひましたねえ」

ヤクは……ウツカリ吾子の事を喋り、若し守宮別との關係があらうものなら、板挟みになつて此家に居る事が出来ない。これや呆けるに限る……と腹をきめ、
「ハイ云ひました。併しありや嘘ですよ。つい座輿にアンナ事云つて見たのですよ。ナアニ、私の様な者に半分でも娘があつて耐るものですか。娘さへ有りや、

コンナ難儀はしませぬからな」

お花は長煙管で火鉢の縁を叩き乍ら、頭を左右に振り、

「イエイ工駄目ですよ。お花の目で一目睨みたら、何程隠しても駄目ですよ。サアちやつと云ふて下さい。好い子だからなア」

「何程好い兒だと仰有つても獨身ものの私、好い子も悪い子も、嬢も女房も力力

ンツも、媽村屋も何もありませんわい」

「何と云つても、お前の顔は、一寸澁皮のむけた姫殺しだよ。縦から見ても横から見ても、女にちやほやされるスタイルだ。柳の眉毛にキリリとした目許、黒くろしい目の玉、鼻の恰好と云ひ口許と云ひ、お前のやうな美男子を、捨てる女があるものかいなア。随分女殺をやつたやうな顔だよ。サアサアほんとに云つて下さい。決して守宮別さまに不足は云はない、お前の迷惑になるやうな事はせぬから。守宮別さまのひいきばかりせずに、お花のひいきも些とはして下さつては如何ぢやいな」

「アアアア煩い事だな。お前さまの氣に入れば旦那さまの氣に入らず、旦那様の爲を思へばお前さまに責められるなり、私も立つ瀬がありませんわい」

「ホ、ホ、ホ、夫れ御覽なさい。蛙は口から、たうとう白状なさつたぢやありませんか。綾子と云ふ藝者は一體何處に置いてあるのだい」

「ハイ、もう仕方がありませんわ。併し私が云つた爲めに、夫婦喧嘩でもやられぢや、此處を飛び出すより外はありませんわ。さうすりや、主人を失つ

た野良犬同様、ルンペンするより外ありませぬ。さうすれや可愛い娘の恥にもな

りますし、まさかの時の保証をして貰はにや云ふ事は出来ませぬ」

「ホ、何と如才の無い男だこと。併しお前の立場とすりや無理もない事だ。

それなら、どつとはり込みて百圓札一枚上げるから何も彼も云ふのだよ」

と云ひ乍ら、ヤクの懐へ蟆口から百圓札を一枚取り出してそつと捻込む。

「八、遠はお花さま、三千世界の救世主、シオンの娘、木花咲耶姫の生宮、アヤ

メのお花様、有難く頂戴致します。歸命頂禮謹請再拜謹請再拜」

「これこれ辛氣臭い、ソナ事どうでもよいぢやないか。早く事實を云つて下さ

いな。グツグツしとると守宮別さまが起きて来るぢやないか」

「ハイ、それなら申します。確かに綾子と云ふ娘がムいます。サアこれで許へて下

さい」

「それ御覽、娘があるだらう。妾の目は違ふまいがな」

「いや誠にはや、恐れ入りました。生宮様の御明察、到底匹夫下郎のわ

れわれには、御心底を測知する事は出来ませぬワイ、エへ、へ、へ、」

□ その綾子は一たい何處に居るのだい」

□ へエ、居所迄申上ると約束はしてムいませぬがな」

□ この廣い世の中、確に娘があると云つた所で、居所が分らぬやうな事で何になりますか。さう意茶つかさずと、とつとと云つて下さいな」

□ ソンナラドツとはり込んで、神祕の扉を開きませう。實はその何です。或所に勤め奉公をやつて居ますよ。それはそれは別嬪ですよ。親の口より云ふのは何ですが失禮乍らお花さまのやうな別嬪でも到底傍へは寄れませぬな」

□ 何、別嬪だと、そりや大變だ。その別嬪が何處に居ると云ふのだい」

□ 或所に確に居りますがな」

□ 或所と云つたつて、地名を云はにや分らぬぢやないか」

□ 有る所に居るに定つてゐますがな。無い所に居りさうな筈はムいませぬもの」

□ どのこの國の何處の町に居ると云ふ事を云つて下さい」

□ 成程、併しコンナ事を云ひますと、旦那様におつ放り出されますわ。其時の用意にモウ百兩下さいな」

「エ、欲よくの深ふかい男をとこだな、それ百圓ひやくえん」
と又また放ほり出だす。

「エへ、へ、へ、へ、確たしかに頂戴ちやうだい致いたしました。三千世界さんぜんせかいの救世主きうせいしゆ、大おほ三さん口くの生宮いきみや」

「これこれヤク。ソナナ長ながたらしい事ことはどうでもよい。サ早はやく簡單かんたんに所ありか在かを云いふて下くださいな。助たすけて貰もらつたお禮れいにも行ゆかねばならぬからな」

「ハイ、パレスチナの國くにに居をります」

「成程なるほど、さうだろ さうだろ、處ところはどこだい」

「所ところですかいな。所ところがお前まへさま、所ところをすつかり忘わすれて了しまつたのですよ」

「これヤク、百圓ひやくえん返かへしてお呉くれ。もうお前まへのやうな頼たよりない方かたとは掛合かけあつても駄だ目めだ。これから警けい察さつ署しょへ行いつて探さがして貰もらう。名なさへ分わかればよいのだから、其その百圓ひやくえんを

お返かへし」

とグツと胸倉むなぐらをつかむ。

「メ、メ、滅相めつさつな、これや私わたしの金かねです。たとへ天てんが地ちになつてもこの金かねは渡わたしま

せぬ」

「それならもつと詳しく云はないかいな」

「それならもう百圓下さいな。詳しく云ひますから」

「エ、仕方がない、これで三百圓だよ」

「實は、かう云ふて千圓許りせしめようと思ひましたが、俄に良心の奴弱音を吹

いて、肉體を氣の毒がらしますから、三百圓で辛抱しておきませう。實はステ

ション街道の有明家の綾子と云つたら、界限切つての美人ですよ。サアもう此處

迄いつたら耐へて下さい。もう此上は材料がムいませぬからな」

「いや、よう云ふて下さつた。お前ならこそ、三百圓は安いものだよ。サアこれ

から三百圓が【とこ】守宮別をとつ締めてやらねばなるまい」

と云ひ乍ら他愛もなく寝て居る守宮別のポケットに手を入れて探つて見ると小さ

い名刺が現はれた。お花はそつと吾居間に歸り老眼鏡をかけてよく見れば、六號

活字で、「有明家 綾子」と記してある、さうして横の方に小さい寫眞がついて

ゐる。お花は俄に頭へ血がのぼり、卒倒せむ許りに打ち驚いたが遠の豪傑女、グ

ツと氣を取り直し、手を振はせ乍ら名刺の裏を返して見ると、薄い鉛筆文字で何

かクシヤクシヤと記してある。お花は目が眩み、この文字を讀む事が出来ず、たうとう其場に卒倒して仕舞つた。其處へボーイの案内につれて十七八の花を欺く美人が現はれ來り、

「漆別さまのお部屋は此方でムいますか。有明家の綾子が一寸お目にかかり度いとお傳へ下さいませ」

ヤクは一目見るより吃驚し、

「ヤ、お前は綾子ぢやないか。オイ、コンナ所へ來て呉れては大變だ。どうか歸つて呉れ大變だからな」

「イエ、妾は漆別さまに用があつて來たのですもの。何程親だとして、娘の戀愛迄壓迫する權利はムいますまい」

「これ娘、親の云ふ事をなぜ聞かぬのか」

「ヘン、偉さうに親顔して下さいませなや。お母さまが亡くなつてから後妻を貰つて妾をいぢめさせ、澤山の財産を皆無くして仕舞つて、一人の娘に高等教育も受けさせず、十一やそこらで茶屋へ賣飛ばすと云ふやうな無情冷酷な親が何處に

ありますか、何と仰有つても妾は漆別さまに會はねばなりません」

「漆別さまなぞと、ソナお方は居られないよ。アタ見つともない、女が男を尋ねると云ふ事が有るか、早く歸つて呉れ。のう、私を助けると思つて」

「漆別さまが居なくても構ひませぬ。第一號室のお客さまに遇ひさへすればいいのですもの」

「第一號室は、三千世界の生神、シオンの娘、木花咲耶姫の尊様が祭つてあるのだ。人間なぞは居ないから、サアサア、とつとと歸つて呉れ」

「一號室が差支れや二號室でも三號室でも構ひませぬワ」

「あゝ困つたな、お花さまが今卒倒しとるので好やうなもの、コンナ事になつて來たら、何事が起るか知れやしないわ。ア、一層面倒の起らぬ中に逃げ出さうかな」

「逃げ出さうと逃げ出すまいと、貴方の勝手になさいませ。私は夫婦約束迄した漆別さまに遇ひさへすれば好いのですもの」

「何、夫婦約束迄したと、ヤ、こいつは困つたな。蔭裏の豆も時節が來れば花が

咲く油断のならぬは娘とはよく云つたものだわい」

「定つた事ですよ。朝から晩迄色餓鬼の巷へ、お父さまが打ち込んだのですもの、修學院の雀は蒙求を囀り、門前の小僧は學ばずに經を讀む道理、妾だつて十三の年から戀愛は悟つて居りますわ。ホ、ホ、エ、コンナ没分曉漢のデモお父さまに掛合つても駄目だ。二世を契つた漆別さまに遇へばよいのだよ」

と矢庭にヤクの手を振り放ち三號室に侵入した。見れば、白粉をベツタリことつけた五十餘りの婆アさまが仰向けに倒れて居る。

「何だ、怪體な所だな」

と云ひ乍ら、第二號室のドアを開けて這入つて見ると、グウグウと夜半の夢を見て戀しい男が睡つて居るので、綾子は傍により、

「これ申し漆別様、綾子でムいます。どうか起て下さい。もう何時だと思ふていらつしやるの」

守宮別は綾子の艶しい聲が耳に入つたと見えてムクムクと起き上り、

「ヤ、お前は綾子だつたか、怖い夢を見た。一寸俺はホテル迄歸つて來るわ」

「ホ、ホ、ホ、これ旦那さま、何を寝呆けて入らつしやるの。此處はカトリック僧院ホテルの第二號室ですよ」

「成程さうだつたな。お前又どうして尋ねて來たのだい」

「女房が夫の所へ尋ねて來るのが悪うムいますか、貴方も餘り妾を馬鹿にして下さいますなや。どうも貴方の舉動が怪しいと思つて考へて來て見れば、次の間に怪物のやうな女が寝かしてあるのでせう。あれや大方貴方のレコでせう。エー悔しや残念やな」

と守宮別の顔面目蒐けて所構はず搔きむしる。守宮別の顔には長い爪創が雨の脚の様に額口から咽喉にかけて蚯蚓膨れが出來て了つた。

「あゝ許せ許せ、さう搔きむしられちゃ、痛くて耐らないぢやないか」

「エ、年が若い未通娘だと思つて、妾を馬鹿にしよつたな。サアもう死物狂ひだ。喉首に喰ひついて、命を取らねばおきませぬぞや」

ヤクはドアの外から様子を考へて居たが、何とはなしに形勢不穩なので、開けて入らうとすれど、内部より錠が卸してあるので、一步も進む事が出來ず、ドア

の外そとで地團ぢだん駄踏だふんで居ゐる。内部ないぶでは守宮別やもりわけ綾子あやこの兩人りやうにんがチンチン喧譁げんくわの眞最中まっさいちゆう、守宮別やもりわけは種茄子たねなすを力限ちからかぎり締めしつけられ、……勘忍かんにん々々人殺かんにんひところし……と喚わめきつつ、やつとの事ことで錠ぢやうを外はづし第三號室だいさんがうしつ迄命までいのち辛々からがら逃げ出だした。此物音このものおとに卒倒そつたうして居ゐたお花はなは氣がつき見みれば守宮別やもりわけが若い女わかをんなと組くんづほぐれつ、掴つかみあつて居ゐる。お花はなは、かつと怒いかり、

「コラすべた女奴をんなめ、人の男ひとをとこを取りよつて、覺悟かくごせい。此お花このはなも死物狂しにものぐるひだ」
と綾子あやこの髻たぶさを掴つかんで引ひき廻ます。綾子あやこは守宮別やもりわけとお花はなの兩方りやうはうから苛嘖さいなまれ、

「人殺ひところし々々、お父とうさま助たすけてお呉くれ」

と泣なき叫さけぶ。遠さすのヤクも吾子わがこの危難きなんを見みるに忍しのびず、

「この淫亂いんらん婆ば々奴め」

と拳こぶしを固かためお花はなの頭かしらと顔かほの區別くへつなく、丁々發矢ちやうちやうはつしと打うち据すゑる。キヤーキヤーガタガタバタンバタン、ドタンドタンと時ときならぬ異様いやうの響ひびきに僧院そうゐんホテルのボーイ連れんも、吾先われさきにと階段かいだんを登のぼり來きたり、此奴こいつも亦また入り亂みだれて撲なくり撲なくられ、いつ果はつるとも知しれざれば、ヤクは一層いっそうの事こと、警察けいさつへ訴うったへ出でて應援おうゑんを請こはむと、階段かいだんを驅かけ

下りる折、過つて轉落し、血を吐いて蛙をぶつつけたやうにフンノビで仕舞ひける。

此騷動も、ホテルの支配人が中に入つて、やつと治まり、綾子は有明家へ渡され、お花は暫し負傷の癒る迄、エルサレムの病院に收容される事となりける。

(大正一四・八・二〇 舊七・一 於由良秋田別荘 加藤明子録)

第四篇 清風一過

第一六章 誤辛折 (一八二二)

トルコ亭の細い路地の衝き當りに、お寅が設立しておいた五六七の靈城には、
トク、テクの兩人が、お寅と共に、三人首を鳩めて、ヒソビソと話に耽つて居
る。

「コレ、トクさま、一體あの守宮別さまとあやめのお花は、どこへ行つたのか、
お前どうしても分らぬのかい」

「ハイ、丸で煙のやうな、魔者のやうなお方ですもの、サーツパリ、見當がつき
ませぬがな。併し噂に聞けば、お花さまは守宮別さまと、夫婦約束をしられたと
かいふ話ですよ。一昨日の晩或人から十字街頭で其話を聞きましたので、早速報
告しようと思ひましたが、生宮様の御病中、お氣をもませましては……と實は控
えてをりました」

お寅は顔色を變へ、

「ナニ、二人が結婚した。ソラ本當かいな、ヨモヤ本當ぢやあるまい」

「イエイエ、實際の事云やア、貴方が、何でせう。二人よつて、何でせう。守宮
別とお花さまと手を曳いてやつて来る所を、ペツタリ出會し、肚立紛れに卒倒な

さつたのぢやありませんか。噂で聞いたと云ふのは實はお正月言葉で、實際、私も睦まじ相にして歩いてる所を目撃したのですもの。なア、テク、さうだつたな」

「ウンさうともさうとも、あの時生宮さまがクワアツと逆上して、暈を遊ばし、大地に轉倒されたぢやないか、警察醫がやつて来る、群集は山の如くに出てくるし、もうエライ亂癡氣騒ぎで、やつとの事生宮さまの氣が付き、三臺の俾で、生宮さまの警護をし乍ら、此處へ歸つて來たのですワ」

「なる程、さう聞くと、夢のやうにボーツと記憶に浮んで来るやうだ。ハテナ、コンナ大問題を今迄スツカリ忘れて居たのかいな」

「そらさうです共、エライ發熱でしたよ。昨日迄ウサ言計り仰有つて、吾々二人はどれ丈介抱したか知れやしませぬワ」

「いかにも、憎い憎いあやめのお花奴、十年が間、懇篤な教育をうけ乍ら、師匠の私に揚壺をくはし、おまけに人の男を横領して出て行くとは、犬畜生にも劣つた代物だ。これが此儘見逃しておけるものか。假令兩人天を驅けり地をくぐる共、此生宮が命のあらむ限り、岩をわつても捜し出し、生首かかねがおくものか……」

と面色朱をそそぎ、握り拳を固めて、二つ三つ自分の胸をうち乍ら、又もやパタリと倒れ伏しけり。

「オイ、テク何うせうかな。しまひにや氣違ひになつて了やしまいかな」

「サ、さうだから、守宮別、お花の事はいふないふなと俺が注意するの、トンク汝が輕はずみな事を言ふから、コンナ事になつたのだよ。男の口の輕いのも困るぢやないか」

「それだと言つて、いつ迄もかくしてゐる譯にも行かず、モウ餘程精神が安定したとみたものだから、一寸云つてみたのだよ。俺だつて、コンナになると思や、うつかり喋るのぢやなかつたけれどなア」

「兔も角、冷水でも汲んで、頭を冷してやらうぢやないか。コンナ所で死なれて見よ、俺達が殺した様に警察から睨まれたらつまらぬからな」

「一層の事、今の内にトンクトンク テクテクと逃出したら何うだ、到底駄目だらうよ」

「馬鹿云ふな。ソナ事をせうものなら、益々疑はれて了ふよ。一樹の蔭の雨宿

り一河の流れを汲んでさへ、深い因縁があるといふぢやないか。假令三日でも養つて貰つたお寅さまを見捨てて歸れるものか。そんな不義理な事をする、アラブ一黨の面汚しになるぢやないか。絶対服従を以て主義とする回教のピュリタンを以て任ずる吾々が、ソナ事がどうして出来ようかい。お天道さまが御許し遊ばさないからの」

「そらーあ、さうだ。天道様の御弔ひだ、空葬だ、大いに悪かつた。ヨシ、之からお前と俺と兩人が力を併せ心を一にして、此生宮さまの命を助け、天晴全快して貰つて、此靈城を立派に開かうぢやないか。俺ア之から橄欖山へお寅さまの病氣祈願の爲参つて来るから、お前氣をつけて介抱してあげてくれ」

「そら、可い所へ氣がついた。サ、早く参つて来て呉れ。後は俺が引受けるからな」

「ヨシ、ソナラ之からお参りして来ようよ」

と云ひ乍ら、夕日を浴びて、橄欖山へと登り行く。山上の祠の前に来て見れば、ブラバーサが一生懸命に何事か祈願をこめてゐる。トンクは傍により、

「もしもし貴方は三五教の宣傳使様ぢやムいませぬか」

「ハイ、左様でムいます。貴方はトンクさまぢやありませんか。何時やらはエライ失禮を致しました」

「イヤもう、御挨拶痛み入ります。全く私が悪かつたのでムいますから、どうぞモウソナこたア云はないでおいて下さいませ」

「時にお寅さまは御壯健にゐらつしやいますかな」

「ハイ有難うムいます。實の所は、お寅さまと、お花さま守宮別さまが大喧嘩をせられまして、終局の果にや、守宮別さまはお花さまと一緒に結婚とか何とか云つて、手に手を取つて、面當に靈城を飛び出してはれたものですから、生宮さまの御立腹と云つたら、夫れは夫れは言語に絶する有様でムいました。そこへ受付にをつたヤクの奴、生宮さまの氣のもめてる最中へ毒舌を揮つたものですから、生宮様がクワツとなり、ヤクを叩きつけようと遊ばした其刹那、ヤクの奴、庭篁をひつかたげて飛出し、途中で生宮さまの御面體を泥箒で擲りつけたり、いろいろ雑多の侮辱を加へたものですから、疝の強い生宮様はたうとう逆上してしまひ、

それが元となつて、今では發熱し、ウサ言許り云つてゐられます。こんな鹽梅では、生命もどうやら覺束なからうと存じ、テクに介抱させておき、私は此祠へ御祈願に參つた所でムいます。いやモウエライ心配で困りますワイ」

「話を承れば、實にお氣の毒な次第です。コンナ事を聞いて聞逃す譯にも行きませぬから、平常は平常として、私は靈城へ參りませう。そして一時も早く御全快なさる様に御祈願をさして貰ひませう」

「ハイ、そら御親切有難うムいますが、常平生から、貴方を敵の様に罵つてゐられますから、貴方がお出になつたのをみて、益々逆上し、上も下しもならないやうになつちや却て御親切が無になりますから、何ならお斷りが致したいのでムいますワイ」

「ハ、ハ、非常な御警戒ですな。併し人間といふ者はさうしたものでやムいませぬよ。災難の來た時にや互に助け合ふのが人間の義務ですからな。何程我の強お寅さまだつて、滅多に私の親切を無になさる道理はありませんまい。キツと喜んで下さるでせう。そして之を機會にお寅さまの心を和らげ、同じ日出島から來た

人間にんげんです。和合わがふの曙光しよくわうを認めみとたいと思おもひますから、たつて御訪問ごほうもんを致いたします。』
『へーエ、誠まことに以もつて、お志こころざしは有難ありがたうムいますが。併しかし乍ながら私わたしは知りませぬで、どうか生宮いきみやさまに、私わたしから病氣びやうきの次第しだいを聞きいた、なんて云いつて貰もらつちや困こまりますから。貴方あなたが勝手かつてに御越おこしになつた事ことにしておいて頂いたかねば、後あとの祟たたりが面倒めんだうですから。』

『エ、それなら、私わたしは之これから靈城れいじやうを訪問ほうもん致しますから、トンクさま、貴方あなたはゆつくり御祈願ごきぐわんをなし、エ、加減かげんに時間じかんを見計みはからつて何なにくはぬ顔かほで御歸おかへりなさい。そすりやお寅とらさまだつて、貴方あなたに小言こことはありますまいからな。』

『あ、さう願ねがへば私わたしも安心あんしんです。どうか宜よろしう頼たのみませぬワ。』
ブラバ―サは急いそいで山やまを降くだり、何なにくはぬ顔かほして、トルコ亭ていの細ほそい路地ろぢを傳つたひ、靈城れいじやうへ來きてみると、テクが甲斐かひ々々がひしく頭あたまを冷ひやしてゐる。

『ヤ、これはこれは、テクさまでムいますか。生宮いきみやさまは御不例ごふれいにゐらつしやるのですかな。』

『ハイ、左様さやうです。そして又またお前まへさまは何なんの御用ごようで御出おいでになりました。お前まへさま

の顔見ると生宮さまの御機嫌が益々悪くなり、病氣が又重くなり、トツトと歸つて下され」

「歸らうと思へば、さう追立てられなくても返りますよ。併し乍ら同國人の病氣と聞いて、宣傳使たる私、見逃す譯に行きませぬから」

と云ひ乍ら、枕許にツカツカとより、熱誠籠めて天の數歌を三唱し、大國常立尊、神素盞鳴尊助け玉へ、許し玉へ：と祈願するや、今迄火の如き發熱に苦しみてゐたお寅は嘘ついた様に熱は去り、忽ち起き上り座布團の上にキチンと行儀よく兩手をのせ、

「ハ、これはこれは、何方かと思へば、ブラバーサさまでムいましたか。ようま御親切に来て下さいましたね。私も此間からチツと許り風邪の氣で臥せつてをりましたが、夜前あたりからスツパリと全快致し、モウ寢てゐるのも何だか辛氣臭くて堪らないのですが、日の出さまの御忠告に仍つて、養生の爲、ねて居りました。決してお前さまの算盤の聲で直つたのぢやムいませぬから、へん、どうか恩に着せて下さいますなや。併し乍ら此靈城へお前さまが御参りさして頂いたのも、

ヤツパリ神さまのおかげだよ。此お寅が病氣だといふ噂をパーツと立たせておき、お前さまの心を引く爲に、此生宮をチツと許り苦しめ遊ばしたのだから、必ず必ず仇に思つちやなりませぬよ。結構な結構な御靈城さまへお前さまが大きな顔で参拜出来たのも此お寅がチツと許り悪かつたおかげだ。神様の御仕組といふものは偉いものだな。サ、之からブラバーサさま、チツと我を折つて日出神の生宮を認めて下さい。いつ迄もいつ迄も變性女子のガラクタ身魂にトチ呆けて居つちやダメですよ。神政成就に近よつた此時節に、何の事ですいな。早く改心して、日の出神の片腕となつて、ウラナイ教を開き、天下萬民を塗炭の苦より救つて下さいや」

「ハイ、又考へておきませう。先づ先づ御病氣の御本復と聞いて安心致しました。私一寸用がムいますので、之から御暇を致します」

「ホ、ホ、ホ、ヤツパリ心に曇りがあると、此靈城が苦しうて、あたたまらぬと見えませすワイ。第一靈國の天人のお住居、どうして八衢人足が又ツケリコと居れるものかい、ウツフ、フ、フ」

「お寅さま、餘りぢやありませんか。どこ迄も貴方は私を敵にする考へですか」

「きまつた事ですよ、三千世界の救世主、底津岩根の大彌勒の生身魂、日出神の生宮を認めない様な妄想頑固の身魂を何うして愛する事が出来ませうぞ。日の出様が一生懸命に艱難辛苦を遊ばして、立派な立派な、結構な、心易い、暮しよい、みろくの大御代を建てようと遊ばしてるのに、悪魂の變性女子にとぼけて、此世を亂さうと憂身をやつしてあるお前さまだもの、之位な大きな敵は世界にありませぬぞや。此神は従うて来れば誠に結構な愛のある神なれど、敵對うて来る身魂には鬼が大蛇のやうになる神ぞえ。お前さまの心一つで樂に立派に御用致さうと、苦しめてもがいて地獄落の悪魔の用を致さうと、心次第で何うでもなるですよ。コンナ事が分らぬやうで、へん、宣傳使などと、能う言はれたものですワイ。改心なされ、足元から鳥が立ちますぞや」

「ハイ、有難うムいます。又後して伺ひますから左様なら」

「ホ、ホ、たうとう、八衢人足奴、生宮さまの御威光に打たれて、ドブにはまつた鼠のやうに、シヨンボリとした、みすばらしい姿で、尾を股へはさみて逃げよ

分の悪い。エーエーそこから中がウソウソとして来た。これ、テク、鹽をもつてお出で、お前の體に悪魔が憑いてる、之からスツパリと拂つて上げるからな」

「イヤもう結構です」

といつてる所へ、トンクはドンドンと露地口の細路を威嚇させ乍ら歸り來り、

「ヤア、これはこれは、生宮様、いつの間にかさう快くおなりなさいましたか。私は心配致しまして、テクに貴女の介抱を命じおき、エルサレムの宮へ御病氣祈願の爲に御參拜して來たのです。何と御神徳といふものは、アラ高いものですな」

「それは大きに御親切有難う……とかういつたらお前さまはお氣に入るだらうが、へん誰がそんな事お前さまに頼みました。大彌勒様の生宮、三千世界の救世主、ひのでのかみ日出神の生宮さまの肉體の、病氣を直すやうな神様がどこにありますか、可い加減に呆けておきなさいや」

「オイ、テク、チツと可怪しいぢやないか、病み呆けてゐるのだらうよ」

「マアマア喧しう言ふな、何時迄言つたつて限りがないからな。何と云つても三千世界の救世主様だから、維命、維従うてゐさへすりや可いのだ」

と云ひ乍ら、餘り相手になるなといふ意味を目で知らした。お寅は布團を頭からひつかぶり、スヤスヤと眠に就きぬ。

(大正一四・八・二〇 舊七・一 於丹後由良秋田別莊 松村眞澄録)

第一七章 茶粕(一八二三)

ブラバーサの親切を罵詈と叱咤を以て報ひ、箒で掃出さむ許りの待遇をして追返した。その翌日、狭苦しい靈城の日の丸の掛軸の前に、オコリが直つたやうな調子でお寅はチヨコナンと坐り、祝詞を奏上し始めたり。

(祝詞) 小北の山を始めエルサレムの靈城に神つまります、底津岩根の大彌勒の大神、日出神の命もちて、三千世界の救世主、寅子姫命、つまらぬ餓鬼を腹立ち連の、ヤクザ身魂の爲に、身褰拂ひ玉はむとして、現はれませる荒井戸の四柱の大神、もろもろの曲事罪穢を拂ひ玉へ清め玉へ、ブラバーサ、お花の惡魔を退

け玉へと申す事の由を、天の大神地の大神、底津岩根の神達共に、徳利聞し召せ
と畏みも申す。ミロク成就の大神様、上義姫の大神様、義理天上日出大神様、大
廣木正宗彦命様、木曾義仲姫命様、朝日の豊坂昇り姫命様、岩根木根立彦命様、
天の岩倉放ち彦命様、嚴の千別彦命様、四方の國中彦命様、荒ぶる神様、貞子姫
命様、言上姫命様、その外世に落ちて御苦勞遊ばした神々様、一時も早く世にお
出まし下さいまして、神政成就、萬民安堵の神世が立ちますやう、偏にお願申し
ます。あゝ惟神靈幸倍坐世

ポンポンポンと四拍手し終り、

「これトクさま、もうお茶が沸いただらうな」

「ハイ、夜前から沸いて居りますよ」

「さうかいな、ソナラ一寸、ここへ持つて来ておくれ。久し振りで大神様にお
祝詞をあげたものだから、喉が渴ついて仕方がない。あんまり熱いと舌をやけど
するから、そこは飲みかげんにして、トットと持つて来ておくれや」

「ハイ、今持つて参じます。オイ、テクの奴、早く土瓶をかけぬかい」

「土瓶をかけと云つたつて、夕べの騒ぎで、天にも地にも掛替のない土瓶君、切腹して了つただぢやないか」

「エー、氣の利かぬ、今の中に、それ表の瀬戸物屋へ行つて買つて來るのだ。同じ事なら白湯の沸いたのがあつたら、白湯ぐち買つて來ればいいぢやないか。サアサア、ソツソツト、足音を忍ばせて」

テクは小便しに行くやうな顔してソツと表へ出て了つた。

「これこれ、何を愚圖々々してゐるのだい。早くお茶をおくれと云ふのに」

「ハイ、今差上げます。一寸待つて下さいや」

「何とまあ、早速間に合はぬ男だこと。あまりの愚圖で、可笑うて臍がお茶を沸かしますぞや」

「私だつて夕べの生宮様と、ブラバーサとの掛合を聞いて居つて、臍が夕から茶を沸かして居りますよ。本當にブラバーサの態つたら、なかつただぢやありませんか」

トクは話を横道へ外らし、一寸でも暇を入れて、テクが歸つて來る時間を保

とうとして居る。お寅はブラバーサの攻撃らしい事をトンクが云つたので、喉の
渴いたのも忘れて了ひ、

「そら、さうだろ。お前だつてのう、トンク、あの態を見たら臍がお茶を沸かす
所か、鞆玉まで洋行するだらう」

「へーへー、そらさうですとも。肝が潰れて、おつたまげる所か鞆丸はまひ上る、
お【へそ】は腹がやける程、熱い茶を沸かします。イヤ、モウ、茶々無茶でムい
ましたわい。チャンチャラ可笑しい。何程偉さうに云つても生宮様の前に現はれ
たら、丁度猫の傍へ鼠が来たやうなものです、【ニヤーン】とも【チュ】のお
ろしやうがムいませぬわい。エー、テクの奴、氣の利かない野郎だな。土瓶を折
角買つて来た處で湯が沸く間が五分や十分かかるだらうし、此間何と云つてごま
かしておかうかな」

と口の中で呟いてゐる。

「これこれトンクさま、今小さい聲で云つた事、いま一度、云つて下さい。ごま
かすとは、ソラ、誰をごまかすのだい」

「へー、何でムいます。ブラバーサも立派な宣傳使だと威張つてみますが、生宮様の鼻の息に、もろくも散つた處を考へて見ますと、米粉か胡麻【かす】か、か
るい代物だなア……、とこのやうに云ふたのですわい」

「ホ、ホ、ホ、米粉ぢやのうて、揉み消すのだらう。胡麻米粉ぢや無うて、うまい事
生宮を、【ごまかす】積りだらうがな。ソナ嘘を喰ふやうな生宮ぢやムいませ
ぬぞや」

「イエイエ、決して決して、勿體ない、大彌勒様の生宮を、ごまかすなぞと、人
民の分際として、そんな大それた事が出来すものか。第一、私の頭が世の中の
悪潮流に、もみにもみ潰され、悪者共に、ごまかされ、脳髓が、ひつからびて、
カスカスになつてゐますもの、どうして生宮様のやうに當意即妙の智慧が出来ます
ものかい」

「これ、トンク、早くお茶を、おくれぬかいな」

「ハイ承知致しました。實の處は土瓶の奴、あの、何です。ブラバーサの態度に
呆れたものと見えまして、腮を外し、腹迄破つて、【てこね】て居るのですよ。」

それだから、最も新しい、眞新な、清新な土器を買つて来て、今日の初水を沸かし、進ぜ度いと存じまして、今テクに買ひにやつた所でムいます。どうぞ一寸、お待ち下さいませ」

「いかにも、そりや結構だ、いい處へ氣がついた。何と云つても生宮様のお飲み遊ばす土瓶と、トンク、テクの奴連中と、今迄のやうに一つの土瓶で茶を沸かして居つたのが間違だ。今日から新しくなつて、イヤ誠に結構だ。神様もさぞ御満足遊ばすだらう」

「それに、生宮様、よう考へて御覽なさい。半狂人の曲彦や、お花さまが使つてゐた土瓶ですもの。夕べの騒ぎで、生宮様のお臂を使ひ、神様がお土瓶様を、滅茶々々にお割り遊ばしたのだと、私はこのやうに、おかげを頂かして貰ひますわ」

「成程、お前の云ふ通り、妾の聞く通り、チツとも間違ありますまい。ホ、ホ、かかる處へ、テクは青土瓶をひつ下げて歸り、

「イヤ、これはこれは、お早うムいます。サアお茶が沸きました。どうぞお飲み下さいませ」

「これテクさま、新の土瓶を買つて来て下さつて誠に結構だが、湯を沸かすのなら、何だよ、初めてだから、あまり熱いお湯を沸かすと、お尻が割れますぞや。そして熏べぬやうにせないと、直お前の顔のやうに眞黒になるからな。上等の炭火で沸かして下さいや」

「へー、瀬戸物屋の爺、仲々氣の利いた奴で、新の土瓶で湯を沸かすのは仲々むつかしい、商賣柄、一つ教へてあげませう、と云ひましてな、それはそれは立派な唐木で作つた角火鉢の上に、ソツとのせて、上等のお茶をチヨツトつまみ、ガタガタガタと沸かして呉れました。本當に飲み加減ださうでムいますよ」

「そりや仲々氣が利いてゐる。サア一つこのコツプについて下さい」

「ハイ、承知致しました」

と路地口でソツと垂れ込んでゐた小便の汁を七分許りついで、恭しく手盆に乗せ、おち付き拂つてお寅の前につき出す。お寅は喉が渴いてゐるので、小便とは氣が付かず、飛びつくやうにして、グイグイグイと飲み終り、

「ハ、何だか、妙な香がするぢやないか」

「何と云つても、土瓶が新でムいますから、薬の香がチツトは出るさうです。どうです、も一杯、つぎませうか」

「イヤ、もう結構だ、とは云ふものの、コンナ結構なお土瓶のお新のお茶をお粗末にお取扱する御譯にはお行き申さぬから、も一杯ついで下さい」

「へー承知致しました」

と云ひ乍ら又もやコップに今度は九分五厘迄注いで見た。

「ホ、ホ、何と、色よう出てゐること、エー今日は御褒美に大彌勒の太柱、日出神の生宮のお下りを、お前にも飲まして上げやう。結構な結構なお茶様ぢやぞえ。サア、テクさま、頂いて下さい。滅多に生宮様の口のついたお茶碗で頂くと云ふ事は出来ませぬよ」

「イヤ、もう澤山でムいます。今日は何だか腹が張つて居りますので、水氣は一切、欲しくはムいませぬ」

「このお茶さまはな、御供水も同然だ。生宮が頂けと云つたら、反く事は出来ませぬぞや」

「どうか、おかげを、トンクに譲つてやつて下さいませぬか」

トンクは、テクの奴どうも怪しい、途中で小便でもこいておきやがったのぢやあるまいかと、やや疑ひ初めてみた最中なので、

「ヤー、俺も結構だ。今日は水氣一切飲み度くない。テク、お前が生宮様から頂かして貰つたのだから一滴もこぼさず、御神徳だ、グツと、思ひ切つてやつておき玉へ。俺としては、どうも、何々ぢや、マア自業自得だ。サアサア頂いた頂いた」

「これほど結構なお茶様が、お氣に入らぬのかいな。ソナラ仕方がない、このお茶さまは、下げて、あげる。イヤ、お茶さまは放かしなさい。そして、土瓶を灰でスツクリ中から外迄柄迄、研いておくのだよ」

「ハイ、承知致しました」
と匆々に裏口の溝溜りへ鼻に皺寄せ乍ら打ちあげ、灰と水と篩とで大清潔法を行ひ、チヤンと走りの棚に安置しておいた。

「これ、テク、トンクの兩人、俄かに、干瓢が欲しくなつたから、町へ出て一斤

程買つて来て下さいな」

「ハイ、エー、私一人お使に参ります。お氣に入りのトンクは、どうかお側に於てやつて下さい」

「イヤイヤお前のやうな口穢いものは、一人やると、道で干瓢をしがみて了ふから目方が減つて大變な損害だ。口近いものはヤツパリ行儀のよい、トンクに買つて来て貰はう。その代りにお前は一寸使に行つて下さい。エルサレムのお宮へ、私の病氣が本復したのでお禮詣りにだよ」

テクとトンクは「ハイハイ」と二つ返事で小錢を、引ツつかみ立つて行く。干瓢はツヒ近くの店にあるので、十分たため間にトンクは一斤程買求めて歸つて来た。

「生宮様、えらう遅うなつて濟みませぬ」

「おそい所か、お前は夏の牡丹餅だよ。本當に足が早いぢやないか。使歩きは、お前に限るよ。今日は、この生宮が干瓢を煮いて神様にお供へをしたり、お前にも頂かしたいから手づから、お料理をしませう。テクの奴、エルサレムのお宮へ

詣れと云つておいたのに、又どこに、外れて行くか分らないから、お前、御苦勞だが一寸調べて来て下さらないか」

成程、委細承知致しました」

と云ふより早く、窮屈の皺苦茶婆アの小言を聞いて居るより、外の空気に觸れた方が面白いと、匆々に出でて行く。その後でお寅は干瓢に鰹のだしを入れ、グツグツと膨れる處迄煮き上げ、神様にもお供へをし、自分とトンクとの分をしまひおき、あとの残つた干瓢を、暫らく水に浸し、甘味をぬいて了ひ、再び土瓶の中へつつ込み、シスセーナをやつて、再び火鉢に土瓶をかけ、グツグツとたぎらし、テクの膳を出して、皿に一杯盛つておいた。暫くすると、トンク、テクは怖さうに歸つて來た。

もし生宮様、エー途中でテクに出會ひまして、無事に歸りましてムいます」

ア、それはそれは御苦勞千萬、さア腹が減つただらう、朝御飯を食つて下さい。私もお前さまと一緒に御飯を食らうと思つて、空腹をかかへて待つて居つたのだ

よ

「それはそれは。炊事迄生宮様にさせまして、オイ、テク、頂かうぢやないか。

大彌勒様のお手づからの御料理だ。コンナ光榮は、滅多にあるまいぞ」

「今日は生宮が炊事をするけれど、明日からはトンクさまに願ひますよ」

「はい、承知致しました」

と三人は食卓を圍み、干瓢の副食物で、朝飯をパクつき初めた。

「何とマア、干瓢の味がいいぢやありませんか。何ともかとも知れぬ味が致し
すワ」

「ン、うまいな、然し、チツと臭いぢやないか」

「何、臭いのが價値だ、鰹の煮【だし】の香だよ」

「さうだらうかな」

と云ひ乍ら、お寅もトンクも、甘さうに喰つてゐるので、自分も怪しいと思ひ乍
ら、一切れも残さず平げて了つた。

「ホ、ホ、ホ、これテク、どうだつたい。お前には特別の御守護が與へてあるの
だよ。最前の返禮にな。チツと許り、お報いしたのだから、悪う思つて下さるな

や、ホ、ハ、ハ、ハ、ハ、

テクは小田の蛙の、泣きそこねたやうな面をし乍ら、ダマリ込んで了つた。そこへスタスタ歸つて來たのはツークであつた。

「御免なさい。えらう遅くなつて済みませぬ。只今かへりました。ヤア、トンク、テクお前は、もう歸つてゐるのかい」

トンク「貴様、どこへ行つて居つたのだい。生宮様は大變に立腹してムつたぞ。まるで鐵砲玉のやうな奴だな。出たら歸る事を知らないのだから、困つたものだよ」

「ナニ、大變暇がいつて、すまなかつたが、その代り生宮様に對し、ドツサリとお土産を持つて來たのだ。お釋迦様でも御存じないやうな、祕密を探つて來たのだからなア」

「これ、ツーク、妾におみやげとは、ドンナ事ぢやいな。大方お花と大廣木さまとの祕密でも探つて來たのだらう」

「イヤ、御賢察恐れ入ります。私も實は、ヤクの後をおつかけて參りました所、

行衛ゆくゑが知しれないので申譯まをしわけがないと存ぞんじ、二三日にさんいちアメリカン・コロニーの食しょく客きゃくをやつてゐましたが、大廣木正宗おほひろきまさむねさまとお花はなさまとが、カトリックの僧院そうゐんホテルで新しんウラナイ教けうを立てたられると云いふ事ことを聞きき、ソツと見みに行いつた處ところ、ヤクの奴やつ、階子はしこ段んの下したに大だいの字じになつて、フンのびてゐるぢやありませんか。大勢おほぜいのボーイがよつて、ワイワイ騒さわいでゐる、醫者いしやがで出でて來くる、大變たいへんな騒動さうどうでしたよ」

「何なんと、マア天罰てんばつと云いふものは、恐おそろしいものだな。此この生宮いきみやの面態めんたいを泥箒どろほうきでなくつた報むくひだらうよ。それで一寸ちよつと、溜飲りゅういんが下さりました。どうも神かみさまと云いふものは、偉えらいものだわい。そしてお花はなや大廣木正宗おほひろきまさむねさまの様やう子は聞きいて來こなかつたかい」

「へーへー、聞きくの間まかぬのつて、大變たいへんな事ことが起おこつて居をります。守宮別やもりわけの大廣木おほひろきさまはお花はなさまと結けつ婚こん式しきを擧あげ、新宗しんしうけう教けうを樹たてやうとしてムつた所ところへ、有明家ありあけやの綾子あやこと云いふ白首しろくびが會あひに來きたものですから、お花はなさまと大喧譁おほけんくわが起おこり、大廣木おほひろきさまは種たね茄子なすを引張ひっぱられて目めをまかすやら、お花はなさまは頭あたまを毆なぐられて發熱はつねつし、嚙うき言こと許ばかり云いふので、博愛病院はくあいびやうゐんへ入院にふゐんしました」

「ホ、ホ、何なんとマア神かみさまは偉えらいお方かただな。誠まことさへ守まもりて居をりたら神かみが敵かたきを打う

つてやるぞよと、いつも日出さまが仰有るが、ヤツパリ悪は善には叶ひますまいがな、然し有明家の綾子と云ふ女、氣の利いた奴だ。蹴爪の生えたお花と喧嘩するなぞと、本當に末頼もしい。ドーレ、それでは、守宮別さまの御見舞に行かねばなるまい。所在が分つた以上は、一刻も猶豫は出来ぬ。トンク、テク、お前は神妙にお留守をしてゐて下さい。必ず小便茶なぞを沸かしてはなりませんぞや。これツーク、案内しておくれ」

「ハイ、承知致しました」

と先に立ち出でて行く。お寅はダン尻をプリンプリンと中空に、ブかつかせ乍ら、表街道へ出て、ツークと共に自動車を雇ひ、カトリックの僧院ホテルを指して急ぎ行く。

(大正一四・八・二一 舊七・二 北村隆光録)

僧院ホテルの第二號室には、守宮別と綾子の二人が、喋々喃喃と何事かしきりに喋べり立てて居る。

「これや、綾子、昨日は俺の鞆丸を引張つて締め殺さうとしたぢやないか。それほど憎い俺を、再び訪ねて來るとは合點がゆかぬ。此間の拂ひでも請求に來たのかな」

「私は貴方が、獨身生活をしてゐるお方だと許り思つて訪ねて來ましたのに、化物のやうな女が口の間に寝て居るものですから、嫉けて耐らず、前後を忘れて眞に濟まない事を致しました。どうぞ耐へて下さいませねえ」

「エー、よしよし、過ぎ去つた事は仕方が無いわ。あのお花と云ふ奴、見かけによらぬ淫亂婆アでね。妙な關係になつて、俺も鳥籠桶に足をつきこみたやうな目に遇つて居たのだ。幸ひお前が來て喧嘩して呉れたおかげで、お花も諦めがついてよいと、實は喜びて居るのだ」

「私だつて昨夕はゆつくり貴方と語り明さうと思ひ、親方さまにお暇を願ひ折角やつて來ましたのに、あの騒ぎで戀しい貴方と引きわけられ、有明樓に送り返さ

れた時の残念さ。昨夜は一目も眠めなかつたのですよ。幸ひ私の父が怪我をして床について居るものですから、見舞にやらして呉れと親方にねだり、やつとの事で戀しい貴方のお側に來る事が出來たのですわ。貴方は本當に罪な方ですな。本當は守宮別さままで在り乍ら、私に漆別だなぞと、よう胡麻化されたものですなア。お寅さまとも深い關係があるなり、お花さまとも關係があり、其上又私とも關係をつけ、女に氣を揉まして喜んで居ると云ふ、女蕩しの、後家倒しの勇者だから、本當に私も安心が出來ませぬわ。コンナ氣の多い人、ふツつりと思ひ切らうかと、幾度か思ひ返して見ましたが、どうしたものが罪な貴方が、可愛ゆうて可愛ゆうて、忘れられないのですよ。どうか私を下女になつと使つて、お傍において下さいな。本妻にならうなどと、ソナ欲望は起しませぬからな」

何と云ふお前は立派な女だらう。お前の父親のヤクは、仕方の無い代物だが、何で又アンナ男の胤に、お前のやうな立派な淑女が生れたのだらうかな。まるきり雀が鷹を生みたやうなものだよ」

「ホ、ホ、ホ、私を讚めて下さるのは嬉しうムいますが、肝腎のお父さまをさう

こき下して貰ふと、些と許りお腹の蟲が騒ぎますよ。ねえ旦那さま」

「ヤアこれは失禮、誠に悪かつた。お前のやうな女を女房にしたら、一生の幸福だらうよ。良妻賢母の模範になるかも知れないよ」

「今日の所謂良妻賢母にや成りたくはありませぬわ。良妻賢母などと云つて、孔子とか孟子とか云ふ唐の聖人が、女の道德許り説いて、男の事は些とも云つて居ないぢやありませぬか。第一に良妻とはドンナ型の婦人を指すのか、それから定めて置かねばつまりませぬわ。此事についてちや、女子大學の先生だつて、的確な説明は出来すまい。夫は晩酌の相手や飯焚き許りさしておいて、良妻だと云つて居りますが、私に云はすと、忠實な下女たる事を強要して居るものでせう。小供が悪戯をすれば、お前の躰が悪からと妻君を叱りつける許りで、賢母の何たる事を辨へない男が多いのですわねえ」

「如何にもそれやさうだ。仲々利口な事を云ふわい。それが所謂良妻賢母になるべき資格を持つて居るからだ。オイ綾子、三千世界にお前より外に、私は好きな女はないのだからな。どうだ、これから一つ千辛萬難を排し、戀の勇者となつて

善良な夫婦の模範とならうぢやないか」

「私は善良なる妻として、どこ迄も仕へますが、旦那さまのやうに、澤山な細女をお持ちなさつては、善良な夫とは世間から云つて呉れませぬ」

「それやさうぢや、實に困つた事をしたものだよ。あの執念深いお寅だつて、お花だつて、仲々この儘にしておいて呉れる道理もなし、一層の事病院で死んで呉れるといいのだけれどなア」

「旦那さま、ソナ無情な事がムいますか。私も昨夜は嚇と腹が立ちましたが、家にかへり、よく考へてみました、どれ程旦那さまが戀しても、あれ程年をとられたお寅さまや、お花さまがいらつしやるのに、若い私が獨占すると云ふ譯にはいけません。何程旦那さまが私を愛して下さつても、お二人の方に對してすみませぬもの。私の若い年や美貌で、戀を争ふのなら、何程お寅さまやお花さまが、「かにここ」をこいて氣張られても耐へませぬ。きつと月桂冠は私が取ります、併し人間と云ふものは、そんな我儘勝手は出来ませぬ。どうか、お寅さまと、お花さまの仲を和合させ、仲好う暮して下さいませ。私は下女となつて

忠實に勤めさせて頂きますから」

守宮別は綾子の言葉の意外なるに驚歎し「まじ」まじと顔を打ち守り乍ら、

「ヤア綾子、お前は本當に神様だよ。しかも平和の女神様だ、俺も今迄の心をすつぱり改めて、善良なる夫となるから、どうぞ見捨てて呉れな」

「ハイ、どうして見捨てませう。併し旦那さま、私だつてお花さまだけの年を取つて居りましたら、きつとお花さまのやうに見捨てられたかも知れませぬよ。それを思ふと、お花さまや、お寅さまに氣の毒で耐りませぬわねえ」

かく話して居る所へ夜叉の如き面貌で、ツノ口の案内につれ登つて來たのはお寅であつた。

「ハイ御免なさいませ。憎まれ者のお寅が、お一寸お邪魔を致しましたが、どうか暫くでよろしいから、守宮別様に御面會が願ひとうムいます」

と三號室に立ちはだかつて呶鳴つて居る。守宮別は此聲を聞いて肝を潰し、夜具を頭から引つかぶつて、

「ヤア大變だ、お寅がやつて來た」

と云ひ乍ら身體をビリビリふるはして居る。

「ホ、ホ、ホ、あのまア旦那さまの氣の弱い事。お寅さまが御訪問下さつたぢやありませんか。別にこれと云ふ惡事を遊ばしたのでもなし、正々堂々とお會ひなさつたらどうですか」

「ヤ、煩さい煩さい。留守だと云つて逐歸して呉れ、頼みだから」

「留守でもないのにソナ嘘が申されますか。ソナラ私が代りにお目にかかりませうか」

「おけおけ、又撲りつけられて、病院行をせなくてはならないやうになるぞ。アソナ狂人婆には誰だつて叶はない。況てお前の美しい顔を見よつたら、愒氣の角がますます尖つて、ドンナ目に遇はすか知れやしないわ」

「ホ、ホ、ホ、何を仰有います。女一人と、女一人、何程強いとて知れたものぢやムいませぬか。それなら私がお寅さまに御挨拶に行つて來ます。どうか折を見て御挨拶に出つて下さいませ」

と云ひ乍らドアを開け、三號室に悠々と現はれ見れば、お寅は火鉢の前に座を占

て、すぱりすぱりと煙草を熏らして居る。

「ア、これはこれはお寅さままでムいますか。好くこそ旦那さまを訪ねて上げて下さいました。ちつと許り御不快でやすみて居られますので、私が代つて御挨拶を申上げます。私は有明家の賤しい勤めをして居ります綾子と云ふ藝者でムいます。ふとした事から守宮別さまの御鼻屑に預かり、お世話になつて居ります。どうかお見捨てなく、宜しうお願い申します」

と両手をついて慇懃に挨拶をする。

「お前があの評判の高い有明家の綾子さまですかい。見れば見る程お綺麗なお子です。成程守宮別さまが首つ丈はまつて、呆けられるのも無理はムいますまい」

「素性の賤しい女でムいますから、到底神様の御用をして入らつしやるお方のお傍へは、寄りつけないのですけれど、神直日大直日に見直し聞直されて、赦されて居るのです。私の父がひどく御厄介になりましたさうで、有難う御禮申上げます」

「お前のお父さまと仰有るのは、誰人の事だい」

「ハイ、あの酒喰ひの仕方のないヤクでムいます」

「ナントまア、縁と云ふものは不思議なものだなア。さう聞くとヤクさまの目許

にお前さまの目はよく似て居ますわ。どうして又ヤクさまのやうな男に、コンナ

娘が出来たものだらうかな。時に綾子さま、お前さまは噂に聞けばお花さまを逐

出したと云ふ事だが、私はそれを聞いて本當に痛快に思ひましたよ。どうか精々

死力を盡して、あの悪魔を排除して下さい。守宮別さまの御身の爲だからなア」

「お寅さま、承はりますれば貴方は、守宮別様とは師弟以外の深い深い御關係が

お有り遊ばしたと云ふ事ですが、それや本當でムいますか」

「本當だとも、神様から結ばれた御魂の夫婦だよ」

「それに又お花さまにお譲り遊ばしたのですかい」

「決して譲りませぬ。お花の奴いろいろと奸策を弄し守宮別さまをちよるまかし、

私の男を横取したのですよ。本當に仕方のない賣女ですよ」

「そりや大變お氣が揉める事でムいませうね。御心中お察し申します。私だつて

やつぱし守宮別さまを横取したやうになりますわ」

「そらさうでせう。併し乍ら私の男を貴方は取つたのぢやない。私の男はお花が取つたのだ。お花の男を又お前さまが取つたのだ。それだから私はお前さまに對して感謝こそすれ恨みなどは些とも懷いては居ませぬよ。お前さまがあつたらこされ、私の胸が晴れたのですよ。本當に御器量と云ひ、スタイルと云ひ、お賢い處と云ひ、守宮別さまには打つてすげたやうな御夫婦ですわ、オホ、、、」

「誠にすみませぬ、畏れ入りました」

「これ綾子さま、お花は博愛病院へ入院して居るさうだが、彼奴が歸つて來ても負けちやいけませぬよ。お前さまの美貌と愛嬌とで守宮別さまを蕩かし、お花の方へは一瞥もくれないやうに、守宮別さまの心を翻して下さい。私も力一杯お前さまに應援しますからなア」

綾子「私は貴女に會はず顔がムいませぬ」

と差俯向いて顔をかくす。守宮別は最前から様子を考へて居たが餘りお寅の話ぶりが穩かなのでやつと安心し、アアと缺伸をしながら、三號室に出で來り、

「ヤ、これはこれはお寅さま、ようまあ来て下さいました。些と許り私はお花の奴に鞆丸を締め上げられ、此通り顔は掻きむしられ、蚯蚓膨が出来ましたので、臥せつて居りました。さアどうぞお茶など呑つて下さい」

「ホ、ホ、妙な顔なこと。あまり箸豆なものだから、天罰が當るのですよ。全く日の出さまがお花の手を借りて、貴方を御折檻なされたのだ。よい加減に御改心なさらぬと、怖い事が出来ますよ。又なんであんな色の黒いお花に呆けたのです。大方悪魔に魅られたのでせう」

「お二人様のお話の邪魔になるといけないから、一寸失禮さして頂きます。父が病室を其の間に見舞ふてやりますから」

と粹を利かして此場を退いた。

「これ守宮別さま、なぜお花のやうな【ガラクタ】靈にお前さまは呆けるのだい。私と約束した事を、お前さまは反古にする氣かい」

と胸倉をグツと取つて揺する。

「やお寅さま、御立腹は尤もだが、これには深い深い譯があるのだから、決して

お寅さまを捨てはせぬから、まアとつくりと私の腹を聞いて下さい」

「ヘン、また例の慣用手段を弄し、お寅を胡麻化さうと思つたつて、今日は其手には乗りませぬよ。サ一伍一什を白状しなさい。大それた結婚するなぞと、あまりぢやありませんか」

「まアお寅、氣を落ちつけて私の云ふ事を一通り聞いて呉れ。實はな、お前と私と、かうして日々宣傳をやつて居ても、軍用金があまり豊富でないものだから、立派な家を借る譯にもゆかず、あんな狭い露地の家で、ミロクの御靈城だど何程叫んで見た處で駄目だから、そこでお花の懷中にある一萬圓の金を此方へひつたくり、お前とホテルでも借り、お前と大々の宣傳をやらうと思つて、甘くお花の喉許に入り、八九分成功して居る所だから、さう慌てずに暫く見て居て呉れ。さうすれやお前も私の誠意が分るだらうから、何と云つても金の世の中だからのう」

「なる程、それで分りました。併し祝言の杯したのは、チツと怪しいぢやありませんか」

「誰が心の底から祝言なんかするものかい。そこ迄して見せぬとお花が安心せな

いからだ』

成程、滅多に守宮別さまに、ソナナ馬鹿な事があらうとは思はなかつたですよ。日の出の神さまも矢張偉いわい。仰有つた通りだもの』

守宮別は、
「ハ、ハ、ハ、仕様もない』

お寅「併し乍ら、これ守宮別さま、有明家の綾子に、お前さまは有頂天になつて居るぢやないか』

「なに、お花の氣を揉まして、恪氣の角を生やさせ、二人に競争させて、お花の懐中の一萬圓をおつ放り出させる算段だ。あの綾子は決して俺との間に妙な關係は結びて居ない。彼奴は藝者だから、金さへ遣れや、どんな芝居でも打つ代物だから、俺に惚たやうな顔をして、お花に競争心を起させ、ますますあれの愛着心を強うさせ、一萬兩をおつぱり出させ、お前にそつと渡すと云ふ俺の六韜三略だよ。何と甘いものだらう』

「遠は軍人育ち丈あつて、軍略にかけたら偉いものだ。日の出の神も守宮別の神

謀奇策には舌を捲きませうわいホ、、、[□]

(大正一四・八・二一 舊七・二 於由良海岸秋田別荘 加藤明子録)

第十九章 笑拙種(一八二五)

ブラバーサ、マリヤの兩人は、キリスト再臨の一日も早からむ事を祈願すべく、手を携へて、早朝より橄欖山の祠の前に端坐して祈願をこらしてゐる。そこへヤコブ、サロメの兩人が無我の聲といふ歌を唄ひ乍ら登り來り、ブラバーサの姿を見て、サロメは、

「ヤ、これはこれは神縁淺からずとみえて、又此聖地でお目にかかりましたワ。何うでムいます、其後の御消息は。一度御訪ね致したいと思つてみました、貴方にお別れしてから、アーメニヤ方面へヤコブさまと、世間がうるさいものですから轉居して居りました。先づ御壯健なお顔を拜し、何よりお目出度う存じます」

ブラバーサは、

「ヤア、お珍しうムいます。サロメさま、其後は打絶えて御無沙汰を致しました。先づ先づ貴女も御壯健で何よりでムいます。何時やらもエルサレムの書店で、貴女のお書になつた「鳳凰天に搏つ」といふ小説を拜見致しまして、親しく貴女にお目にかかつた様な思ひが致しましたよ。中々御上手になられましたね」

「ハイ、お恥かしうムいます。どうも此頃は不景氣で書物が賣ないので、どこの書店主もコボして居ります。いつもだつたら随分澤山の原稿料もくれるのですけれど、ホンの鼻糞許りよりくれないので、原稿稼ぎも約りませぬワ」

「サロメさま、ヤコブさま、久しうお目にかかりませぬ。貴女の小説を拜見致しましたが、マリヤが考へますに、あの材料はどうやら橄欖山を中心として取られた様でムいますな」

「ハイ、實ア、貴女とブラバーサさまのローマンスを骨子とし、私とヤコブさまの苦勞話をそこへ拵へてみたのですが、中々思ふ様には行かないのですもの、本當にお恥しうムいますワ」

「サロメさま、私やブラバーサさまを材料にするなぞと、殺生ですワ」

「そら御互様ですよ。ブラバーサさまだつて、日下開山をお出しになつたでせう。

私あれを讀んで、顔がパツと赤くなり、ヤコブさまにどれ程氣兼したか知れませぬワ、ホ、ホ、ホ、」

「何と云つても、一流の文士許りがよつてゐられるのだから、いつも吾々は槍玉に上げられるのですよ。私も筆さへ立たば、マリヤさまとブラバーサさまのお安くない御關係を素破抜きたいのですけれどなア、アハ、ホ、ホ、。實の所は此姫神さまがマ一度橄欖山へ登り、小説の材料を拵へたいと御託宣遊ばすものですから、何か可い種がないかと、はるばるアーメニヤからやつて参りました。今朝の六時にエルサレム驛に安着し、有明家で一寸一服して、今此處へ登つたところでムいまず」

「ヤ、險呑險呑、モウマリヤの事なんか、書かない様に願ひますよ」

「新聞記者だつて、口止料が要るでせう。サロメに對して幾ら出しますか」

「これは恐れ入りました。嘘八百萬圓許り進上致しませう。ホ、ホ、ホ、」

「オイ、姫神さま」

「厭ですよ、ヤコブさま、姫神さまなんて。なぜサロメと行って下さらぬのですか」

「ソんならサロメさま」

「【さま】なぞと、ソんな事厭ですよ」

「ソんなら橄欖山で宜しいかな」

「ソラ サロメの雅號ですよ」

マリヤは、

「ホ、ホ、お仲の好い事、丸切り一幅の小説みた様だワ。あの紅葉山人の金色夜叉を、私読みましたが、随分面白いですね、戀に破れて、金に勝つといふ仕組ですもの」

サロメは、

「ありや、紅葉山人ぢやなくて紅葉山人とよむのですよ。そしてあの小説の名は金色夜叉といふ方が穩當だと思ひますワ」

『著者の名義や書物の讀方位は、何程無學なマリヤだつて存じてをりますが、一寸洒落に言つて見た許しですワ、オホ、、』

『貴方は今日、有明家で一服して來たといはれましたが、有明家には綾子といふ大變な美人が居りますよ。あの綾子を主人公として、一つ小説を仕組まれたら大變面白い物が出来るでせう。一時は幽霊小説や靈界の消息を幾分加味したものが流行しましたが、現今では艶つぽい戀物語が一般の氣に向く様です。人心は非常に惡化し、眞心の土臺が動搖し、生活難の叫びが盛んなる今日では、一層の事、肩の凝らない、面白い、戀愛を加味した讀物が時代に能く向く様です』

『ブラバーサ様、私もさう考へまして、實は材料の蒐集に、久し振りでやつて参りましたのよ』

かく話してゐる所へ、有明家の綾子が一人の箱屋をつれて、しなしなと登つて來た。

ブラバーサは一目見るより、
もし、サロメさま、的さまがやつて來ましたよ。頗る尤物でせうがな』

「成程、あれ位な美人だつたら、餘程もてるでせう。併し乍らヤコブさまやブラバーサさまに、あゝいふ美人を見せるのは目の毒ですワ、ねえマリヤさま」
「そらさうですね、併しあの綾子といふ女は評判の酒くらひで、酔つたが最後、前後を忘れて醜體を現はすのださうです。併し乍ら義理固い事はエルサレム第一との評判ですワ」

「綾子に付いて何か御聞及びの事がムいましたら、サロメに聞かして下さいませぬか」

「大いにムいますよ。日出島から來てゐる、守宮別さまとの關係に付いて面白いローマンスがあるさうです。守宮別といふ男、女にかけたら仕方のない人物で、三角關係はまだ愚か、四角關係の實演をやつてゐるさうですワ」

「ヤ、そりや面白いでせう。サロメも一つ探索してみませうかなア」

「どうやら、あの綾子も此祠へ參る様子ですから、吾々は傍の樹蔭に控えようぢやありませんか」

とヤコブは樹蔭に忍び入る。

「宜しかる」と、一同は十間許り隔つた橄欖樹の、コンモリとした樹蔭に立寄り、橄欖の梢を折つて敷物となし、此處に尻を卸した。有明家の綾子は何の氣もなく、あたり憚らず、祠の前に祈願をこめ出した。

「神様、私は大變な罪を重ねましてムいます。どうぞ許して下さいませ。ぢやと申しまして、どうしてもあの男を思ひ切る事が出来ませぬ。併し乍らあの男には五十の坂をこえた熱心な戀女が二人もムいますから、到底妾は楯つく事は出来ませぬ。又楯ついて人を困らせ、自分が勝利を得ようとは思ひませぬが、何卒々々三人の女が心の底から解合うて、守宮別さまを保護致しますやう、さうして妾はどこ迄も守宮別に見捨てられぬやう願ひます。そして父のヤクは怪我を致しまして、カトリック僧院ホテルに寝てみますが、之も早くおかげを頂いて元の健全な身體になります様、御願ひ致します。又あやめのお花さまも、今御入院中でムいます、一日も早く御全快遊ばす様、妾の爲にお花さまはあの様な目にお會ひになつたのでムいます。又守宮別さまの心を迷はしたのも妾の罪でムいます。どうぞ之もお許し願ひます」

と祈願してゐる所へ、入院して苦しみてゐる筈のお花が比較的元氣よい勢ひで、ス
テツキをつき乍らあわただしく登り來り、綾子が一生懸命に祈願してゐる姿を見
て……何だか不思議な女があるワイ……と首をひねつて考へてゐたが、有明家
の綾子といふ事が分つたので、クワツと逆上せ上り、首筋に手をかけ、猫をつま
みたやうにひつさげ、右の手の拳骨を固めてポカンポカンと打据ゑ、
「コーラ、淫賣女め、ようもようも、人の夫を寝取りよつたな。汝の爲に頭を傷
つけ、私は病院へやられたのだ。ヤツトの事で全快し、お禮參りに來て見れば、
何の事だい。此スベタめ、私を祈り殺さうと思つて……圖太い女だ。さ、どうぞ
や、守宮別を思ひ切るか、返答を致せ」

綾子はビツクリして、

「どうぞお許し下さいませ。私が悪かつたのでムいます」

「ヘン、悪かつたで事がすむと思ふか。男泥棒め、盗猫め、サ、ここであやまり
證文を書け」

「ハイ、仰に従ひ、如何様共致します。併し乍ら鉛筆がムいませぬから、又後し

て書かして頂きませう』

「工、甘い事をいふな、ここに萬年筆がある、紙も貸てやる。お前の手で判然りと書け。立派に……守宮別さまとは關係致しませぬ……といふ事を書きさへすりや、褒美として金を百兩やる。どうぞや、得心だらうの』

「假令百萬兩貰ひましたつて、コンナ事は金づくでは書きたくはありませぬ。餘りお前さまの心が可哀相だから、書いて上げようかと思つてゐるのですよ』

「ナニツ、此淫賣女奴、へらず口を叩くな。わづか一圓や二圓の金で轉ぶぢやないか』

木蔭に潜みて見てゐた四人は、見るに見兼ねバラバラと側により、
「ヤ、貴方はお花さまぢやありませんか。かかる聖場で人を擲つたり、ソナ亂暴な事をなさつては可けませぬよ』

「誰かと思へば、お前は女惚けのブラブラぢやないか。コンナ所へ出て來る幕ぢやない、すつ込んでゐなさい。何ぢや、ヤコブにサロメ、マリヤ、ホ、ホ、色とぼけのガラクタ許りが、ようマア寄つたものだなア』

マリヤは、

「もしお花さま、貴女も色呆けぢやありませんか。此喧嘩も元は色からでせう」

「ヘン、構うて下さるな。此奴ア大事の大事の私の夫を寝取つた、男泥棒だから、

今談判をしてゐる所だ。門外漢のお前さま達が容喙する所ぢやない。すつ込んで

下さい」

ヤコブ「お花さま、貴女は獨身者と聞いてをつたのに、何時の間に夫を有つたの

ですかい。何と人間といふ者は妙な者ですな」

お花は腮を二三寸前へつき出し乍ら、

「ヤコブ様、妙でせうがな。女に男、男に女、兩方から引つついて、天地の神業

を勤めるのは、開闢以來の法則ですよ。お前さまだつて、サロメさまに現つをぬ

かしたぢやないか。ブラバサだつて、マリヤに首つ丈はまつて、女房の有る身

で居乍ら呆けてゐるのだないか。此お花が守宮別を夫に持つたつて、何がそれ程

不思議なのだ」

「不思議ですがな。守宮別さまは貴方のお師匠さまの夫ぢやないか。弟子のお前

さまが師匠の夫を横領するといふやうな、不人情な事が何處にありませんか」

「ヘン、放つといて下さい。之には深い譯があるのだ。お前さま達の知つたこつちやない。此問題は當人と當人でなければ分らないのだ。いらぬ御節介をするより、サロメさまとしつぽり意茶つきなさい。それがお前さまの性に合ふとりますわいな、イヒ、ハ、ハ、ハ」

と小面憎相に又腮をしゃくつて見せる。綾子は此間にお花の隙を伺ひ、逸早く箱屋と共に、木蔭へ身を隠して了つた。お花は綾子の姿が見えなくなつたのに氣がつき、

「ヤア、【すべた】奴、何處に逃げよつた。生首引抜かねばおかぬ……」
と地團太ふみ乍ら、四人の止むるのもふり放し、一生懸命、髪ふり亂し、西坂をトントントンと地響うたせ乍ら降り行く。

四人は一度に岩石でも碎けた様な調子で「ワハツハ、ハ、ハ」と笑ひこける。橄欖山の木の茂みから山鳩が「ウツフ、ウツフ、ウツフ、ハ」と啼いてゐる。

(大正一四・八・二一 舊七・二 於由良海岸秋田別荘 松村眞澄録)

第二〇章 猫鞍干（一八二六）

お寅は守宮別、トンク、テク、ツ一口と共に自動車に乗り、市中の大宣傳を始め出した。そして妙な宣傳歌を刷ったビラをバラまき乍ら、自分等も自動車の上から聲を揃へて唄つてゐる。

㊦ 澆季末法の此世には 諸善龍宮に入り玉ふ

あちら此方に神柱 澤山現はれ来る共

何奴も此奴も偽神だ 特に烈しき偽神は

日の出の島に現はれた 變性女子の瑞御靈

ウズンバラチャングといふ奴だ 其奴の教へを受ついで

海洋萬里を打渡り 神の集まる聖場に

恥も外分も知らばこそ 又ツケリコーと現はれて

國には妻や子もあるに 道義を知らぬブラバーサ

アメリカンコロニーで名も高き
阿婆擦女のマリヤをば

女房氣取で手を曳いて
宣傳なぞとはおぞましや

さめよ悟れよエルサレム
老若男女の人々よ

アンナ ガラクタ宣傳使
何をいふやらミカンやら

坊主頭にキンカンのせて
走つてゐるより危ふい教

ソナ事聞いたとて何になる
正眞正銘の救世主

底津岩根の大彌勒
日出神の生宮が

下つてゐるの知らないか
天地開けた始めより

澆季末法の今の世に
かけて誠の救世主

一人も出て来たことは無い
ナザレのイエス・キリストも

僅三年布教して
學者とパリサイ人の爲

無慘の最後をとげたぢやないか
ソナ神柱が何になる

此世を救はうと思ふたら
水に溺れず火に焼けず

弓も鐵砲も大砲も
たてつかないやうな神力が

なければ誠まことの救世主きうせいしゅ 神かみの柱はしらとはいはれない

眠りねむをさませよエルサレム 必ずかなら迷ふまよなとぼけるな

いよいよ時節じせつが到来たうらいし アフンと致いたさなならぬぞや

皆みなの足元あしもとから鳥とりが立たつ 此世このよは上うへが下したになり

下したが却かへつて上うへとなる 誠まこと一つのウラナイの

神かみによらねば助たすからぬ 三千さんぜん世界の立替たてかへぢや

政治せいぎ宗教しうけうの立直たてなほし 此大任このたいにんを雙肩そうけんに

擔になうて現あらはれ來きた者ものは 日出ひので神のかみの生宮いきみやと

守宮やもり別わけより外ほかにない あゝ惟神かむながらかむながら々々

御靈みたまの恩賴ふゆを蒙かうむれよ 旭あさひは照てる共曇ともくもる共とも

月つきは盈みつ共虧ともかくる共とも 假令たとへ大地だいちは沈しづむ共とも

誠まこと一つの此柱このはしら 此世このよにあれます其間そのうちは

助けたすにやおかぬ神かみの教のり 來きたれよ來きたれ皆來みなきたれ

みたまの清水しみづにかわく人ひと 日出ひので神のかみの生宮いきみやの

尊たふとい教をしへに蘇よみがへ返り
三千世界さんぜんせかいの太柱ふとばしら

人ひとの神かみぢやと仰あふがれて
萬古末代まんごまつだい名なを殘のこせ

橄欖山かんらんさんは高たかくとも
シオンの山やまはさかし共とも

日ひ出での神かみの神しん力りきに
比くらべて見みれば屁へでもない

來きたれよ來きたれ皆みな來きたれ
北きたも南みなみも東ひがしも西にしも

誠まことの神かみの聲こゑ聞きいて
吾靈城わがれいじやうにあつまれよ

春はるは花はな咲さき夏なつ茂しげり
秋あきの稔みのりも豊ゆたかなる

天國てんごく淨土じやうどに生いき返かへり
萬古末代まんごまつだい生いき通どほし

榮さかえを見みむと思おもふなら
凡すべての教をしへをふりすてて

誠まこと一ひとつの大和魂やまとだま
ビク共動ともうごかぬ此道このみちに

皆みなさまさつさと入いるが可よい

と一生いつしやうけんめい懸命けんめいに四方しはう八方はつぱうを驅巡かけめぐつて居ある。そこへ、夜叉やしやの如ごとき勢いきほひで、あやめのお花はな
が走はしつて來くる。守宮別やもりわけは自動車じどうしやをヒラリと飛とびおり、お花はなの後あとを逐おふて、一萬圓いちまんゑん

せしめむものと車をお寅にあづけおき、雲を霞と追っかけて行く。お寅は気が気でならず、うつかりと、ハンドルを握るや否や自動車はまつしぐらに駆出し、瀬戸物屋の店先さして、ドンと許りに衝突した途端に、自動車は逆立ちとなり、大道の真中へ轉覆し、トンク、テク、ツー口の三人は三間許り、はね飛ばされ、ウーソと許り、或は氣絶し、或は悲鳴をあげて苦しみてゐる。お寅も大道の正中へはね飛ばされ、大きなポホラやウツトコを牛の猫鞍を日向に乾したやうな鹽梅式で、のけぞつて了つた。あまたの群集は、『自動車だ、轉覆だ、氣違婆アの遭難だ……』と瞬く間に交通止めになる所まで人垣を築いて了つた。急報に仍つて警官は警察醫を伴なひ、此場に走せ來り、一先づ四人の負傷者を警察用の自動車にのせ、博愛病院さして、砂煙を立て乍らブウブウと走り行く。

(大正一四・八・二一 舊七・二 於由良海岸秋田別莊 松村眞澄録)

第二章 不意の官命(一八二七)

カトリックの僧院ホテルの第三號室には、ヤクが身體の傷も八九分通り全快したのでチヨコナンとして一人留守番をしてゐる。そこへ慌ただしく歸つて來たのは、あやめのお花であつた。

「ヤ、お前はヤク、よう、マア神妙に留守をしてゐて下さつたな。私の留守中に、お寅や綾子は來なかつたかな」

「ハイ鼠一匹、生物と云つては、來たものはムいませぬ」

「守宮別さまは、どこへ行つたのだい」

「へー」とヤクは頭を掻き乍ら、

「奥様の御入院中、お寅さまがおいでになり、何だか嬉しさうにコソコソと話を
して居られましたよ」

「ナーニ、お寅が來た？」

と早くも顔に血を上げて逆上しさうになる。

「もしもし奥さま、來るは來ましたがね、旦那さまに小びどく肘鐵を喰まされて、
實は、コソコソと逃げて去にましたよ。ソリヤ、どうも氣持がよいの、よくない

のつて、溜飲りゅういんが三斗さんと許ばかり下さがつたやうでしたがな□

「イエイエ、そら、嘘うそだよ。先さきの嬢かかは嘘うそつかぬと云いつてな、お前まへが初はじめに云いつた言葉ことばが事實じじつだらうがな。ソナ氣休きやすめ文句もんくにごまかされて、機嫌きげんを直なほすやうなお花はなですかいな。へん、お前まへ迄までがグルになつて、人ひとを馬鹿ばかにして下くださるなや□

「ハイ、トツト、モウ、ネツカラ、ハイ、何なんですな。ソノ、アノ、それぞれ、あの何なんですわい□

「これ、ヤク□

と云いひ乍ながらお花はなは、煙管きせるで火鉢ひばちの框かまちをカンと叩たたき、

「お前まへのやうなガラクタ人間にんげんはトツトと歸かへつて下ください。月給げつきふをやる所どころか、ここの支拂しはらひもチヤンとして歸かへりなさいや。もうお前まへには用ようはないからなア□

とツンとして横よこを向むく。ヤクは俯向うつむいて頭あたまをガシガシとかいてみると、階段かいだんをトントンと響ひびかせ乍ながら、歸かへつて來きたのは守宮別やもりわけである。お花はなは一目見ひとめみるより武者振むしやぶりつきグツと胸倉むなぐらを取りとり、聲こゑをふるはせ乍ながら、

「コゝ、こりや、眞極道奴しんごくどうめ、人ひとを馬鹿ばかにするにも程ほどがあるぢやないか。こりやガ

ラクタ、今日は、どこへ、うるついて居った。あからさまに白状せぬかい」

「こりやこりや、お花、さうやかましよう云つても仕様がないぢやないか。マアそこ放してくれ。俺やお前が橄欖山へ詣つたと聞いて、後を追っかけて来たのだが、ネツカラ姿が見えないので、ここへ歸つて来たのだ。それより外は、どつこへも行つては居ないのだからな」

お花は胸倉を一生懸命に掴み、こつき乍ら、

「こりや極道、人を盲にするにも程がある。お寅と自動車に乗り、宣傳歌を歌つてけつかつたぢやないか。エーエ、辛氣臭い、私やもう之から國許へ歸る。お寅と意茶ついてお暮しなさい」

「そら、さうだ。俺も實は自動車に乗る事は乗つた。然し、之には曰く因縁があるのだ。お寅の奴、失敬千萬な、俺とお前が結婚したのを遺恨に持ちよつてな、お前と俺との宣傳歌を作つて、歌つてるので、業腹で堪まらぬから、自動車からつき落してやらうとヒラリと乗つた所、お前の姿を見たものだから、町をあちこちと探して歸つて来たのだよ。さう惡氣をまはしちや、俺だつてやりきれないぢ

やないか』

『成程、さう聞きやさうかも知れませぬね』

とパツと手を放す。

『ア、これで先づ先づ無罪放免だ。お花大明神、否々木花咲耶姫命様、ようマア助けて下さいました。有難う感謝致します』

『オホ、、、、そしてその宣傳ビラは、お前さま持つてゐるのかい』

『イヤ、慌てて一枚も、ヨウ、とつて來なかつたのだ。然し歌の文句は覚えてゐるよ』

『何分記憶のよい守宮別さまだから、覚えてゐらつしやるのでせう。一寸ここで歌ふて聞かして下さいな』

『よしよし、腹立てなよ』

と云ひ乍ら、口から出鱈目の宣傳歌を謡つて見せる。

『打てよ懲せよ守宮別を、』

打てよ懲せよ、あやめのお花

彼奴二人のガラクタは　この世を亂す惡神だ

と、このやうな事を吐しよるのだよ。怪しからぬぢやないか。一體お寅の奴、半狂亂になつてゐるのだからなア

成程、ひどい事を云ひますね、サアその次を聞かして下さいな

守宮別の大廣木　偽乙姫のお花奴が

大きな山子を企らみて　新ウラナイの教をば

立てて誠のウラナイ教　この靈城を覆へし

天下を取らうと企みある　鬼より蛇よりひどい奴

覺めよ悟れよエルサレム　老若男女の人々よ

誠の誠の神柱　日の出神より外にない

と、コンナ事を吐しよつてな、本當に腹が立つたものだから、一寸自動車に乗り

こみ談判してゐたのだ。お寅の奴、挺でも棒でもいく奴ぢやないわ」

「挺でも棒でも、いかぬ、そのお寅さまが戀しいのだもの、私が知らぬかと思つてコツソリと密約を締結したのでせう。何程孫呉の兵法を用ゐて、お花さまをちよるまかさうと思つても、此一萬圓は一文の生中も渡しませぬよ。ホ、ホ、ホ。この宣傳ビラはどうです」

と懐から四五枚、放り出して見せる。

「成程、こりや……お寅の……撒いたのぢやなからう、文句が違ふぢやないか」

「お寅が撒いたのぢやありませんよ。守宮別と云ふガラクタが撒いたのですよ。

サアこれでも返答がムいまますかな、イヒ、ハ、ハ、ハ」

「イヤ、降参した、お前にやもう叶はぬわい。堪へてくれ、今日限り改心するからな」

「ヘン、どうなつと、勝手になさいませ。改心せうと慢心せうと、お前さまの魂だもの、私はもう愛想が盡きました。以後はモウ關係は致しませぬ。これから國へ歸つて、お前やお寅さまの脱線振を、傘に傘をかけて吹聴しますから、その積

りで居つて下さい、ホ、／＼、／＼、」

守宮別は言句も出ず、當惑してみると、そこへ自動車を横づけにして登つて來たのは、お寅である。お寅は一時氣絶してゐたが、醫師の看護によつて忽ち全快し、又もやお花が守宮別を捉へて、脂下つてゐないかと、取る物もとり敢ず、やつて來たのである。

お寅は此態を見て、

「これはこれはお花さ迄ムいますか、何とマアお仲のよいこと、ホ、／＼、實にお羨ましくムいますわいな」

お花は悪胴を据ゑ、お寅を尻目にかけて乍ら、

「お寅さま、何程愛嬌をふりまいて下さつても駄目ですよ。一萬兩の金は私のものですから、御用に立てる譯には行きませぬわい。ようマア守宮別さまと、ここ迄深く企んで下さいましたね。流石は私の師匠に一旦なつて下さつた生宮様丈あつて、凄い腕前、實に感服致しました。サアサアこの動物を、勝手に喰わへて歸りて下さい、私には、チツとも未練がムいませぬから」

階下にシヤガンでゐたボーイは、米搗バツタ宜しく、もみ手をしたり、腰を幾度も屈め乍ら、

「ハイ、畏まりました」

と先に立ち三號室へ案内した。

「エー、ン、お氣の毒乍ら本署より守宮別さま、お寅さま、お花さまに對し、聖

地の退去命令が出ましたから、どうか此書面に受印をして下さい」

「コリヤ怪しからぬ、退去命令を受けるやうな悪い事をした覚えは無いませぬが

な」

「兔も角、この指令書を読んで御覽なさい。……聖地の風儀を紊し、治安に妨害

ありと認むるを以て、三日以内に聖地を退却すべし。萬一拒むに於ては刑務所に

三年間投入すべきものなり。……と記されてあります。お氣の毒乍ら用意をして

貰はねばなりません」

と三人から受印を取り、靴音高く階段を下りかへり行く。

（大正一四・八・二一 舊七・二 於由良秋田別莊 北村隆光録）

第二二章 歸國と鬼哭（一八二八）

ブラバースはスバツフォードの厚意により、アメリカンコロニーを根據として、マリヤと共に三五教の大宣傳をなし、其名を遠近に轟かし、數多の信者を集めて居た。然るに日の出島における救世主の名聲は、地球上隈なく知れ渡り、旭日昇天の勢で、エルサレムに來た各人は、何れも競ふてブラバースの話を知り、このコロニーへ日一日と數多く集まつて來た。スバツフォードも非常に乗り氣になり、アメリカンコロニーを三五教の出張所となし、自ら陣頭に立つて遠近の布教に出かけて居た。之に反してお寅婆アの日夜の活躍も寸效なく、一人の信者も出來ず、唯徒に狂人婆アの評判を賣つたのみ、市民の笑ひを買つたのみが收穫であつた。加ふるに守宮別、お寅、お花との三角關係が崇つて、遂には其筋の耳に入り退去命令を受くる事になり、三日の後には聖地を後に本國へ歸る事になつたので、ブラバースは俄に氣をいらち、あんな狂人が國へ歸らうものなら、どんな噂を撒くかも知れない。自分は止むを得ずマリヤと關係した缺點もある。放つて

おけば自分の信用迄メチャメチャにせらるるは火を睹るよりも明かだ。これやかうしては居られない。一度聖師にも會つて見たいし、又妻子にも安心させ度いから、彼等に先だち急いで歸國仕度いものだと、スバツフォードに相談して見た。スバツフォードは「一々諾づいて、

成程一度お歸りになつた方がよいかも知れませぬな。肝腎の根據地を蹂躪せらるる恐れが有りますから。併しマリヤさまをどうなされますか」

「ハイ、マリヤさまには夜前篤と事情を打ち明けました處、快く承知して下さいました。遠は信仰生活に生きて居らるる丈あつて、變つた方ですわい。これこの通り私の爲めに離縁状を書いて下さつたから安心を願ひます」

「一寸拜讀さして頂いても宜敷うムいますか」

「ハイ、宜敷うムいます。マリヤさまの誠意がお分りになつて、互の便宜でムいませうから」

スバツフォード聖師は徐に讀み初めた、

一、私事、神様の御縁に依りまして、心にもなき御無禮を致し、今日迄貴方様の第二夫人として仕へて参りましたが、併しこれも貴方様に悪魔の憑依しない様、神様からの御命令を遵奉して来たものです。最早御歸國に際しましては、私の使命もいよいよ果されたと考へますから、後日の證據として此書を書いて貴方にお渡し致しておきます。本國へお歸りになり、お寅さまや、守宮別さまや、魔我彦さまやお花さまなどが私と貴方の關係について、いろいろと悪く吹聴せらるるかも知れませぬ。萬一左様な場合がムいましたら、この書面を聖師様にお見せなさいませ、貴方と私との間は何の雲霧もなく、清淨潔白の間柄でムいます。互に愛し愛され抱擁キツスなどは致しましたが、未だ肉交を行つた事はムいませぬ。これは大神様がよく御存じですから、別に辨解する必要もなからうかと存じます。

年 月 日

アメリカンコロニーのマリヤより

戀しき戀しきブラバーサ様

「なる程立派な御兩人のお志し、ヤ、私もこれ程潔白な間柄とは存じて居りませ何だ。矢張私の心が汚なかつたのでせう、ハ、ハ、ハ。サアサアこれからマリヤさまに来て貰つて、私と三人送別會を開きませう。さうして、コロニーの信者へもお神酒を一杯披露の爲振れ舞ふ事に致しませう」

「長らく御厄介に預かりまして何から何迄御親切に有難うムいます。何れ又近い中に上つて参ります。其時は日の出島の再臨のキリストの現はれたまふ時かと存じます。どこ迄も幾久しく御厚情を願ひませう。随分お壯健で御神業に奉仕して下さいませ」

「三五教の信者はマリヤさまが擔任致しますから、御安心下さいませ」

「ハイ、有難うムいます」

と挨拶して居る所へマリヤは衣紋を繕ひ、出で來り、恭しく兩手をつき、
「聖師様淺からぬ御神縁によりまして、いたらぬ妾、長らくお世話に預かりました。貴方が御歸國遊ばしましても、御教の御趣旨は私が代つて飽迄宣傳致します。又信者に對しても、貴方から教はつた教理を懇々と説き諭し、神政成就の爲め盡

しますから、どうぞ御心配なくお歸り下さいませ』

「ヤ、實に長らく見ず不知の土地へ参りまして、お世話に預かりました。何れ又出直して参りますから、どうぞお身體を大切に御用を勤めて居て下さいませ。明後日のトルコ丸でお寅さま一行は歸國されるさうですから、私は一足先に今晚の汽船アラビヤ丸に乗つて歸らうと存じます。どうか御一同様へ宜しくお傳へ下さいませ。序にマリヤさまにお願ひしておきたいのでムいですが、驛前の有明家の綾子と云ふ藝者は、一旦守宮別と妙な關係が結ばれたと云ふ事でムいます。守宮別が歸國の事となれば、嘸悲觀の淵に沈み、女の小さい心から、無分別の事をするかも知れませぬ。萬一そんな事があつては、日の出島から参りました、吾々宣傳使の責任が濟みませぬから、何卒貴女から一度訪問して慰めて上げて下さい。きつとあの方は貴女のお弟子になるだらうと思ひます』

「ハイ、畏まりました。御心配下さいませな』

「どうやら出帆時刻迄に、一時間よりムいませぬから、今自動車を雇ふておきました。どうか早く乗つて下さい、私も船場迄送りますから』

☐ ハイ、有難う^{ありがた}☐ とブラバ―サは自分の^{じぶん}古い^{ふる}着物^{きもの}や手道具^{てだうぐ}其他^{そのた}の日用品^{にちようひん}を、コ
ロニ―の人々^{ひとびと}に分與^{ぶんよ}すべく頼^{たの}みおき、三人^{さんにん}自動車^{じどうしゃ}に乗^のつて渡船場^{とせんば}へと急ぎ^{いそ}行く^ゆ。
あゝ惟神靈^{かむながらたまちはへま}幸倍坐世^{ませ}。

（大正一四・八・二一 舊七・二 於由良海岸秋田別荘 加藤明子録）

（昭和九・五・二七 王仁訂正）

（昭和一〇・三・一〇 於臺灣草山別院 王仁校正）

）
）
）
）
）
）
）
）

靈界物語 第六四卷下 山河草木 卯の卷下

終り